

秋田県文化財調査報告書 第323集
払田柵跡調査事務所年報2000

払田柵跡

第117・118次調査概要

2001年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

ほつ たのさくあと

弘田柵跡

第117・118次調査概要

2001年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所



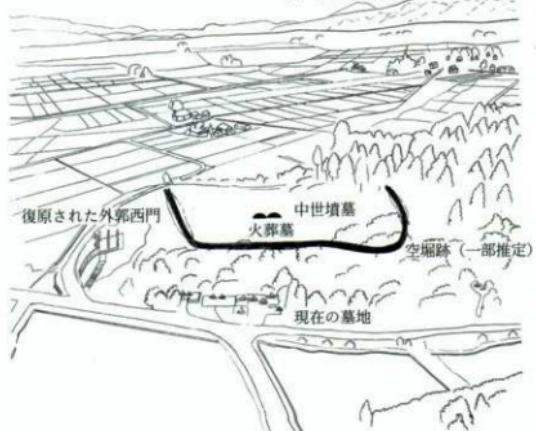
長森丘陵西部全景

(第117次調査区、南側上空より)

平成12年5月10日撮影

この区域には以前より土塁・空堀の存在は知られてはいたが、これが後に検出された中世の墳墓・火葬墓と関連をもつものとは全くの予想外のことであった。丘陵南側麓には現在の墓地があり、何かの因縁を感じる。

駒ヶ岳 (1637m) 白岩岳 (1230m)





中：陶器出土状況（西→）

難な組み方ではあるが、扁平な礎を敷き、その上に陶器を埋設している。高さ16cmの小壺に皿状に加工した擂鉢を蓋としている。左手前の礎は、おそらく縄文時代の擦石を転用したもの。写真は接合・復元後に撮影。

下：藏骨器として使用された陶器

壺内部には土のみが入っていたが、土壤分析の結果「火葬骨を埋納した可能性がある」とされた。遺物は須恵器系中世陶器ではあるが、珠洲産などの県内を含めた東北産であるのかは今後の課題である。

上：墳丘部土層断面（南西→）

矢印の下が現表土直下に埋設された陶器（藏骨器）。ここは周囲よりいくらか高まりをもっているが、陶器が出土しなかったら墳丘をもつ墓とは認識できなかっただかもしれない。写真左手前には本墳墓あるいはSX1265に伴う集積された円礎確認状況。



SX1264墳墓と出土陶器

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備が順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成12年度の調査は、第6次5年計画の2年度目にあたり、政庁域西側の長森丘陵部を精査しました。第117次調査区は、外郭西門東部地域に、第118次調査区は、政庁域外の西側隣接地にあたります。

第117次調査では、9世紀後半～10世紀前半代の竪穴住居跡・竪穴状遺構が9軒見つかりました。これらのうち竪穴状遺構は、鍛冶関連の工房跡と考えられます。

また、払田柵が機能を停止した後の鎌倉時代には、一辺が5m程の隅丸方形の塚（墳墓）が築かれ、陶器の壺を藏骨器として埋納したことも明らかとなりました。さらに下層には縄文時代の竪穴状遺構が少なくとも4軒確認されています。

第118次調査では、昨年度の第115次調査で確認されていた掘立柱建物跡の北側部分が確認できました。また、この建物に伴う板塀跡も検出されました。

本書は以上のような調査成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡等の研究上、資するところが大きいと考えますので、御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体である仙北町、同教育委員会、千畠町教育委員会、ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所長 芳賀 誠

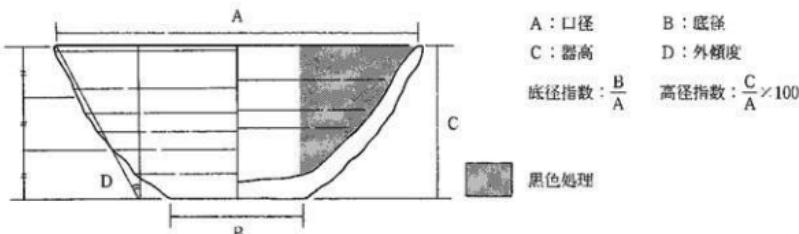
例　　言

- 1 本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成12年度に実施した、払田柵跡第117次調査・第118次調査、調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。
- 2 発掘調査及び本年報作成にあたり、当事務所の顧問である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授・東北歴史博物館館長岡田茂弘氏から御指導いただいた。また次の方々より御教示を得た。記して謝意を表する。
（順不同・敬称略）
坂井秀弥（文化庁記念物課）　品田高志・伊藤啓雄（新潟県柏崎市教育委員会）
工藤清泰（青森県浪岡町教育委員会）　八重樫忠郎（岩手県平泉町教育委員会）
榎原滋高（青森県市浦村教育委員会）　鈴木和子（青森県教育庁文化課）
小山内透（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）　和泉昭一（二ツ井町教育委員会）
柴一郎（秋田県埋蔵文化財センター）
- 3 第3章第3節の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した結果報告を掲載している。
- 4 遺構等の実測図は国土調査法第X座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれより N 7° 30' 00" W であり、真北は N 0° 10' 58" E である。詳細は払田柵跡調査事務所年報1977『払田柵跡－第11・12次発掘調査概要－』（1978年）を参照いただきたい。
- 5 本書の作成・編集は当事務所学芸主事高橋　学が行った。

凡　　例

- 1 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 1997年版』を参考にした。
- 2 本文中ににおける遺物の個体数表記については、坏類では底部が 1 / 2 以上残存する個数を数えたものを示す。
- 3 掘立柱建物跡を構成する柱掘形には、原則的に北東隅柱より時計回りに各柱穴に P 1、P 2、P 3・・・と番号を付し記述する。
- 4 遺構には下記の略記号を使用した。

S B	掘立柱建物跡	S I	竪穴性居跡・竪穴状遺構	S K	土坑
S A	板塀跡	S D	空堀・溝跡	S F	土壙
S N	焼土遺構	S X	墳墓（隅丸方形溝状遺構）・火葬墓		
- 5 坏形土器の計測基準は下図のとおりである。



払田柵跡調査事務所年報2000

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

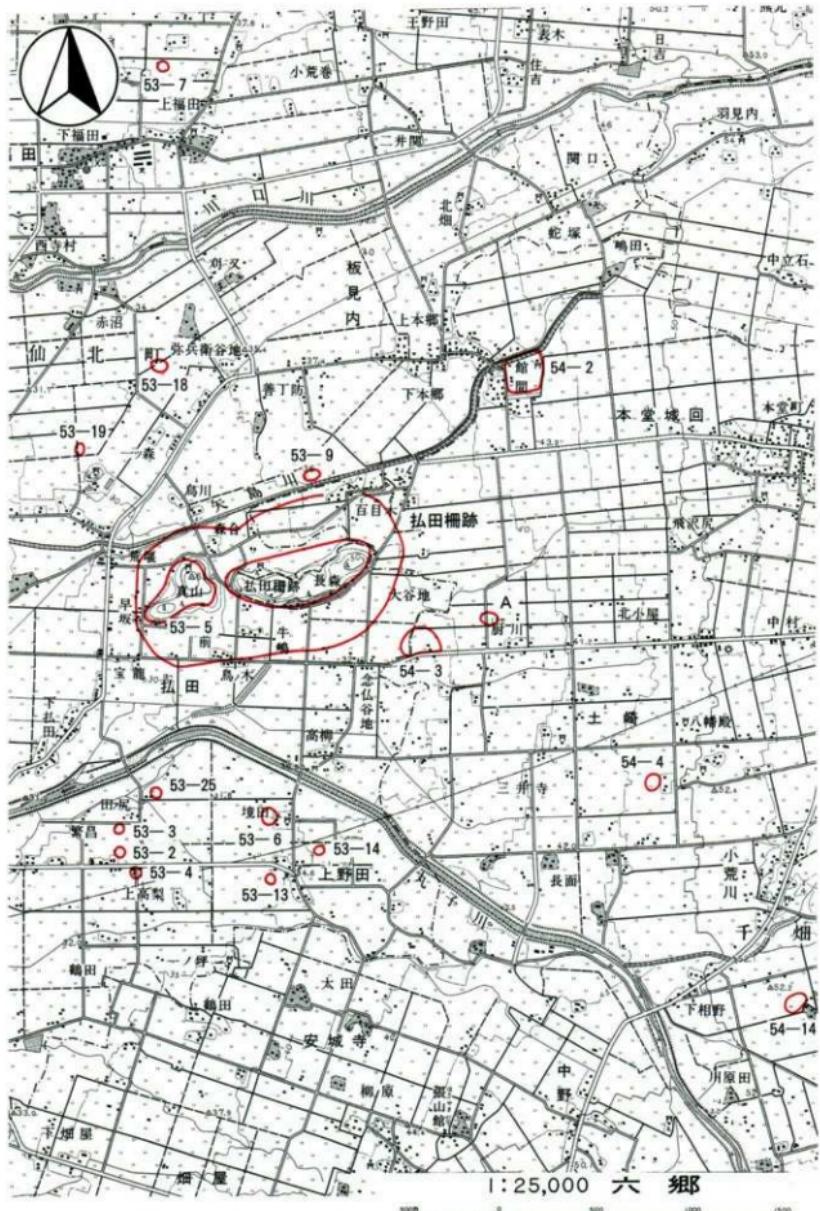
第1章	はじめに	1
第2章	調査計画と実績	3
第3章	第117次調査の概要	5
第1節	調査経過	5
第2節	検出遺構と遺物	8
第3節	自然科学的分析	47
第4節	小 結	55
第4章	第118次調査の概要	74
第1節	調査経過	74
第2節	検出遺構と遺物	74
第3節	小 結	83
第5章	調査成果の普及と関連活動	89

報告書抄録

付図（長森丘陵西部の地形と第117次調査区配置）

○挿図目次○

第1図	払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡	第24図 S X1264墳墓（2）土壙断面図
第2図	払田柵跡調査実施位置図	第25図 S X1264墳墓出土陶器
第3図	平成12年度調査区位置図	第26図 S X1265隅丸方形溝状遺構
第4図	第117次払張区遺構配置図	第27図 土壙・空堀跡・土壙断面図（Cトレント南壁）
第5図	S I 1274堅穴住居跡、S D1303・1304溝状遺構	第28図 S D877空堀跡（1）平面・断面図
第6図	S I 1274堅穴住居跡出土遺物（1）	第29図 S D877空堀跡（2）断面図
第7図	S I 1274堅穴住居跡出土遺物（2）	第30図 S D877空堀跡（3）断面図
第8図	S I 1266堅穴状遺構	第31図 Bトレント内（中央南側）遺構配置図
第9図	S I 1266堅穴状遺構出土遺物（1）	第32図 S I 1269・1282・1285堅穴状遺構
第10図	S I 1266堅穴状遺構出土遺物（2）	第33図 S I 1282堅穴状遺構出土遺物
第11図	S I 1280・1281・1292堅穴状遺構、S K1279・1306 土坑（1）平面図	第34図 S I 1270堅穴状遺構、S K1275・1293土坑
第12図	S I 1280・1281・1292堅穴状遺構、S K1279・1306 土坑（2）土壙断面	第35図 S K1296・1298土坑
第13図	S I 1288堅穴状遺構	第36図 遺構外出土遺物（1）土師器・須恵器・中世陶器
第14図	S I 1289堅穴状遺構、S K1290土坑	第37図 遺構外出土遺物（2）繩文土器
第15図	S I 1281・1288・1289堅穴状遺構出土遺物	第38図 中世遺構群の立地
第16図	S I 1295堅穴状遺構	第39図 外郭西門西方水田出土の下駄
第17図	S I 1295堅穴状遺構出土遺物	第40図 第118次調査区遺構配置図
第18図	S K1271～1273・1276・1286土坑	第41図 S B1222獨立性建物跡
第19図	S K1273・1302土坑出土遺物	第42図 第118次調査区検出遺構
第20図	S D1305溝状遺構	第43図 S K1315土坑出土遺物
第21図	S D1268・1277溝状遺構	第44図 遺構外出土遺物（1）土師器・須恵器
第22図	S X1264墳墓とS X1265隅丸方形溝状遺構全体図	第45図 遺構外出土遺物（2）平瓦
第23図	S X1264墳墓（1）平面図	第46図 遺構外出土遺物（3）繩文土器
		第47図 第115・118次調査区における建物と板塀の配設
		第48図 政府東方域E類の遺構配置略図



第1図 扉田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第1章 はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畳町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（鳥川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

明治35・36年（1902・1903）の千屋坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39年（1906）頃から開始された高梨村（現仙北町）耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解されたのが、遺跡解明の端緒となつた（註）。

昭和5年（1930）3月に至り、後藤宙外が中心となって高梨村が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和6年（1931）3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年（1988）6月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600m²である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要な遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することを目的に昭和49年（1974）、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。幸い、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

事務所は昭和61年（1986）4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称し、現在は「払田柵跡調査要項」の第6次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはI～V期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡I－政庁跡－』（昭和60年3月）として公刊した。

一方、区画施設である外柵は東西1,370m、南北780mの長楕円形で、標高32～37m、総延長3,600m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000m²である。外柵は1時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163,000m²、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,760mで石壘、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭線は全体に4時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、從来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、平成7年（1995）から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は報告書『払田柵跡II－区画施設－』（平成11年3月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・灰釉陶器などのほか、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書き器などの文字資料がある。木簡は昨年度までに88点確認しており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大糧二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」と記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟」「狄藻」などの文字もある。墨書き器は370点以上出土・採集されており、「大津郷」「鷹空上」

「懲悔」「小勝」「音丸」「厨家」「厨」「官」「倉」「館」「千」「主」「長」「酒」などの文字が記されている。

管理団体である仙北町は、昭和54年（1979）から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業をすすめており、昭和57年（1982）からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成3年（1991）から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や大路東建物、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを実施し、更に平成7年（1995）からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物の整備などを実施した。平成11年（1999）は外郭西門の門柱及びこれに取り付く材木扉の復元整備を、本年度は外郭西門周辺の修景整備として名称板設置や園路舗装工事などを実施している。

なお、平成11年度までに実施した過去26年間の発掘調査面積は43,728m²であり、遺跡総面積のうち4.98%にあたる。

第1表 扟田柵跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備考	文献
53-2	繁昌I遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
53-3	繁昌II遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-4	上高梨遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（須恵器）	1
53-5	堀田城跡	仙北町払田	真山を利用して中世城館	2
53-6	境田城跡	仙北町払田	中世城館：天正18年破却	2
53-7	杉ノ下I遺跡	仙北町横堀	遺物包含地（須恵器）	1
53-9	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-13	四十八遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-14	中村遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器）	1
53-19	一ツ森遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器系中世陶器）	1
53-25	田ノ尻遺跡	仙北町払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
54-2	本堂城跡	千畠町本堂城回	中世城館：戦国期本堂氏の居館	2
54-3	厨川谷地遺跡	千畠町十崎	埋蔵銭出土地（大正4年） 古代集落跡、2000年範囲確認調査	3
A	厨川谷地II遺跡	千畠町土崎	中世以降？、2000年新発見	
54-4	中屋敷I遺跡	千畠町土崎	寺院跡	1
54-14	内村遺跡	千畠町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査	4

文献 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）／2 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）／3 千畠町「古鉄発掘由来記」「千畠町郷土史』1986（昭和61年）／4 秋田県教育委員会『内村遺跡』1981（昭和56年）／地図番号は、文献1の地図番号に対応する
註 扉田柵跡（柵木）の初見時期については、「明治二十年頃」とする記述もある。

赤川翁村「校閑を終りて」『芦澤歳時記』1942（昭和17年）649頁

第2章 調査計画と実績

払田柵跡の調査は「払田柵跡調査要項」に基づき、5年計画を起案し、調査顧問の指導と助言を受け継続実施している。平成11年度から15年度の調査は、「払田柵跡発掘調査第6次・5年計画」として調査顧問の承認を得ており、本年度はその第2年度に当たる。

事業費については、国庫補助金の内示（総経費1,600万円のうち、国庫補助金800万円）を得たので、次のような「平成12年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第2表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間
第117次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	300m ²	4月17日～ 5月31日
第118次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	政庁西方の推定 官衙域の調査	1,200m ²	6月1日～ 9月30日
合計	2地区		1,500m ²	

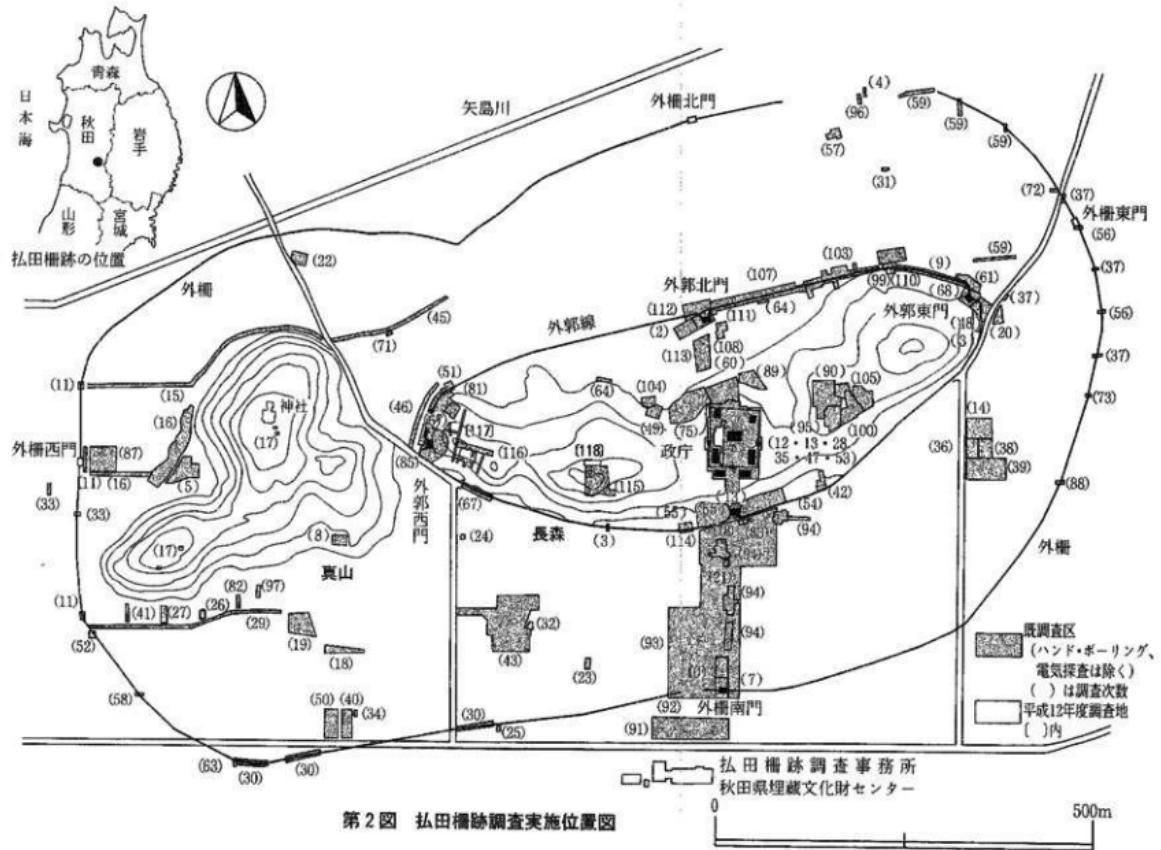
第117調査は、外郭西門東部地域の遺構分布確認調査である。外郭西門の東側地域には平坦地は少ないが、政庁に連なる道路や、それに伴う遺構の存在が考えられる。外郭西門の整備に合わせ、西門東方域及びこと政庁を結ぶ地域の遺構確認の調査を行うことにしたものである。

第118次調査は、政庁城西方の推定官衙域の調査である。政庁の西側に広がる平坦地には掘立柱建物、竪穴住居などからなる官衙域の存在が推定されるが、今まで全く未調査であった。政庁東方地域での調査を踏まえ、政庁を中心とする東西両側の遺構群のあり方と、その変遷を明らかにするため、この地域の調査を実施することにしたものである。

平成12年度の調査の実績は第3表のとおりである。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間
第117次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	560m ²	4月19日～ 11月10日
第118次	外郭西部 (仙北町払田字長森)	政庁西方の推定 官衙域の調査	180m ²	5月29日～ 11月22日
合計	2地区		740m ²	



第3章 第117次調査の概要

第1節 調査経過

第117次は、外郭西門東部地域における遺構分布を確認する調査である。本調査は、第4章で報告する第118次調査と並行する形で進めており、以下にその経過等を調査日誌の記述から抜粋する。

4月19日、調査を開始する。調査事務所で所長の挨拶、作業員説明会などを実施する。21日までは事前の準備に費やす。25日、本日より現場に入る。作業員には今年度の調査予定概要を現地にて説明する。その後、例年通り作業員休憩用と機材保管用のテント2張りを設営する。26日、調査区の下草刈りを実施、西端では土壠・空堀が良く見ることができる。

5月10日、トレンチを2本設定（A・Bトレンチ）。その幅を1.5mとする。11日より、トレンチ内の粗掘りに入る。15日、土壠・空堀に直交する東西方向のトレンチ（Cトレンチ）を設定。17日、Bトレンチ北側で東西方向の溝跡を確認する。調査区南側（長森丘陵南側斜面）にD～Fトレンチを設定。22日、トレンチ調査続行。払田柵跡周辺での田植えが本格化となる。25日、調査区東端で、現況で確認できる窪地3箇所を発見。昨年度第115次調査区における窪地（土坑）と同様か。

6月6日、窪地3箇所の平面図を平板で1/50にて測量。S X 1261・1262・1263とする。Eトレンチで環状の溝状プランを確認、古墳の周溝のように見える。7日、窪地S X 1261・1262を通るようにしてGトレンチを設定。13日、環状プランの東側を拡張して掘り下げる。14日、この結果プランは、径5m程の円形周溝を呈するようになりそうであるが、まだ不明瞭。15日、円形周溝南側の埋土中に拳大の礫がまとまりをもって検出。払田柵基盤層にある硬質泥岩とは異質の円礫である。意図的に埋納したものか。その東側にも溝状の遺構あり、当初の予定を一部変更して、この周辺をもう少し拡張して面的に確かめる必要がありそう。その後、東側に拡張して表土除去したところ、表土直下から擂鉢と須恵器のような壺が出現する。壺は須恵器ではなく珠洲系の陶器のようである。円形周溝と関係があるのか。19日、陶器壺・擂鉢が出土した箇所は、周囲の表土面よりやや盛り上がり（最大でも50cmくらいか）をもち、盛土中に陶器を埋設したものと判断された。ただ遺物が出たので盛土（塚）と判断できたようなもので、遺物がなければ単なる自然の起伏としていたであろう。本遺構をS X 1264塚跡とし、西隣の円形周溝をS X 1265とする。20日、塚の南側で焼骨出土、何の骨か不明。塚の芯同様木の根の側から出土し、検出が困難である。21日、骨が出土した近辺で土師器・炭化物あり、古代の骨になるのか。この西側に竪穴らしき方形のプランが現れる。S I 1266とし、遺物を取り上げる。S X 1264塚跡出土の陶器の下から礫が確認。払田柵跡基盤層にある硬質泥岩である。この礫を敷いた上に陶器を埋設したものか。22日、焼骨の出土状況写真撮影を行う。骨は径25cm程の範囲にまとまる。

7月10日、拡張区全域のプラン確認状況の写真を撮影を行う。その後、遺構精査（掘り下げ）に入る。この区域は南向きの緩斜面ではあるが、確認遺構の配置から見て、これは古代において斜面を削土整地したものであり、この上に竪穴状の遺構を構築しているようである。11日、拡張区での平面図作成に備え、測量杭を6mピッチで打つ。12日、先日確認された焼骨の東側約4mの箇所でまた別の焼骨が出土する。13日、S I 1266床面上から焼土遺構確認する。銀冶関係の炉か。北側壁を切り込む

ように柱穴も検出される。

7月24日、Cトレンチで確認している土塁・空堀の断面写真撮影を行う。断面観察では空堀の掘削土（主に地山土）を両側に盛ることにより土塁を形成していることが明瞭である。31日、大歎での気温が37.6度を記録、去年より暑い。S X1265とした円形周溝、確認面の写真を撮り、掘り下げるに入る。

8月1日、B・Cトレンチ交差箇所で土堤の地山盛土の下から堅穴住居跡らしきプラン（南側の壁の立ち上がり）を確認。土師器・須恵器が出土していることから、古代の住居に間違いない。このことから地山盛土は古代かそれ以前であることは確定的となったが、まだ中世と断ずることはできない。2日、拡張区東端で確認した、SK1270は半截の結果、底面外周に溝が巡ることが明らかとなる。9日、Bトレンチ北端（長森丘陵北端部）でも堅穴らしきプランがあることが判明する。

8月21日、盆休み明け初日、まだ暑い。Bトレンチ北端部の堅穴内には、柱穴・小土坑あり、須恵器・土師器が出土する。古代の造構に間違いない。22日、2番目に見つかった焼骨（後にSX1284とする）プランの下から、古代の堅穴北壁を確認。このことから焼骨は、塚と同じ中世の可能性が高くなってきた。焼土造構についても、焼骨とほぼ同一面で確認できるものと、その下位で見つかるものの別があり、前者が中世、後者が古代ではないかと考えるようになってきた。28日、調査区全体の写真撮影を実施する。稲刈り前でまだ緑が豊富な時期に全体を撮しておくため。

9月4日、朝夕ようやく涼しくなる。本日より拡張区の平面図作成に入る。5日、SX1264にもSX1265同様の溝が巡ることが明らかとなる。6日、SX1265と重複するSK1282から縄文土器が出土する。同形態の造構はSK1269であり、これも縄文期となるのか。8日、SK1282は、中央に柱穴が位置し、東側に地山掘り残しの周堤をもつ小土坑がある。これは堅穴状の造構となり、SI1282と略号を変更する。19日、SI1269（縄文）は、床面直上に人頭大の礫が5個置かれ、中央の礫の下から柱穴が発見された。これは柱穴を抜いた後に礫を意図的に置いたものと考えられる。20日、SX1284焼骨を取り上げる。

10月3日、B・Cトレンチ交差部のSI1274堅穴住居跡の遺物を取り上げる。完形の須恵器は9世紀中頃であり、払田柵跡では比較的古手の土器となる。このころから現地説明会用の各種準備にもとりかかる。5日、SX1284焼骨の南から3箇所目の焼骨が出土する。これは前2者に比べるとごく僅かの広がりであり、写真撮影・実測の後、取り上げる。11日、現況で確認できる土塁・空堀を平板で図化する。過去に微地形測量を実施しているが、土塁がうまく表現されていなかったため、新規に測量することにしたものである。13日、調査区の平面図は一部の造構を除きほぼ終了する。改めて平面図と造構を確認すると、SX1264・1265は円形周溝ではなく、隅丸方形の周溝が巡っていたと見た方がよさそうである。周溝は隣り合う2基が一部を共有する形を取るもので、これは河辺町上祭沢遺跡で調査した塚と同じようである。16日、最後まで残っていたGトレンチの断面図・平面図に着手する。23日、SI1274堅穴住居跡の補足調査並びに図面作成を行う。24日、明日の顧問会議に備え、調査区全体の清掃を行う。26日、SX1264塚跡の土層断面図を作成する。28日、現地説明会、30日は史跡払田柵跡保存管理計画策定指導委員会一行が現地を見学する。31日、平面図の補足を行い、11月6日以降は埋め戻しに入り、10日で本調査区の野外調査を終了した。なお、SX1264塚は後日の出土壺内容物の分析から骨壺と判断されたことを受け、以下ではSX1264墳墓として報告する。



第3図 平成12年度調査区位置図

第2節 検出遺構と遺物

1 調査区の立地と基本層序

第117次は外郭西門の東方約30mに位置し、長森丘陵西端部の馬背状の狭い平坦地から南北にそれぞれ傾斜する地区にあたる。昨年第116次調査区の西・南側に隣接する。標高はBトレンチでの計測(表土面)で、最高位が48m、北端部で40.5m、南端部で42.5mとなる。現況はかつて杉林・雜木林であったところを数年前に伐採しており、下草や雜木等で藪となっている。

調査区は幅1.5mのトレンチを南北方向に6本(A・B・D~Gトレンチ)、東西方向に1本(Cトレンチ)設定した。前者は長森丘陵西端部を南北に縦断させるような位置に、後者は南北方向に延びる土壠・空堀を横断させるようにしたものである。なおD~Fトレンチ間は古代の遺構・遺物が比較的まとまって検出されたことから、この間を拡張して面的に調査した。この区域を拡張区(第4図)と仮称し、以下で表記する。

調査区の基本層序は、Fトレンチ南部、S D877空堀の北側で観察した。(第29図参照)

第I層：暗褐色土(10YR3/4)表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は10cm前後。

第II層：暗褐色土(7.5YR3/3)部分的に炭化物が混入する。層厚10~20cm。

第III層：黒褐色土(10YR2/3)炭化物を少量含む。縄文土器・土師器等を含有するが、包含層と呼べるほどの遺物量はない。層厚20~40cm。

第IV層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山漸移層

第V層：黄褐色土(10YR5/6)地山土

同層序を基準に他所を観察すると、Cトレンチ(拡張区西端)では第I層表土の下が第IV層地山漸移層となり、表土から地山面までの深さは15~20cmにすぎない。またD・Eトレンチでは第II層がa・bの2層に細分され、a層はやや赤味の強い暗褐色土(7.5YR3/4)、b層は第III層に近い黒褐色土(10YR3/2)となる。更にFトレンチ南端では第III層厚が50cmを超し、同層を3つに細分している。第V層・地山は、基本的には粘質土であるが、Bトレンチ南側では砂質粘土であり、色調もやや明るく明黄褐色(10YR6/8)を示す。またGトレンチでは第115次調査区南側のような疊(硬質泥岩)が露出しており、人頭大から人力では動かせないような巨石まで様々である。

2 遺構と遺物

調査の結果、検出された遺構は、設定したトレンチ・拡張区ともそのほぼ全域に分布することが確認され、長森丘陵西端部では狭い頂部平坦面、北側・南側緩斜面域にも各種施設が構築されていることが判明した。各遺構の構築時期は、出土遺物から見ると、古代の他、中世(13世紀代)、縄文時代に及ぶことも明らかとなった。各時期の遺構は次の通りである。

古代：竪穴住居跡1軒・竪穴状遺構8軒、土坑10基、溝跡5条、中世：墳墓(隅丸方形周溝遺構)

2基、火葬墓3基、焼土遺構6基、土塁2条・空堀1条、縄文時代：竪穴状遺構4軒、土坑2基、時期不明(中世以降か)：土坑3基である。その他、古代あるいは中世に属すると思われる柱穴多数を検出した。

18

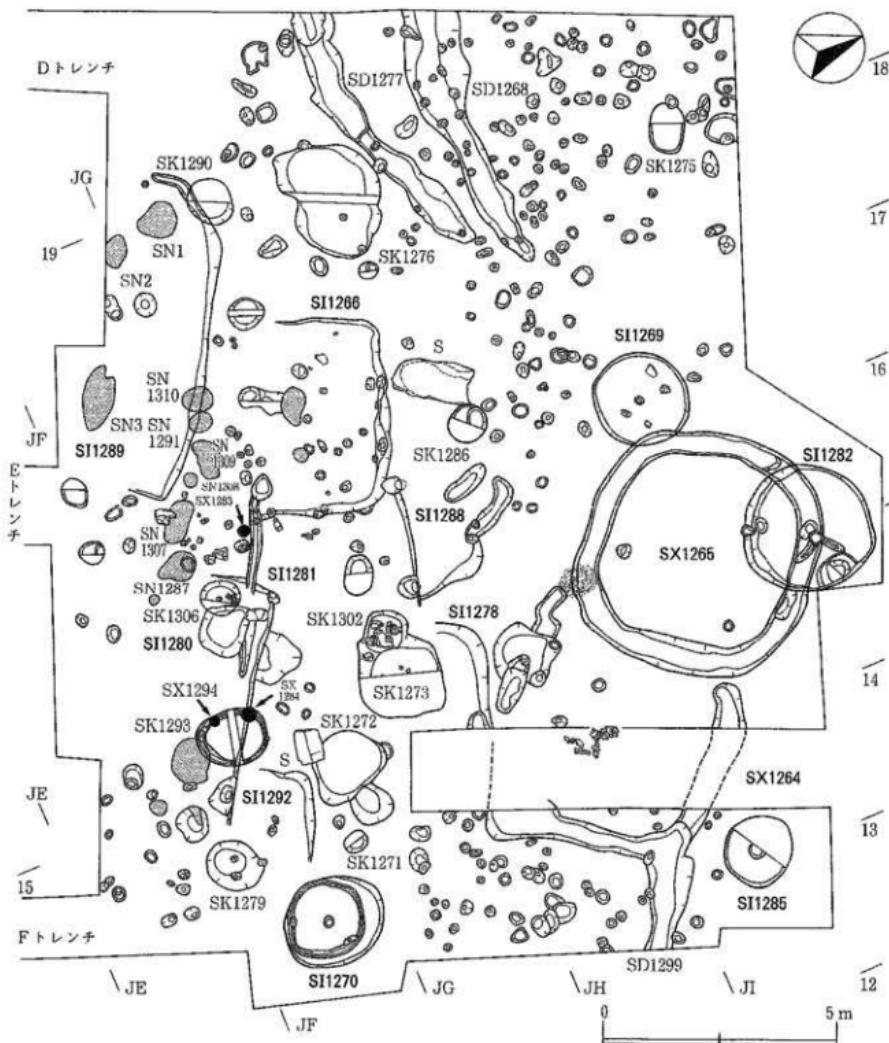
17

16

14

13

12



第4図 第117次拡張区構造配置図

(1) 古代

① 竪穴住居跡・竪穴状遺構

方形・長方形基調のプランをもつ竪穴状の遺構は、9軒を確認している。しかしながらカマドをもつ竪穴住居跡は1軒（S I 1274）のみであり、他はカマドを持たずに地床炉をもつもの（S I 1266）、壁立ち上がりの一部あるいは壁溝の一部のみの確認に留まる。このことから本項では前者を竪穴住居跡とし、他者を竪穴状遺構として記述していく。

S I 1274竪穴住居跡（第5～7図、図版3）

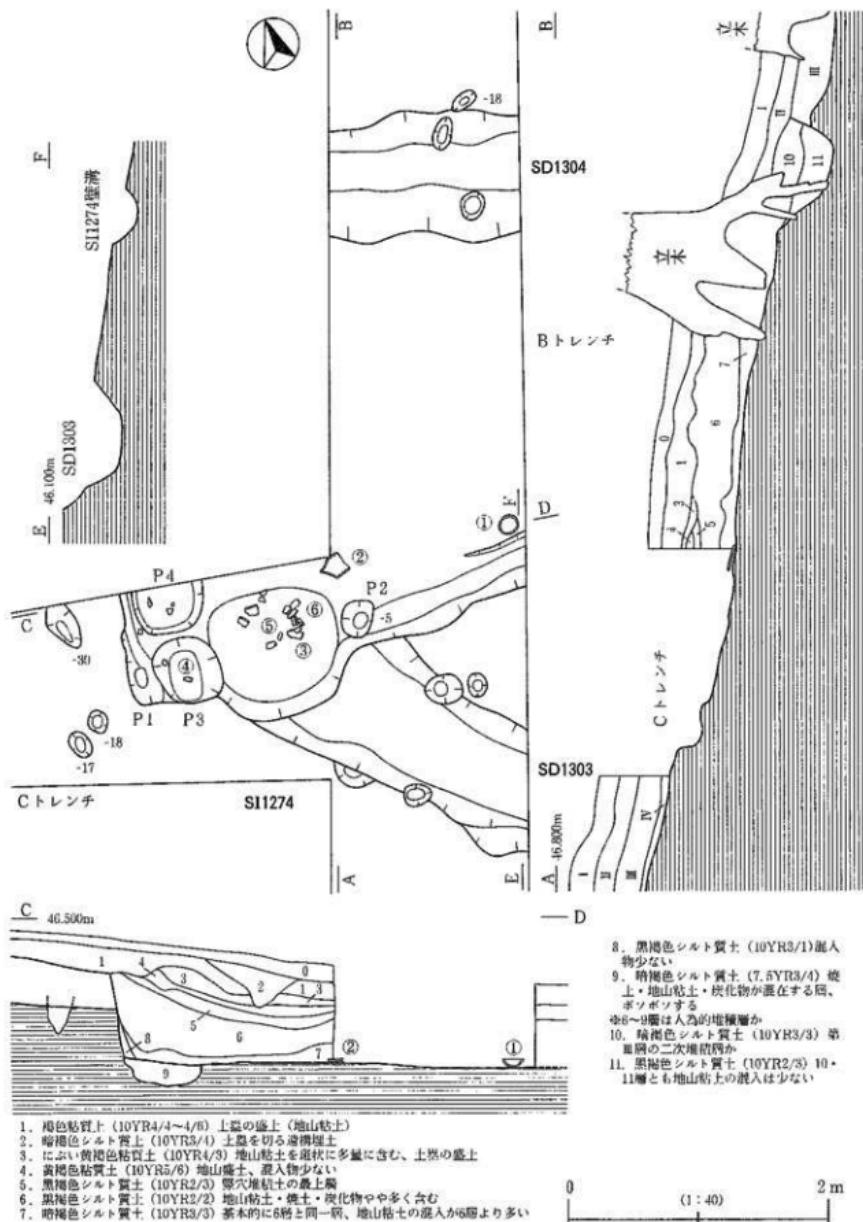
B・Cトレンチの交差部で検出した。ここは丘陵西端の平坦面から北側にやや下る位置にあり、S F1300土壘盛土（1・3・4層）の直下にもあたる。のことから本住居は土壘構築以前に廃棄・埋没した遺構であると判断される。確認された住居は、竪穴の南西隅部のみであり、その規模は南側壁長3.1m、西側壁長1mにすぎない。各壁直下には幅20cm前後、深さ5cm程の浅い溝が掘り込まれる。断面観察による床面までの深さは70cmとなる。南側壁西寄りにはカマドが付される。その構造等は重複するS D1303溝跡に切られ明確ではないが、残存する形状・焼土の分布から燃焼部（本体・袖部）が住居壁を外側に張り出させた箇所に位置させていた可能性がある。その他床面上には、柱穴（P 1・2）、小土坑（P 3・4）が掘り込まれる。P 3・4は検出位置と坑内の焼土・遺物のあり方からカマドに付属する施設と見ることができる。

遺物はカマド内、カマド脇の小土坑（P 3・4）及び床面直上から須恵器壺・甕・器種不明、土師器壺など比較的多く出土している（第6・7図）。

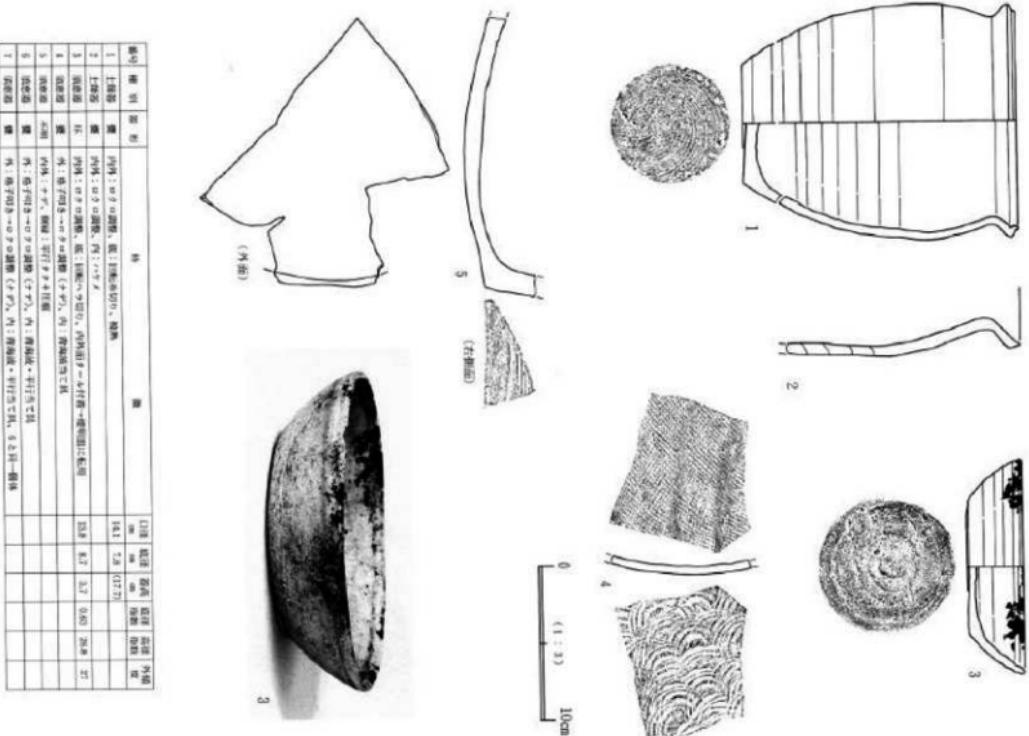
1はP 3内出土の土師器壺（④）である。被熱を受けており、底面には回転糸切り痕を留める。2は土師器長胴甕（カマド内③）であろう。内面には縦・横のハケメが、外面にはロクロを利用した横方向のナデ（カキメ状）が見られる。成形時の粘土紐痕跡が沈線状に観察され、幅1.5cm前後の粘土紐を巻き上げ・積み上げたことが判る。3は床面東側において完形・正立状態で出土した須恵器壺（①）である。内外面口縁の一部にタール状の付着物が認められることから、最終的には燈明皿として使用されていたと考えられる。4は須恵器甕、5は焼きがやや甘いものの須恵質の焼物（カマド内⑥）であるが、器種・部位は不明である。5の図示右側縁には平行タタキ状の圧痕が残る。6・7はカマド及びその周辺床面上出土の須恵器大甕（⑤・②）である。同一個体と考えられるが接合はできなかった。

S I 1266竪穴状遺構（第8～10図、図版2・3）

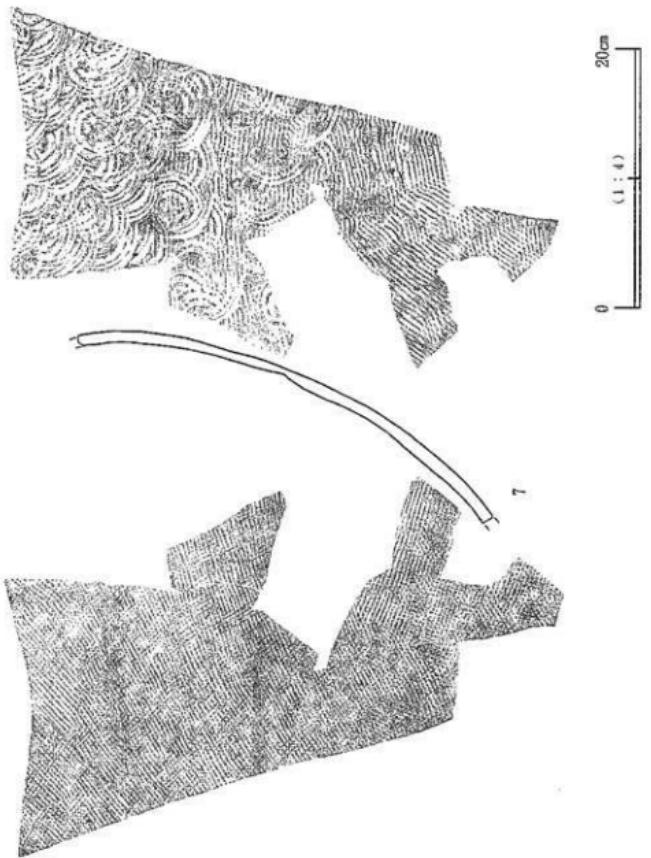
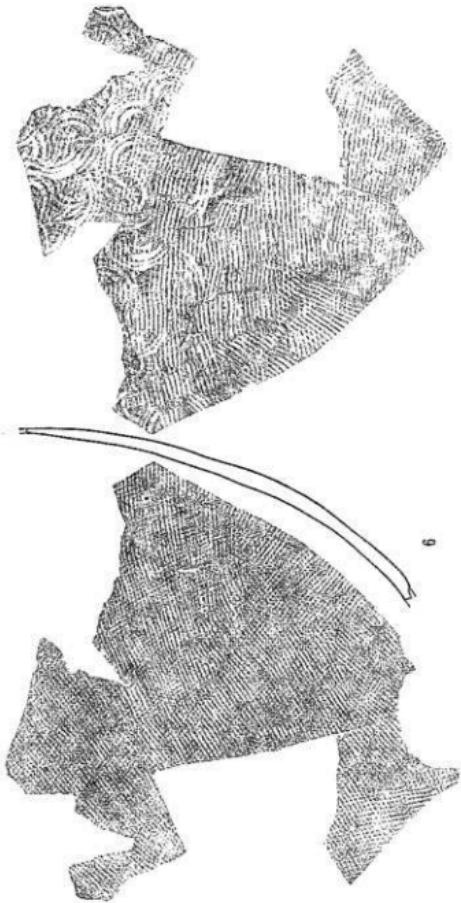
拡張区中央南側、J H17を中心とする地区で検出した。南側で重複するS I 1289より新しく、東側に位置するS I 1281・1288との新旧は不明である。規模は南側の壁の立ち上がりを確認できず不明瞭ではあるが、東西方向は4.1mの隅丸方形を基調とすると考えられる。壁高は北側で40cmとなる。壁溝はない。床面上あるいは周壁を切り込むような径20cm前後の柱穴が10数本見られる。配置としては北側壁上にあるP 1・2が本住居に伴うと見られるが、他は住居に伴うのか否かは不明である。カマドは確認できず、床面ほぼ中央に長さ80cm×幅50cmの精円状の地床炉が構築される。炉の下部には長さ100～140cm×幅50cm前後（最深45cm）の軸線を南北方向にとる土坑が位置する。炉の下部構造をなす施設と考えられるが、詳細は不明である。また焼土は、床面中央から東側にもあり、径30cm程の広がりが認められる。



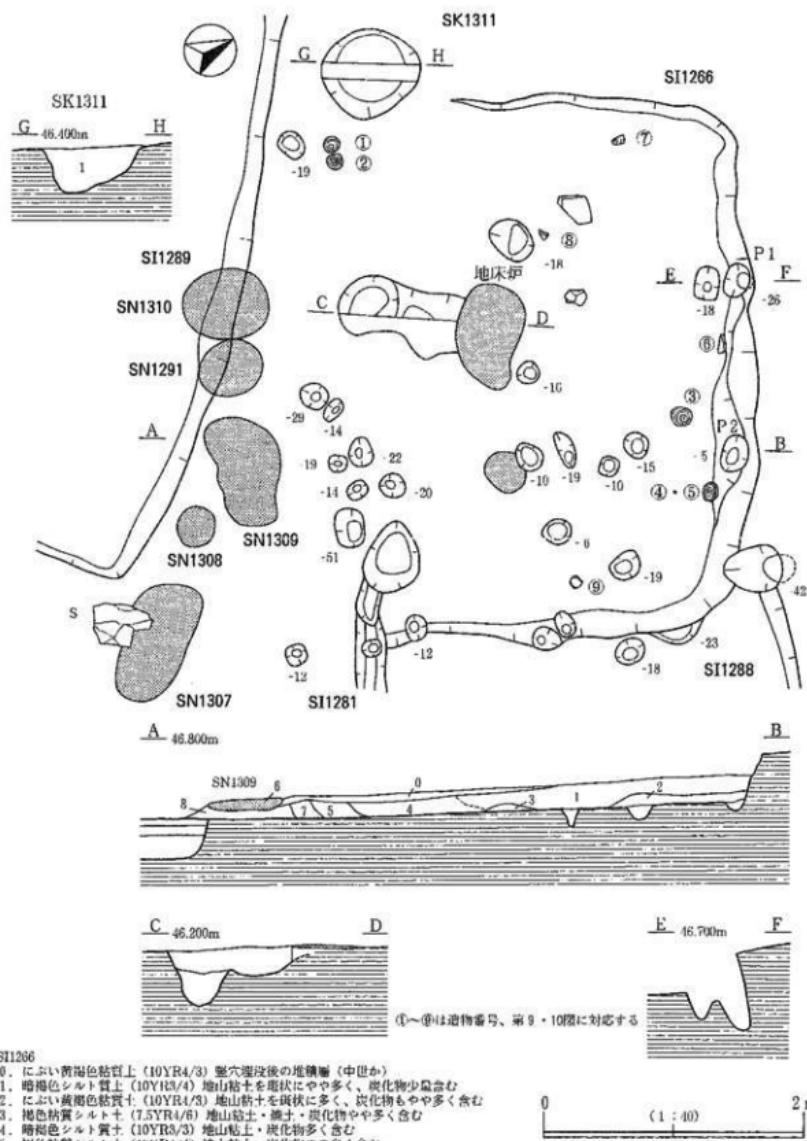
第5図 SI1274堅穴住居跡、SD1303・1304溝状遺構



第6図 S11274堅穴住居跡出土遺物（1）

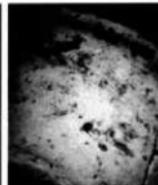
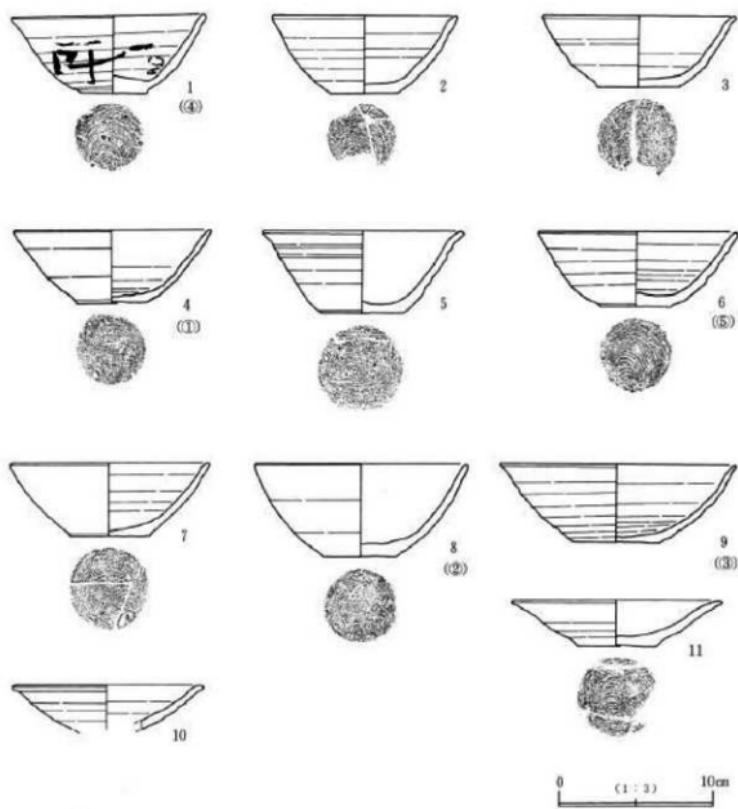


第7図 SI1274号穴住居跡出土遺物（2）



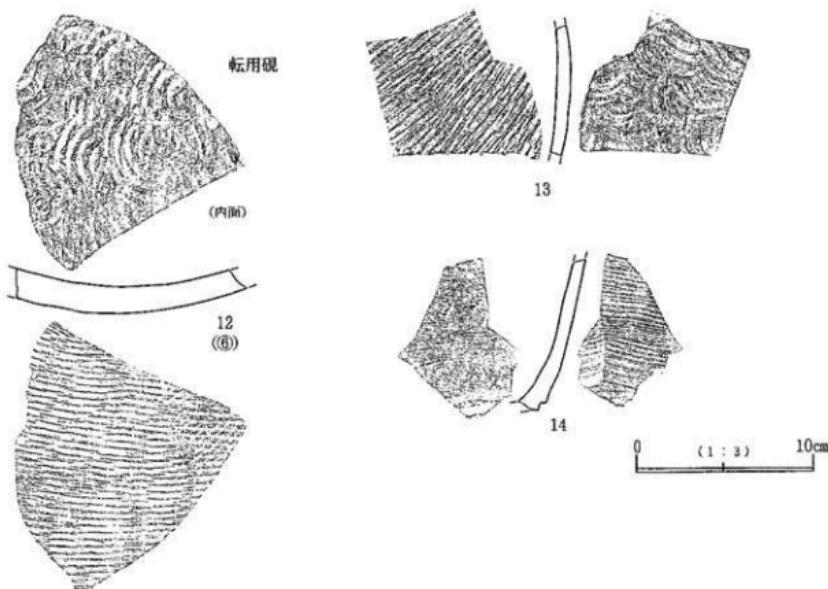
- SI1266
- にぶい黄褐色粘土質上 (10YR4/3) 壁穴埋没後の堆積層 [中世か]
 - 暗褐色シルト質上 (10YR3/4) 地山粘土を斑状にやや多く、炭化物少量含む
 - にぶい黄褐色粘土質 (10YR4/3) 地山粘土を斑状に多く、炭化物もやや多く含む
 - 褐色粘質シルト土 (7.5YR4/6) 地山粘土・堆土・炭化物やや多く含む
 - 暗褐色シルト質 (10YR4/3) 地山粘土・炭化物やや多く含む
 - 暗赤褐色土上 (2.5YR3/4) 地山層 (SN1309)
 - 褐色粘質土 (7.5YR4/4) 地山粘土多く、堆土・炭化物少部分含む
 - 褐色粘質土 (7.5YR4/3) 炭化物少量含む
- SK1311
- 暗褐色シルト質上 (10YR3/3) 地山粘土・炭化物多く含む

第8図 SI1266壁穴状遺構



1 の墨書部分赤外線写真
左：「嗣」か 右：判読不能（崩の右隸）

第9図 SI1266整穴状遺構出土遺物（1）



番号	種別	器形	特徴	口径 cm	底径 cm	高さ cm	底厚 mm	高径 指数	外縁 度
1	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、体部正面に墨書き「厨」	12.6	4.4	5.2	0.35	41.3	34
2	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	11.9	4.3	5.0	0.36	42.0	29
3	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.6	5.3	4.6	0.42	36.5	32
4	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.7	4.6	4.6	0.36	36.1	35
5	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.9	5.3	5.1	0.41	39.5	34
6	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.9	4.6	4.6	0.36	35.7	32
7	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.8	5.2	4.8	0.40	37.5	34
8	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	13.8	4.8	6.1	0.35	44.2	28
9	土師器	环	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	15.4	5.5	5.1	0.36	33.1	39
10	土師器	皿	内外：ロクロ調整	12.4		(2.9)			
11	土師器	皿	内外：ロクロ調整	13.5	5.1	3.1	0.38	23.0	52
12	須恵器	壺	外：平行タスキ、内：青釉油当て口、転用窓						
13	須恵器	壺	外：平行タスキ、内：青釉油当て窓						
14	須恵器	壺	台付、内外：ロクロ調整、内：ハケメ抜						

第10図 SI1266 穫穴状遺構出土遺物（2）

床面直上には、土師器環が完形で少なくとも5個体（①～⑤）確認された。3個体（①～③）は倒立状態であり、①・②は隣り合うように並べられていた。残り2個体（④・⑤、1個体には墨書きあり）は重なって北側壁に立て掛けるようにして見つかった。④・⑤同様の出土状況は須恵器壺（転用窓、⑥）にも認められ、これらは竪穴を廃棄する段階で遺物を意図的に置いたものと推測される。

出土遺物には、土師器環・皿類、須恵器壺・壺類、鉄滓がある。土師器環・皿類は少なくとも21個体出土しており、この中には内面黒色処理された環が1個体含まれる。1～9は土師器環、10・11は土師器皿、12・13は須恵器壺、14は須恵器壺である。土師器で底部の遺残するものは底面に回転糸切り痕を留める。1（④）は、体部外間に墨書き（正位で2文字か）が認められ、左の1字は「厨」と思われる。

れるが、右側は判読不能である。また内面にも墨痕あるいはタール状の付着物がある。2は内外面にタール状の付着物が、4(①)・6(⑤)・7・8(②)・9(③)・10は被熱痕跡がそれぞれ見られる。12は内面に摩耗痕と墨の付着が認められることから、須恵器大甕破片を転用した硯であったと思われる。14は低い台の付く壺と考えられる。

S I 1280堅穴状遺構（第11・12図、図版4）

拡張区南東側、J F 15を中心とする地区で検出した。複数の堅穴状遺構・土坑等と重複し、新旧関係は古い方から S K 1293→S I 1280→S I 1281→S K 1306→S X 1284・1294となる。また堅穴内の北西部 S K 1306土坑の東隣には長さ110cm×幅95cmの略方形で深さが10cm程の浅い土坑（P 1）が見られる。これは本堅穴に伴うのか、西隣のS I 1281に伴うのか明らかではない。

規模は残存する北側壁長が5.2m、S I 1281と重複する西側壁長が1.5mとなる。壁溝は認められず、壁高は28cmである。柱穴は、その位置と掘り込み規模から北西隅のP 2（径20cm×深さ52cm）、北側壁寄りのP 3（長さ38cm×幅30cm×深さ51cm）と床面南東側のP 4（長さ30cm×幅24cm×深さ50cm）が該当しそうであるが、他は不明確である。また床面上東側では3箇所で焼土の広がりを観察した。S N 1は、長さ100cm×幅80cmの梢円状、S N 2は径35~40cmの略円形、S N 3は長さ45cm×幅20cmの溝状である。

遺物は土師器壺・甕小片が出土しているが、図示できる個体はない。

S I 1281堅穴状遺構（第11・12・15図、図版4）

拡張区中央南側、J F 16を中心とする地区で検出した。S I 1280と重複し、これを切る。またS K 1306は本堅穴を切り、さらにS N 1287・1307~1309焼土遺構は、S I 1281・S K 1306が廃棄され堆積土が形成された後に構築されたものである。一方、西側に位置するS I 1266との関係は不明であり、南側ではS I 1289と重複する位置関係にあるがこれも新旧は明らかではない。

規模は残存する北側壁長を3.8m分確認したにすぎない。壁溝を伴う堅穴であり、その幅は15~20cm、深さは10cm前後である。

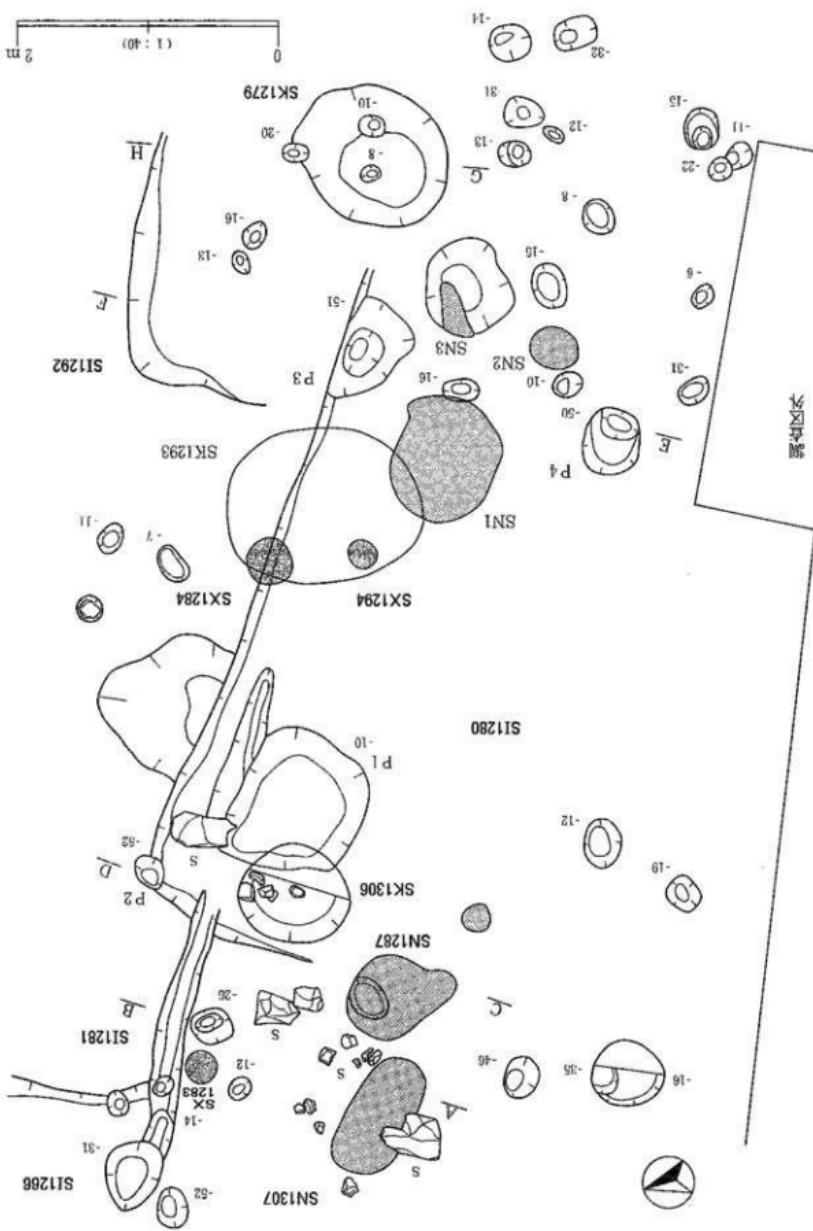
出土した遺物は土師器壺（3個体）・甕、須恵器壺がある。1は被熱痕の見られる土師器壺である。2は砲弾形を呈する土師器甕の底部近くの破片である。内面の当て具が樹枝状を呈する。3は須恵器長頸壺となる個体であろう。外面底部下半にはロクロの回転を利用した横位のケズリ（ナデ状）が加わる。底面は台部接合時のナデ整形痕が明瞭に残る。

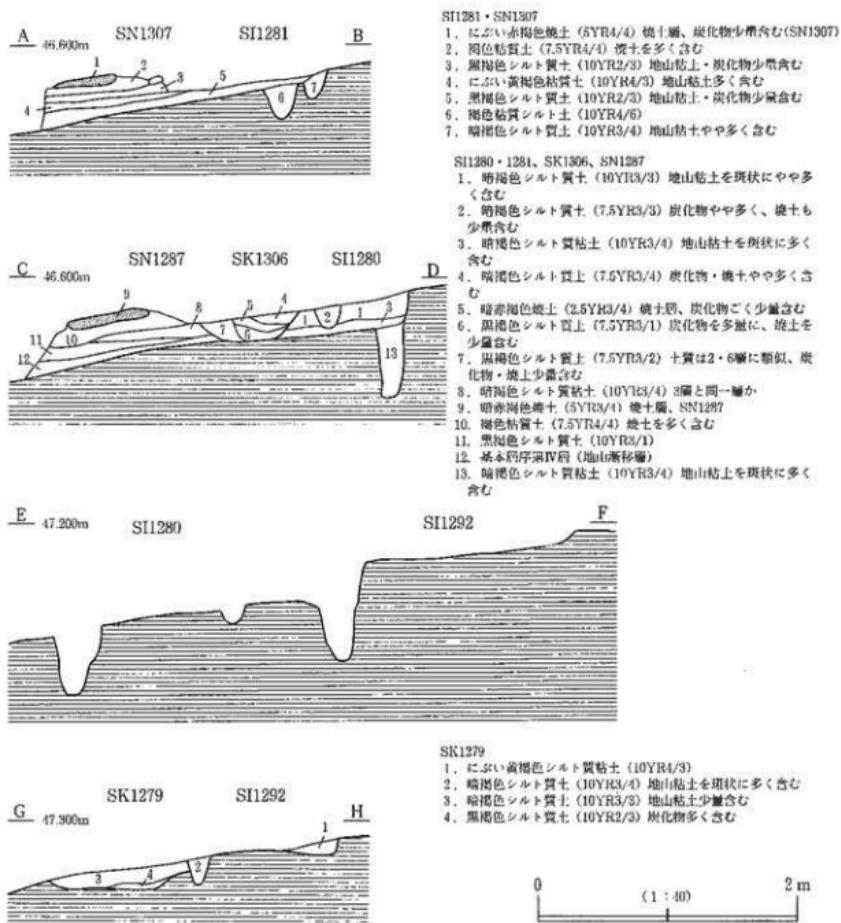
S I 1288堅穴状遺構（第13・15図）

拡張区中央南側、J H 16を中心とする地区で検出した。西側をS I 1266、東側をS K 1273・1302と重複する位置関係にあるが、それぞれの新旧は明らかにできなかった。確認し得た箇所は、東西に延びる北側壁の一部と床面上に位置する小土坑（P 1）、北側壁に接する柱穴2本（P 2・3）のみである。北側壁は長さ2.8m、壁高は22cmである。P 2・3は、径40~50cm、床面からの深さが70cm前後と深くしっかりした掘り込みである。

P 1内には焼土・炭化物と共に土師器壺（1個体）・甕、須恵器が出土している。4は須恵器甕破片であるが、内面を転用硯として再利用されていたものである。2片の接合（A+B）及び内面・剖面（断面）の墨痕・摩耗痕から次の点が判明した。当初A+B（あるいはこれ以上）で硯としていたものが、何らかの原因で欠損する。A片はそのまま遺棄されたと思われるが、台形状となったB片だ

第11图 SI1280·1281·1292型灰枝孢霉 SK1279·1306土球(1)平面图



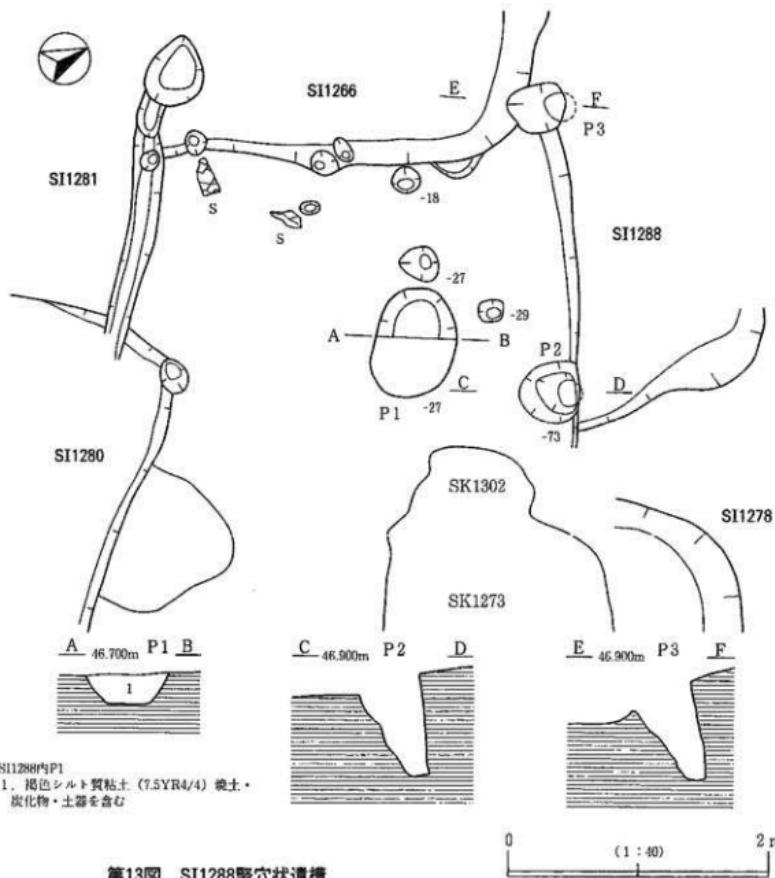


第12図 SI1280・1281堅穴状遺構、SK1279・1306土坑(2)土層断面

けはそのまま硬として使用が継続される。それはB片上端剖面(Aとの接合面)にも墨痕が認められることと、摩耗・墨痕の度合いがAよりBが格段に高いからである。またB片下端剖面には硯として再生・整形する段階における擦痕(図にはスクリーントーンで表示)が残る。

S I 1289堅穴状遺構(第14・15図、図版2)

拡張区中央南側、J G 18を中心とする地区で検出した。堅穴北側でS I 1266、S N 1291・1310と重複するが、両者より旧い。また北西隅でもSK1290と重複し、これを切っている。規模は北側壁で6.9mとなり、北西・東北の両隅部を確認しているので、東西の長さは確定される。壁高は北壁中央部で35cmである。北西隅には幅15~10cm、深さ6~8cmの壁溝が一部ではあるが検出された。床面上には柱穴3本(P 1~3)、焼上遺構3基(S N 1~3)が位置する。S N 1・2は床面上に、S N 3



第13図 SI1288堅穴状遺構

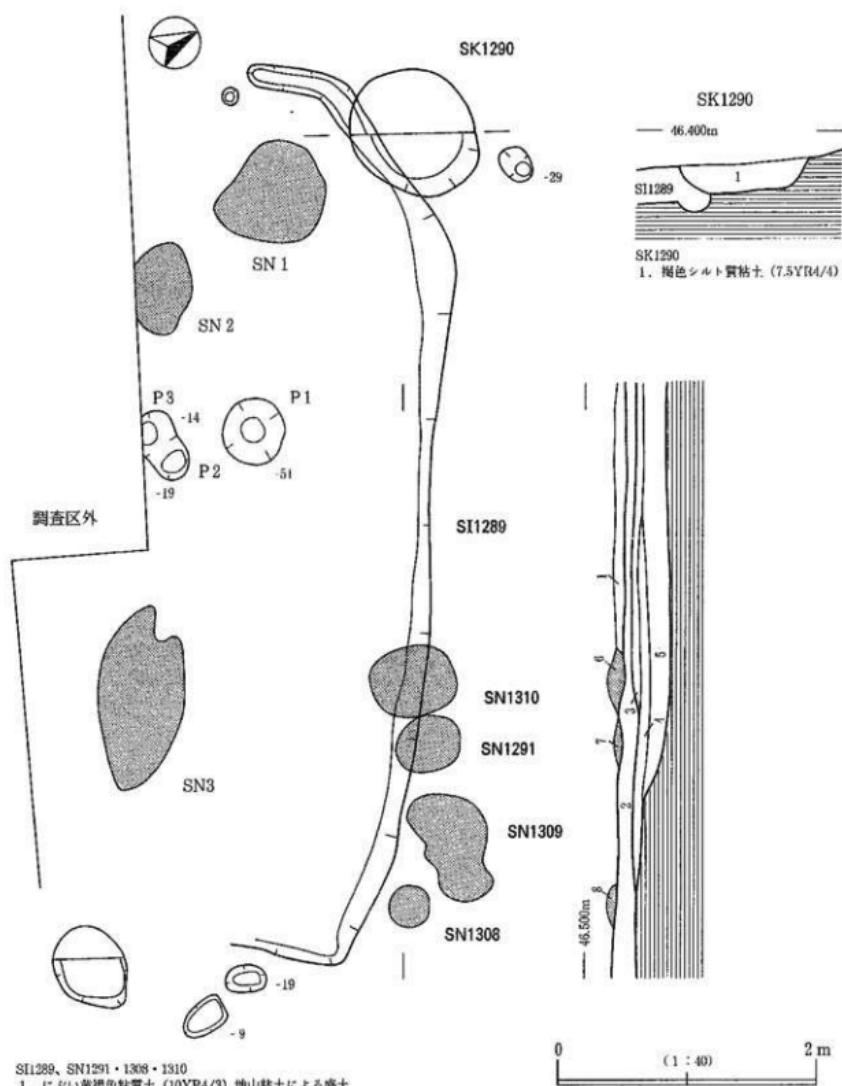
は床面直上で検出されていることから、本堅穴に伴う施設と考えられる。S N 1 は長さ85cm×幅80cmの略円形、S N 2 は長さ70cm×幅50cm前後の楕円形、S N 3 は長さ145cm×幅70cmの楕円形を呈する。

遺物は北西隅の壁溝内とP 1とした柱穴内及びS N 3 内から土師器壺（1個体）・甕、須恵器壺（1個体）が出土している。5は壁溝内出土の土師器甕である。被熱を受けた個体であり、底面に回転糸切り痕を残す。6は、S N 3 内出土の須恵器壺である。底面の切り離しは回転糸切りである。

S I 1295堅穴状遺構（第16・17図、図版4）

Bトレチニ端部で検出した。規模・形態は明確ではないが、南側壁の一部を確認した。その壁高は20cmとなる。床面上には径あるいは一辺が60~100cmの略円・楕円形の小土坑が5基位置する。確認状況から見れば、これら小土坑は堅穴構築時に掘り込まれた何らかの施設と考えられる。

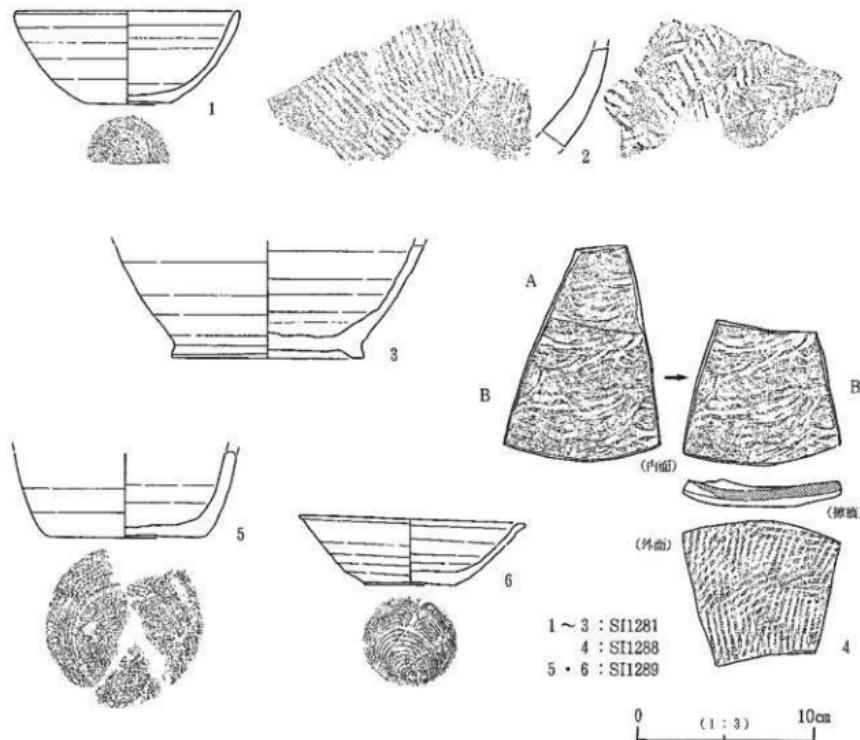
この土坑内より土師器壺・甕、須恵器甕が出土している。1（①）はロクロ使用の土師器甕である。受口状をなす口縁部内面には煤状炭化物（図中のスクリーントーン部分）が付着しており、煮炊きに



SI1289, SN1291・1308・1309

1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 地山軟土による底土
2. 晴褐色シルト質土 (10YR3/4) 地山粘土をやや多く含む、同層上面が中世の生活面か
3. 棕褐色粘質土 (10YR4/6) 地山粘土による底土。※1~4層は堅く締まる
4. 晴褐色シルト質土 (10YR3/3) 土質は5層と同、同層上面がSI1266未面
5. 晴褐色シルト質土 (10YR3/3) 締まり強、地山粘土を斑状に少量含む、4・5層は人為的堆土
6. 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 硬土層 (SN1310)
7. 暗赤褐色土 (2.5YR3/3) 脫土層 (SN1291)
8. 赤褐色塊土 (5YR4/6) 塵土層 (SN1308)

第14図 SI1289堅穴状遺構、SK1290土坑



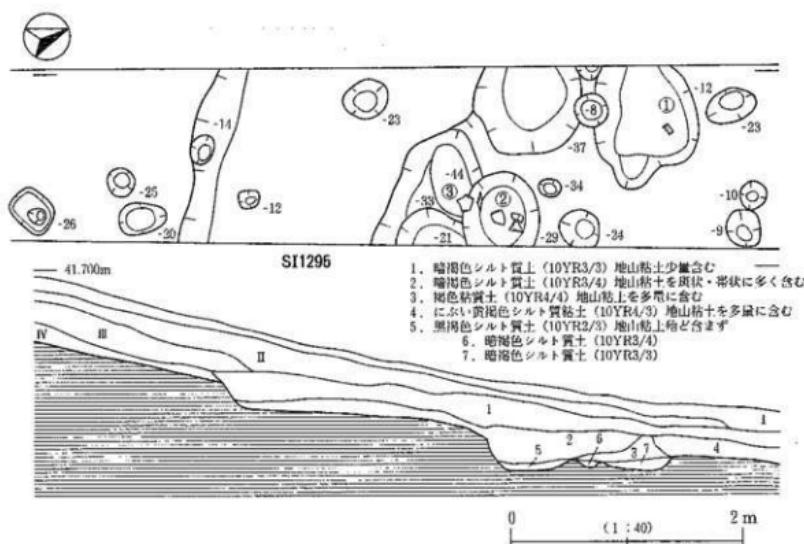
番号	種別	器形	特徴	L1深	底径	器高	底径 倍数	高径 倍数	外幅
1	土師器	環	内外：ロクロ削痕、底：円輪系切り、成熱	12.9	4.6	5.4	0.96	41.9	36
2	土師器	環	略済形、外：平行タキ、内：樹枝状当て目						
3	須恵器	壺	内外：ロクロ削痕→外縁横筋のケズリ	11.0	(6.8)				
4	須恵器	壺	外：平行タキ、内：齊滑底曲→肩形→転用鏡						
5	土師器	環	内外：ロクロ削痕、底：円輪系切り、成熱	9.4	(4.8)				
6	須恵器	壺	内外：ロクロ削痕、底：圓輪系切り	12.9	5.1	4.0	0.96	31.0	29

第15図 SI1281・1288・1289堅穴状遺構出土遺物

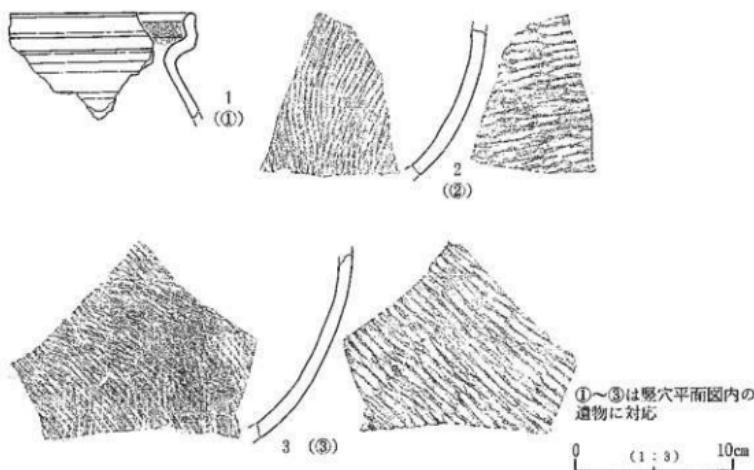
伴う吹きこぼれと思われる。2・3(②・③)は須恵器壺である。

S I 1278・1292堅穴状遺構(第4・11~13図)

拡張区中央東側で検出した。S I 1278はS I 1288、S K 1273・1302と、S I 1292はS I 1280とそれぞれ重複する位置関係にあるが、新旧は不明である。2軒とも堅穴の北西端部を「L」字状に確認したに留まる。堅高は両堅穴とも12cmである。わずかに残存する床面はほぼ平坦であり堅く締まっている。遺物は出土していない。



第16図 SI1295整穴状遺構



番号	種別	器形	内			外		
			口径	底径	器高	底径	高径	外傾度
1	土師器	甕 内外：ロクロ調査、内面全体に還元化物付着						
2	漆器物	甕 外：平行タキ、内：平行凸出						
3	陶器物	甕 外：平行タキ、内：平行凸出						

第17図 SI1295整穴状遺構出土遺物

②土坑

土坑は拡張区で12基検出しているが、このうち古代の土坑は、出土遺物・堆積土の状況などから10基と判断される。他の2基は出土遺物がなく、時期の特定はできないが、掘り込み面や重複から古代以前の縄文時代と思われる。

S K1271土坑（第18図）

拡張区南東側、J G14で検出した。土坑西側をS K1272により一部破壊されている。現況での規模は長さ85cm×幅82cmで東西方向に長い楕円形を呈していたと思われる。深さは最深で30cmである。遺物は出土していない。

S K1272土坑（第18図）

拡張区南東側、J F・J G14で検出した。東側でS K1271と重複し、これを切り込んでいる。規模は長さ170cm×幅130cmの南北に長い不整楕円形を呈する。遺物の出土はない。なお土坑南側にある礎（直方体状、長さ72cm×幅58cm×高さ35cm）は地山・基盤層に深く入り込んでおり、元々ここに存在していたものである。

S K1273土坑（第18・19図、図版4）

拡張区中央東部、J G15で検出した。西側でS I 1288・S K1302と重複する位置関係にあるが、その新旧は明確にできなかった。規模は、長さ180cm×幅160cmの比較的整った隅丸方形を呈する。確認面から底面までの深さは68cmとなる。壁の立ち上がりは、北面ではほぼ垂直となるが、対する南面では緩やかに上昇する。堆積土は4層に分けられ、人為堆積と考えられる最上層（1層）中には土師器壺（6個体）・甕・須恵器甕・平瓦が遺棄されていた。

1は土師器壺であり被熱を受けている。2は灰白色を呈する平瓦片である。全体に摩耗しているが、凹面には布目が、凸面には格子叩目が残る。

S K1276土坑（第18図）

拡張区西側、J H18で検出した。規模は長さ270cm×幅170～205cmの不整楕円形となる。確認面からの深さは10～25cmである。底面には小さな凹凸が一面に広がり、他土坑底面が概ね平坦であるのに比較すると際立って異質な感がある。堆積土は暗褐色シルト質粘土で充填されていた。人為的に埋められたと思われる。遺物は土師器の細片が僅かに出土している。

S K1279土坑（第11・12図）

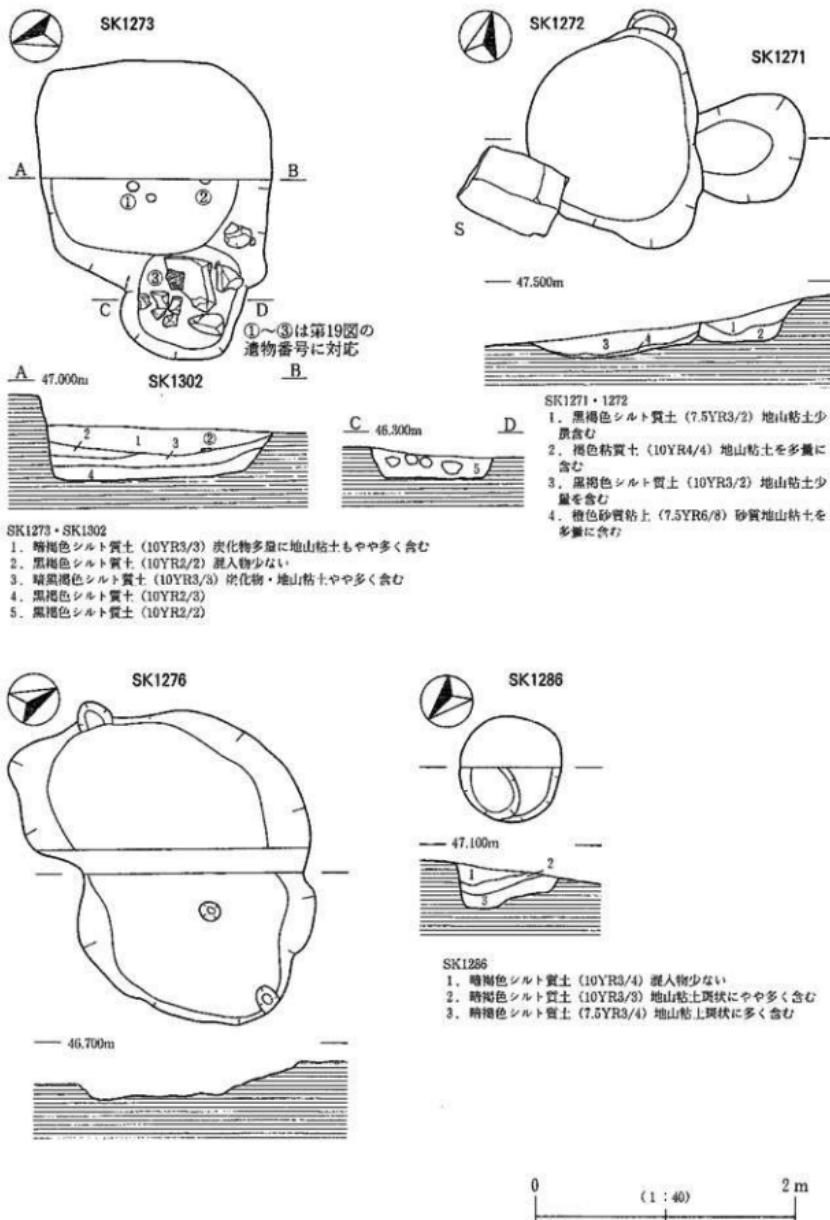
拡張区東側、J E・J F14で検出した。S I 1280北側壁と重複する位置関係にあるが、直接的な重複は認められない。規模は長さ120cm×幅105cmの略円形を呈する。確認面からの深さは20cm程である。遺物は土師器壺・甕が僅かに出土した。

S K1286土坑（第18図）

拡張区中央部、J H16で検出した。規模は一辺が80cmの円形を呈し、確認面からの深さは北側で最深35cmとなる。出土遺物はない。

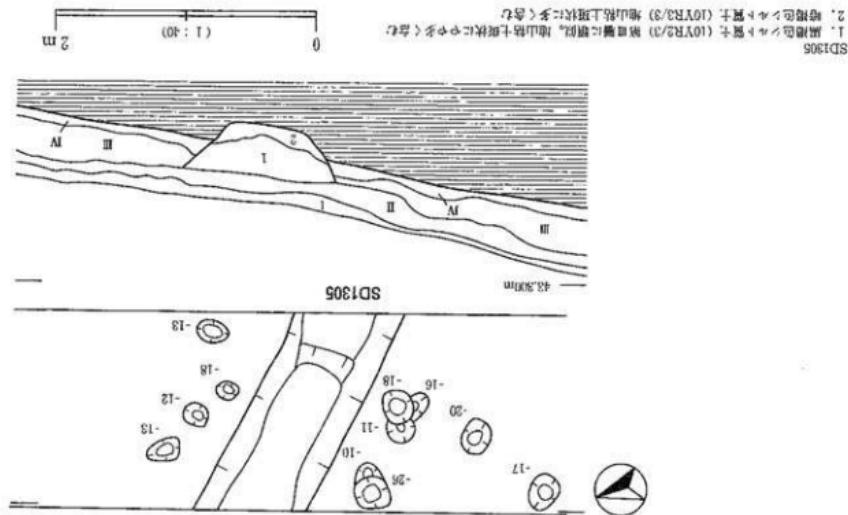
S K1290土坑（第14図）

拡張区南西部、J G18・19で検出した。S I 1289と重複し、竪穴に上坑南側を切られる。そのため規模は不明確ではあるが、東西方向は100cm、残存する南北は85cmであり、本来径100cm程の略円形を呈する土坑であったと思われる。確認面からの深さは最深で35cmとなる。

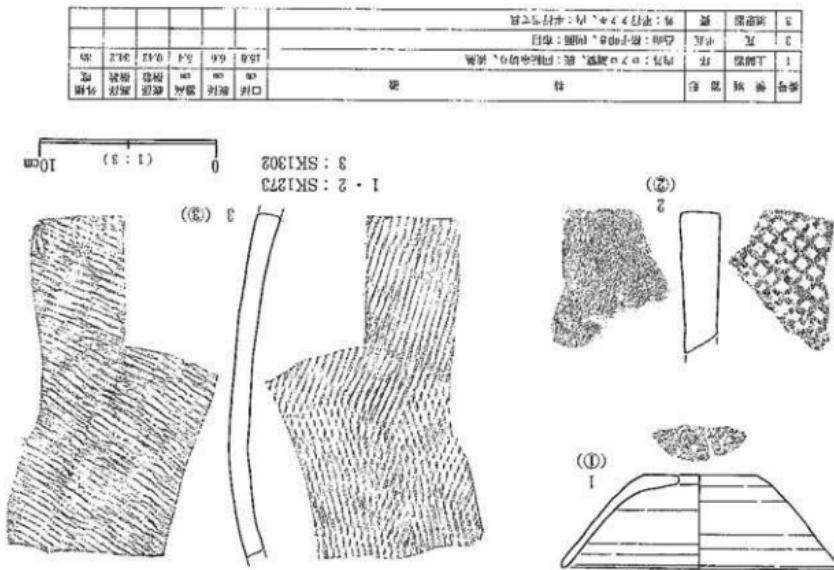


第18図 SK1271～1273・1276・1286土坑

第20圖 SD1305溝狀遺跡



第19圖 SK1273·1302出土遺物



S K1302土坑（第18・19図、図版4）

拡張区中央東部、J G15で検出した。東側に隣接してS K1273が構築されているが、その新旧は不明である。規模は一辺が90cm前後の隅丸方形を呈すると思われる。深さは32cmである。堆積土中には拳大から20cmを超すような角礫（硬質泥岩）が10数点見られ、これは意図的に投げ込んだものと考えられる。角礫に混じり須恵器破片も出土している。3は須恵器甕であり、外側面に平行タタキ・当然具痕が見られる。

S K1306土坑（第11・12図）

拡張区中央南側、J F16で検出した。S I1281と重複し、同窓穴堆積土を切り込んで構築している。その規模は長さ85cm×幅75cmの略円形を示し、深さは20cmである。堆積土中には焼土・炭化物を多量に含み、土師器も混在している。

S K1311土坑（第8図）

拡張区南西部、J G18で検出した。S I1266西側壁と重複する位置関係にあるが、直接的な重複は認められず、新旧等は不明である。規模は長さ76cm×幅70cmの円形を呈する。深さは確認面から最深で45cmとなる。堆積土中に土師器の細片が含まれている。

③溝跡

溝状を呈する遺構は、出土遺物がなくその構築時期を特定できない。ただ後述のように本年報においては、S D877空堀を他遺構との重複関係から中世に帰属させることにして、周辺の溝跡（特にBトレンチ内）は、掘り込み面の確認と配置状況（土塁・空堀と溝の位置関係・方向性の検討）を通して、大部分は古代に属すると見たい。

S D1303溝跡（第5図）

B・Cトレンチの交差部で検出した。S I1274窓穴住居跡と重複し、これを切るが、S F1300上塁盛土が本溝跡堆積土の上部にくる。溝の幅は90~110cm、深さ30~42cmであり、北西-南東方向に延びる。

S D1304溝跡（第5図）

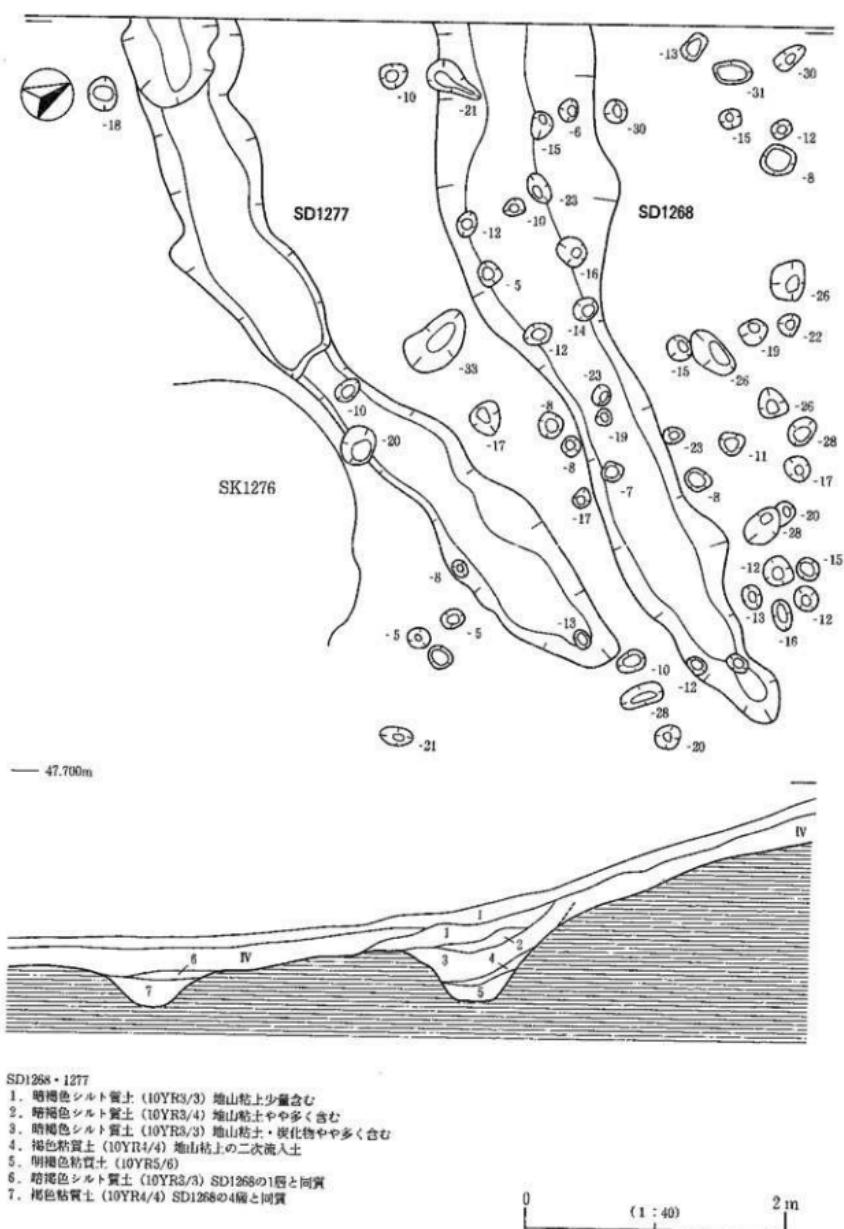
Bトレンチで平坦面から北側にやや下る位置で検出した。およそ東-西方向に延び、確認面での幅は80~90cm、深さは50cmとなり、断面形状は緩い逆台形を示す。S D1303は本溝跡の南約4mにあり、両者は同一方向をとるものではない。

S D1305溝跡（第20図）

Bトレンチ北側緩斜面で検出した。北端部のS I1295とS D1304の間に位置する。およそ北西-南東方向に延び、S D1303と同一方向を示す。確認面での幅は80cm前後、深さは20~32cmとなる。

S D1268・1277溝跡（第21図、図版5）

拡張区西端で検出した。2条とも東西方向に延び、斜面上位がS D1268、0.5~1.5m離れた下位にS D1277がそれぞれ位置する。前述のBトレンチで確認したような溝とは異なり、しっかりした掘り込みではない。壁・底面とも凹凸が著しく、幅・深さも一様ではない。S D1268は調査した長さ6m、最大幅1.3m、西端での深さ0.5m、S D1277は調査した長さ6.3m、最大幅0.9m、西端での深さ0.28mである。両溝跡内より土師器細片が、S D1277では平瓦片が出土している。



第21図 SD1268・1277溝状造構

(2) 中世

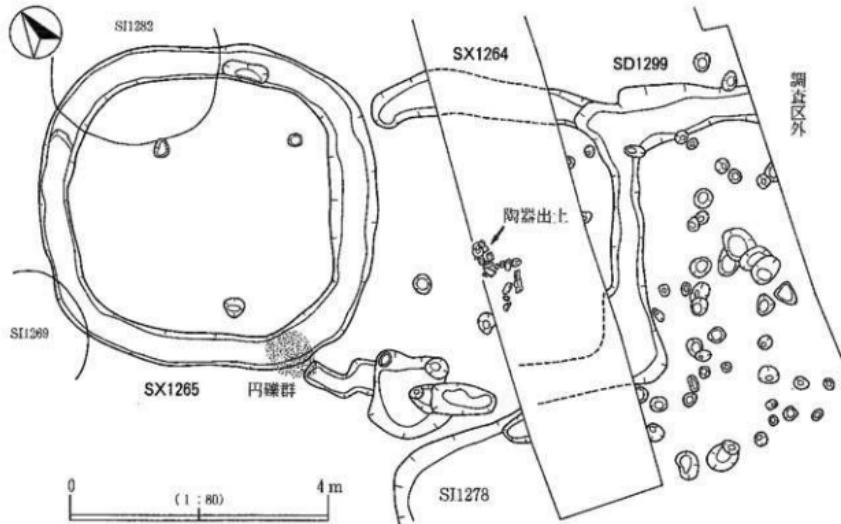
明確に中世と判断される遺構は、遺物の出土したSX1264墳墓のみであるが、同様の形態を示す溝状の遺構（SX1265）、SX1264に接続するSD1299溝跡と、土壠・空堀も本項で扱う。また焼骨がまとまりをもって検出された遺構（火葬墓3基）と同一面上で確認した焼土遺構6基は、古代の竪穴状遺構を切り込んで、あるいはその上位面に構築されていることから、近世以降の可能性も含みつつ、本項で記述する。

①墳墓・隅丸方形溝状遺構

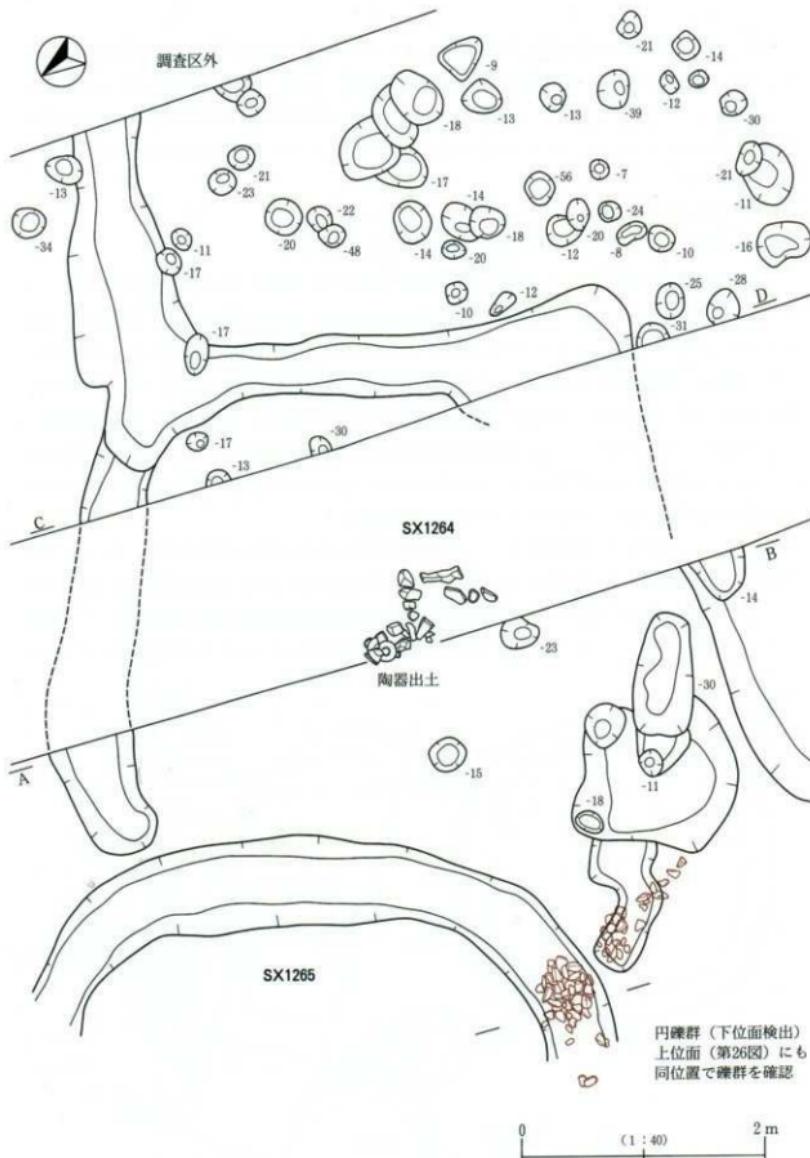
SX1264墳墓、SD1299溝跡（巻頭図版2、第22～25図、図版5・6）

拡張区北東側の平坦面、J.I 14を中心とする地区で検出した。現表土下わずか5～10cm程のところから、倒立した擂鉢とその直下に陶器壺が正立して確認された。遺物を観察すると、擂鉢はその上部を打ち欠いて皿状に加工したもの（下半は完形）を壺の上に蓋をするように被せていた。植物根等により口縁部の一部を破壊されてはいるものの、壺は完形品を埋設したと判断される。また壺の下には、盤状を呈する礫（硬質泥岩）が数点見られる。その並べ方は雜ではあるが、礫を敷いた上に壺を置くことを意図したものと考えられる。礫は長森基盤層に存在する硬質泥岩であり、予め盤状に剥離されていたものを集め敷いたものであろう。なお礫の中には1点のみではあるが、おそらく縄文時代の半円状扁平打製石器（擦石）を転用したものも含まれていた。

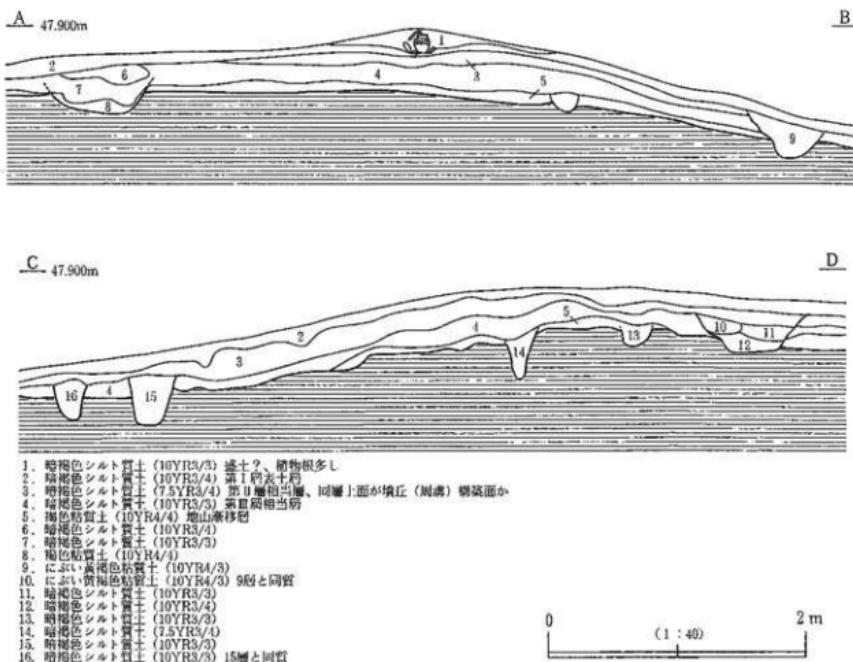
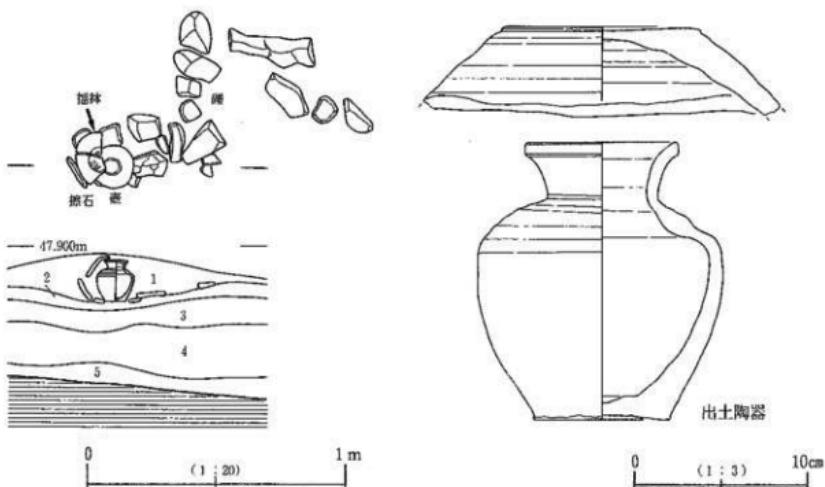
壺の出土した位置を今一度確認すると、ここは周囲の表土層より僅かに高まりをもっていることが判明し、このことから盛土を残存させる墳墓であった可能性が出てきた。盛土は周辺の表土高からすれば20～50cm程の高まりに過ぎず、また土層断面観察でも明らかな盛土層の確認はできなかった。現表土下に一部で礫を敷いていることから、当時の地表面下に手を加えていることは間違いないことと考



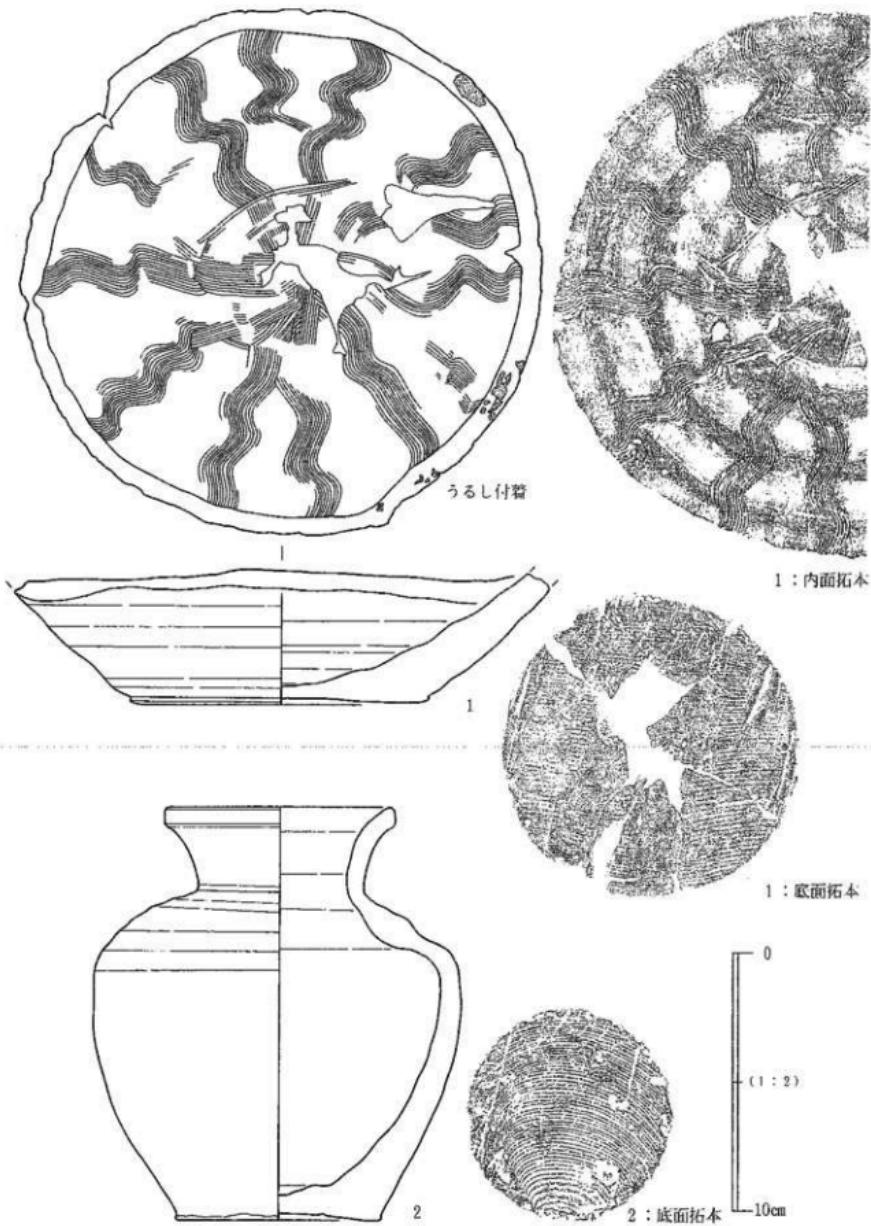
第22図 SX1264墳墓とSX1265隅丸方形溝状遺構全体図



第23図 SX1264墳墓（1）平面図



第24図 SX1264墳墓(2) 土層断面図



第25図 SX1264墳墓出土陶器

え合わせると、自然地形の起伏をうまく利用したものとも推測される。一方、推定盛土範囲を精査したところ、その縁辺には北西側に隣接するS X1265と同様の溝が巡ることが明らかとなり、周溝を伴う墳墓であったと判断された。その規模は、周溝外側で一辺が5m前後の隅丸方形となる。溝の幅は40~50cm、深さは15~20cmとなる。なお溝はその北東隅から枝分かれするように東に1条延びる(S D1299)。本墳墓との関係は不明確ではあるが、未調査区に及ぶ新しい墳墓あるいはS X1264の拡張・改修に伴うもの可能性もある。現況での溝の幅は50~80cm、深さは10~13cmであり、長さ2m分を精査した。

壺は最大径(14.2cm)を胴部中～上半におく器高16cmの小型ロクロ壺である。ロクロ整形痕は最大径より上で比較的顕著にその凹凸が観察されるが、以下ではそれを消すようなナデ(横方向のち一部で縦方向)が加わる。器厚も下位ほど厚味を増し、小さいながらも重量感のある壺である。掲底の底面(底径8.0cm)には回転糸切り痕が残るが、ロクロの回転が弱いのか静止糸切り状に見える。切り離し面には沈線様の圧痕が認められ、乾燥時には寰子状の台に置かれていたと思われる。器面は典型的な須恵器と同じ暗灰色を呈するが、肩部を中心にごま塙状・黄褐色の灰を被っている。焼成は良好である。

擂鉢はその上半部を意図的に打ち欠き高さ5.2cm、口径20.5cm皿状にしており、欠損部の破片は一切出土していない。現況での口縁部を見ると部分的にはあるが、漆と考えられる暗褐色の付着物が認められ、このことから次の点を指摘できる。使用時に何らかの要因でおそらく粘土積み上げ箇所から皿状に欠落した擂鉢を漆垂ぎにより補修して使用を続けていた。これを墓に埋納する段階で再び接合部から打ち欠いて皿状に整形し、これを壺の蓋に転用したと言えよう。擂鉢外底面(底径11.4cm)には静止糸切り痕が残り、壺同様に寰子状の台に置かれていたと考えられる。内面には幅1.2cm(卸目12本)の櫛目が波状に13単位入れられている。この面全体に摩耗痕があることから、擂鉢として長期あるいは頻度の高い使用が推測される。器面の色調は壺よりやや白っぽく、灰～灰白色を呈し、焼成は良好ではあるが、壺に比較するとややあくまく見える。

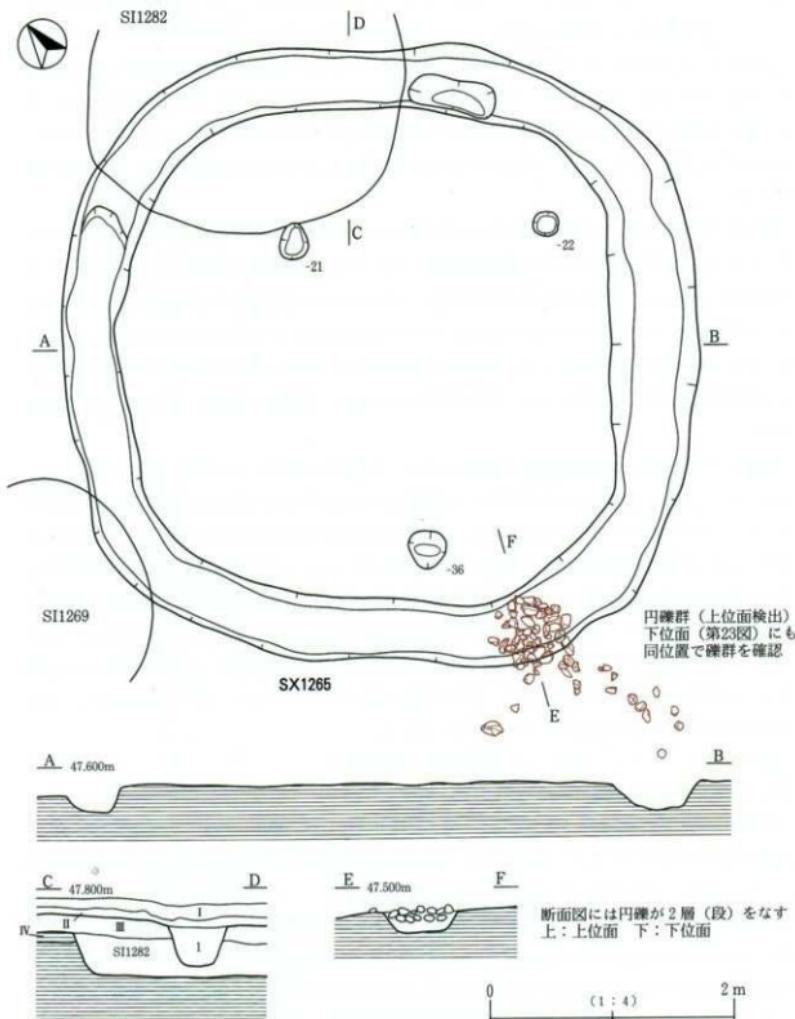
壺の内容物については、次節(1)で分析報告を掲載する。

S X1265隅丸方形周溝遺構(第22・23・26図、図版5・6)

拡張区中央北側の平坦面、J J 15を中心とする地区で検出した。幅40~80cm(平均的には50~60cm)の溝が隅丸方形を呈するように巡るもので、その外径は東西5.2m×南北4.9mとなる。溝は途切ることなく全周し、その深さは8~25cm、底面は凹凸が著しい。

溝の南側の一角には確認面上から挿入の円礫(河原石)が110個まとまりをもって見つかっている。集石の範囲は径60cm程で高さ20cmの間に少なくとも2~3段積まれている(第26図断面図参照)。第26図には上位面での、第23図には下位面での礫をそれぞれ図示している。礫は一部、南側の溝内(S X1264墳墓周溝か)にも見られる。この円礫は払田柵跡基盤層に存在する角礫(硬質泥岩)ではなく、明らかに他所から運び込まれたものである。なお円礫の平均重量は306gである。

溝で囲まれた内部には明確な盛土あるいは掘り込み施設は確認できなかった。しかし南東側に隣接するS X1264墳墓の存在を考えれば、構築時には盛土を伴う墳墓であった可能性が高い。



SX1265
1. 黒褐色シルト質土 (10YR2/3) 地山粘土を斑状にやや
多く、炭化物少量含む

第26図 SX1265隅丸方形溝状遺構

②火葬墓

S X1283火葬墓（第11図、図版7）

拡張区中央南側、J G 16で検出した。古代の竪穴S I 1281の上位面に位置する。杉木根の直下にあたり、その搅乱を受け不明確な面もあるが、およそ径25cmの範囲内に骨がまとまる。

S X1284火葬墓（第11・33図、図版8）

拡張区南東側、J F 15で検出した。古代の竪穴S I 1280北壁を切り込み、その下位面には縄文時代の土坑S K 1293が位置する。S X1283火葬墓はここから西約4mにある。骨は径30cm程の円形の範囲にまとまって確認されたが、明確な掘り込み等の施設は不明である。

S X1294火葬墓（第11・33図、図版9）

拡張区南東側、J F 15で検出した。縄文時代の土坑S K 1293の上位面にあたる。北側に位置するS X1284火葬墓とは僅か80cmの距離にある。骨は径20cm程の範囲にまとまり、明確な掘り込み等の施設は検出されなかった。以上3基の火葬墓出土の骨については、次節（2）で分析報告を掲載する。

③焼土遺構

S N1287・1291・1307～1310（第11・14図、図版8）

拡張区中央南側にある焼土遺構群である。およそ北西～南東方向、等高線に添う形ではば一列に6基が並ぶ。これらは古代の竪穴S I 1286・1289・1281の上位面に位置し、各竪穴に堆積土が形成された後に構築されたものであることを確認している。規模はS N1287で長さ85cm×幅65cm、S N1291で長さ50cm×幅42cm、S N1307で長さ95cm×幅50cm、S N1308で径30cm、S N1309で長さ90cm×幅45cm、S N1310で長さ65cm×幅55cmの椭円あるいは略円形を呈する。これら焼土遺構は、その東側に位置する火葬墓と同一面にあたることから両者の関係が想起される。

④土壘・空堀跡

S F 1300・1301土壘跡（付図、第27図、図版9）

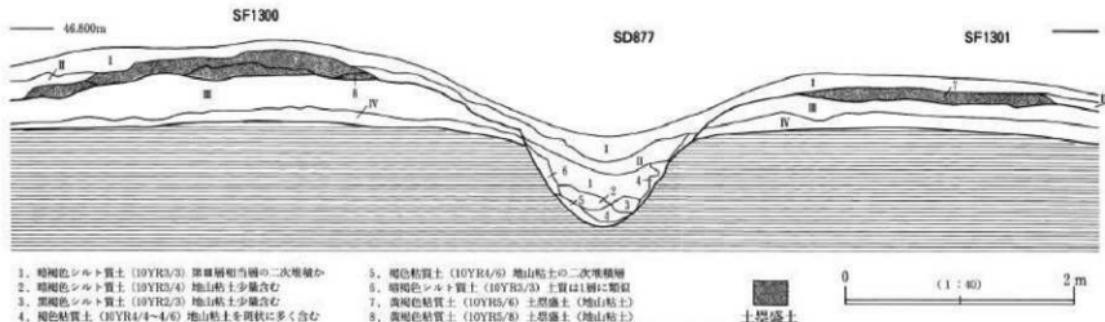
長森丘陵部西端において南北に並ぶ2条の土壘跡である。その間にS D877空堀が位置する。東側土壘をS F 1300、西側土壘をS F 1301とする。およそ南北に延びるが、確認したその中央部でいかく東に屈曲し、緩い逆「く」字状を呈する。

S F 1300土壘は、確認した長さは51m、上面幅は1.4～2.7m、基底幅は4.5～5.5mとなる。現況での高さは空堀の表土から土壘頂部まで0.8mである。Cトレーナーを設定して断面観察を行ったところ、土壘は第Ⅲ層上面に地山粘土（7・8層）を15～25cm程度の高さに盛り上げていることが判明した。

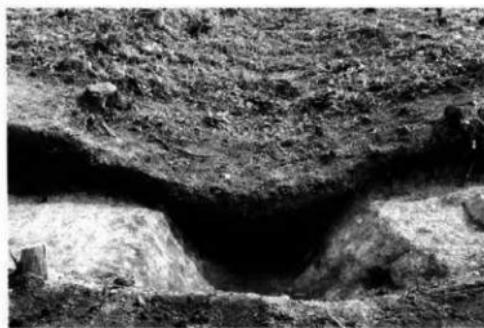
S F 1301土壘は、確認した長さは45m、上面幅は1.2～1.8m、基底幅は3.5～5.0mとなる。現況での高さは空堀部での表土から土壘頂部まで0.55mである。

S D877空堀跡（付図、第3・27～30図、図版9・10）

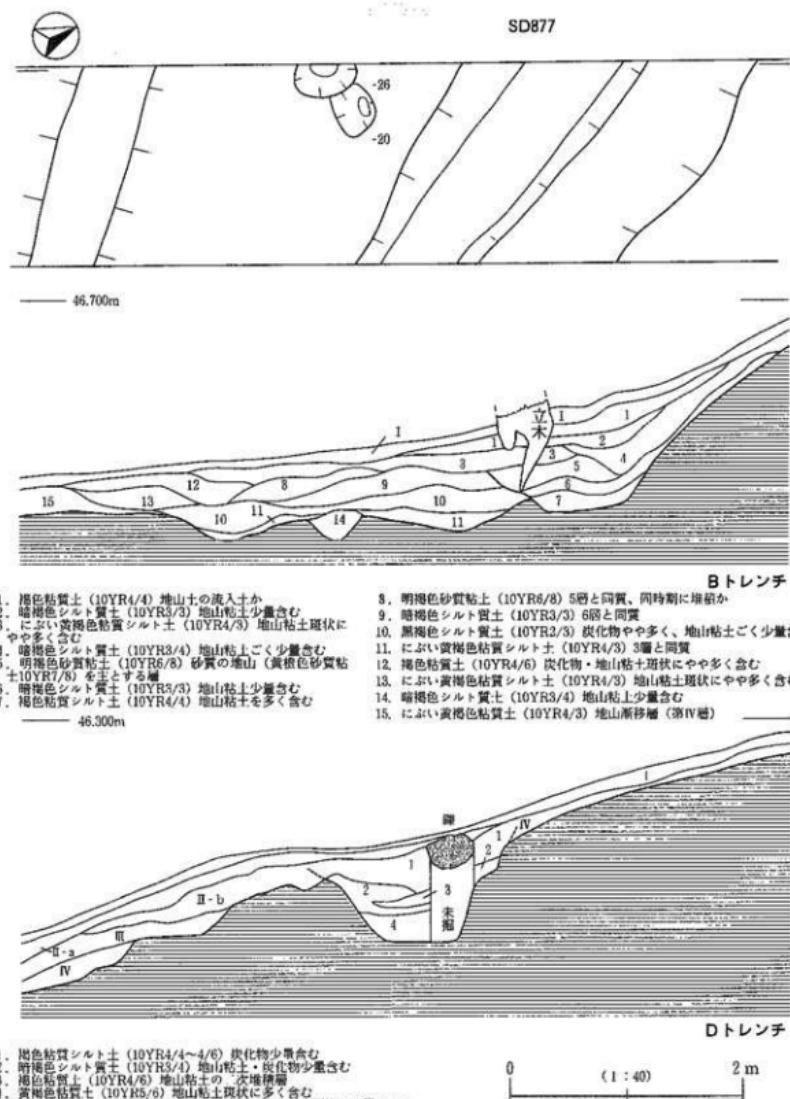
S F 1300土壘とS F 1301土壘に挟まれる位置にあり、長森丘陵西端部を南北に延びる。現況でも產地の道路状となり現認される。これは平成元年度の第80次調査で長森丘陵西側の微地形測量を行っているが、この測量結果として道路状の遺構が確認され図示されている（第3図参照）。これによると丘陵北西端を始点とすると、ここから土壘の間を南に延び、南端で等高線に添うように東に折れそのまま延びる。丘陵東側に進むと南に開口する沢があり、この手前で北に方向を変える。全体的な軌跡としては北に開く緩い「U」字形を呈するものである。



SF1300土壌（手前）・SD877空堀（中央）・SF1301土壌（奥）
東側から撮影、最手前にSI1274、奥の林が真山

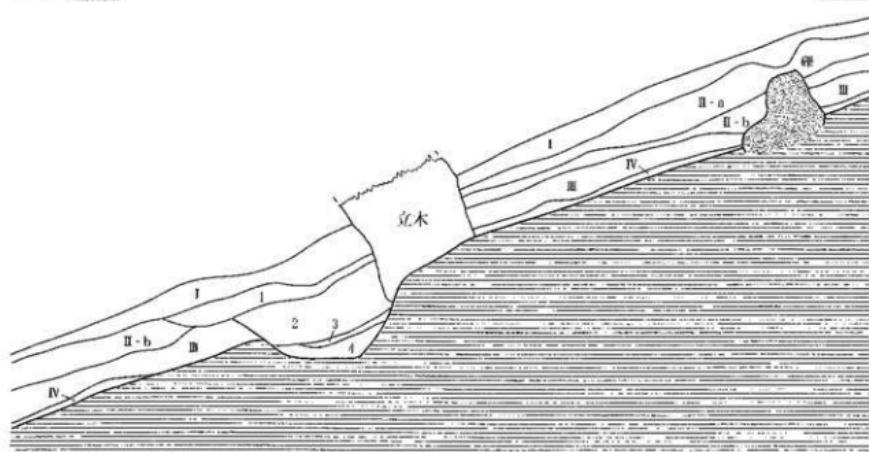


SD877空堀 土層断面（北→）Cトレーンチ内



第28図 SD877空堀跡（1）平面・断面図

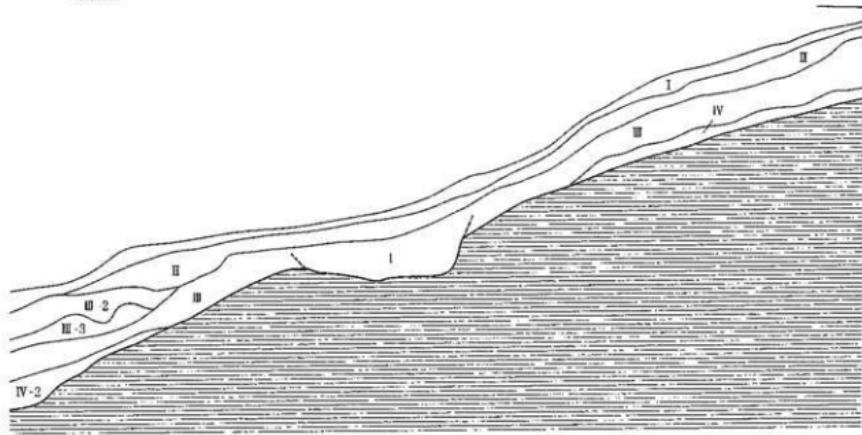
— 46.100m —



1. 灰黃褐色シルト質粘土 (10YR4/2) 厚く締まる、地山粘土を斑状に多く含む
2. 純褐色シルト質土 (10YR3/3) 地山粘土やや多く含む
3. 純褐色シルト質土 (10YR3/4) 地山粘土やや多く含む
4. 暗褐色シルト質土 (10YR3/3) 地山粘土やや多く含む
※混入する地山粘土の移送は細かい

E トレンチ

— 46.200m —



1. 黒褐色シルト質土 (10YR2/3) 第Ⅲ層に類似。地山粘土斑状に多く、炭化物も少景合む

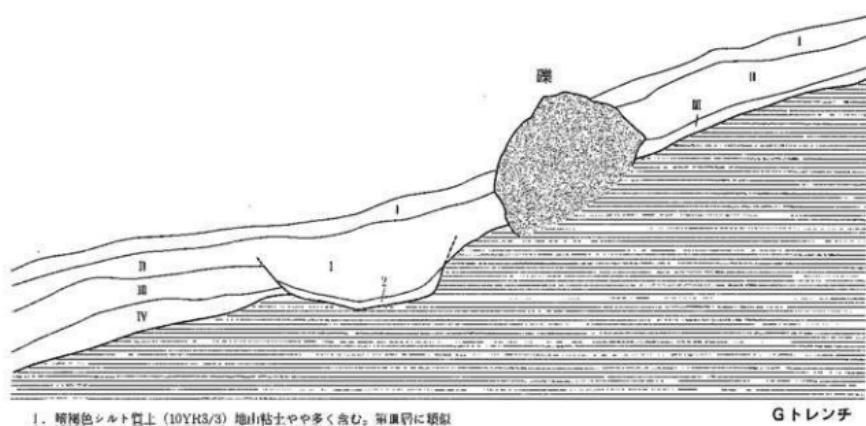
(1 : 40)

2 m

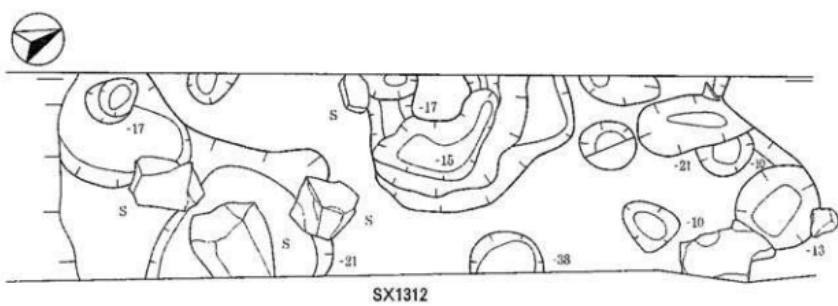
0

第29図 SD877空堀跡（2）断面図

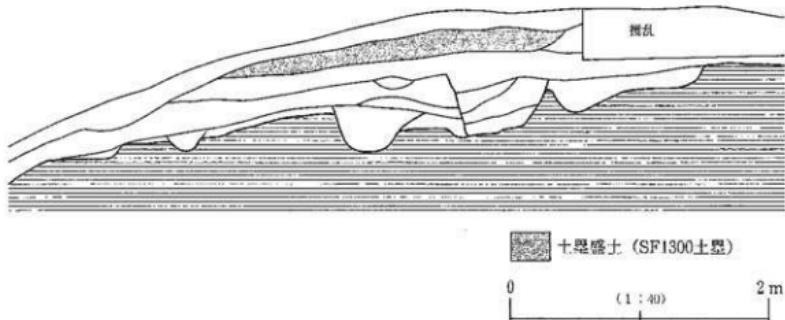
— 47.100m —



第30図 SD877空堀跡（3）断面図



— 18.100m —



第31図 B ブランチ内（中央南側）遺構配置図 (SX1312)

道路状遺構は、同年度第81次調査においてその北西端部を精査し、溝跡であることを確認し、S D 877溝跡としている。この時点でのデータは、確認した長さ16m、上面幅1.7~2.0m、深さ0.45~1.0m、底面は平坦で、断面は逆台形を呈するとある。

今次調査ではB~Gトレンドで同溝跡を検出し、これは現況の道路状微地形下に位置することを確認できた。本遺構は丘陵西端部のみではあるが、土壠に挟まれる位置で確認されたことを受け、溝跡を空堀跡とし、番号は平成元年度のS D 877を踏襲することにした。

堀跡の規模は、Bトレンドで上面幅1.2m、下面幅0.7m、深さ0.8m、Cトレンドで上面幅1.6~2.0m、深さ0.8m、Dトレンドで上面幅1.5m、下面幅0.7m、深さ0.7m、Eトレンドで上面幅1.4m、下面幅0.8m、深さ0.7m、Fトレンドで上面幅1.4m、下面幅0.8m、深さ0.4m、Gトレンドで上面幅1.6m、下面幅0.6m、深さ0.45mとなる。断面形状はCトレンド部でU字形に近い形状を示す(第27図)他は、箱堀状の逆台形を呈している。出土遺物はない。

(3) 繩文時代

該期の遺物が出土した遺構は、S I 1282竪穴状遺構1基のみであるが、これに酷似する形態をもつ遺構・重複関係などから類推して次の6遺構(竪穴状遺構4基、土坑2基)を繩文期と判断している。

①竪穴状遺構

S I 1289竪穴状遺構(第32図、図版11)

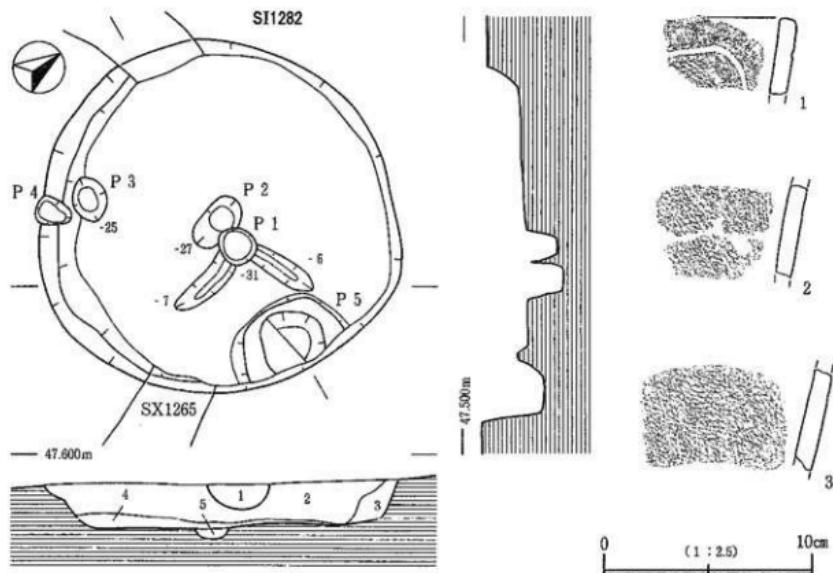
拡張区中央北部、J I・J J 16で検出した。中世の墳墓(S X 1265)と東端で重複し、これに切られる。規模は径2mの整った円形を呈する。確認面から底面までの深さは最深で27cmとなる。底面は平坦であり、堅く締まる。堆積土は褐色系の粘質シルト土単層で人為的に埋め戻されたと判断される。この中には長さが20~30cm位の角礫(硬質泥岩)が5点底面直上で見つかっている。これも意図的に置かれたと考えられる。底面中央に置かれた礫の下から、径18cm、深さ24cmの小柱穴が検出された。これらのことから、竪穴廃棄時に中央の柱を抜き取った後、その穴の上に長森基盤層に存在する角礫を1点置き、その周囲にも4点の礫を等間隔状に置いた後に地山粘土を多く含む褐色土で埋め戻したと跡付けが可能となろう。

S I 1270竪穴状遺構(第33図、図版12)

拡張区南東隅、J F 13・14で検出した。規模は長さ(南北)220cm×幅185cmの略円形を示す。この中に一段下がる形で径160cmの円形を示す壁溝で囲まれた箇所が存在する。溝は幅10~20cm、その深さは5cm前後である。従って底面は2段状となり、確認面からの深さは、溝のない上位面では24cm、溝で囲まれた下位面での最深は45cmとなる。下位面底部は平坦であり、同面中の堆積土には拳大の角礫(硬質泥岩)が10数個含まれる。壁溝をもつ円形プランの中央と北・南端には小柱穴が3本位置する。中央のP 1は径22cm、深さ19cm、北端のP 2は径14cm、深さ28cm、南端のP 3は長径26cm×短径15cm、深さ35cmであり、3本が一直線上に並ぶ。

S I 1282竪穴状遺構(第32・34図、図版11)

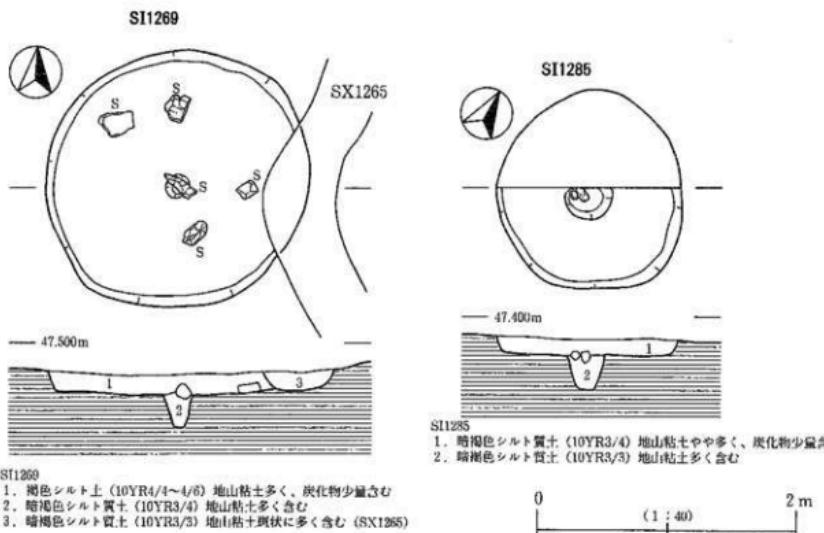
拡張区中央北端部、J J 15を中心とする地区で検出した。竪穴北半部は昨年度の第116次調査においてそのプランを確認していたものである。また竪穴中央には中世の墳墓S X 1265の溝が東西に横切る。規模は径2.7mの比較的整った円形を呈する。確認面から底面までの深さは最深で38cmとなる。



SI1282

1. 黒褐色シルト質土 (10YR2/3) 地山粘土斑状にやや多く、炭化物少量含む
2. 暗褐色シルト質土 (10YR3/4) 地山粘土(颗粒)斑状にやや多く、炭化物少量含む
3. 開色粘土質土 (10YR4/4~6) 地山粘土の二次堆積土、2~4層境不明確
4. にぶい黄褐色粘土質土 (10YR4/3) 地山粘土斑状にやや多く、炭化物少量含む
5. 暗褐色シルト質土 (10YR3/3)

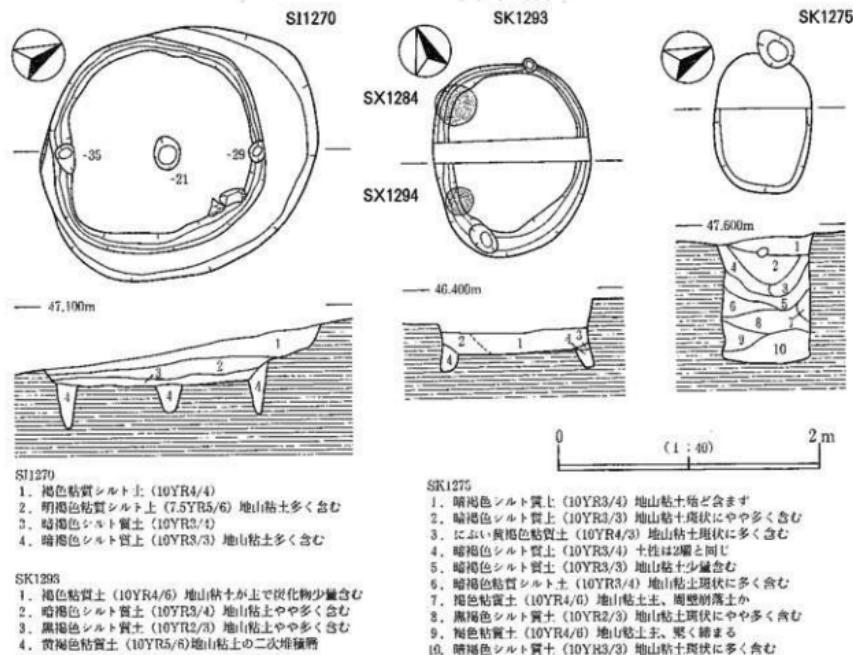
第33図 SI1282堅穴状遺構出土遺物



SI1269

1. 開色シルト土 (10YR4/4~6) 地山粘土多く、炭化物少量含む
2. 暗褐色シルト質土 (10YR3/4) 地山粘土多く含む
3. 暗褐色シルト質土 (10YR3/3) 地山粘土斑状に多く含む (SX1265)

第32図 SI1269・1282・1285堅穴状遺構



第34図 SI1270堅穴状遺構、SK1275・1293土坑

底面は平坦で堅く締まる。堆積土は3層に分けられるが、基本的には地山粘土細粒を多く含んだ暗褐色土（2層）で人為的に埋められたと考えられる。

底面には小柱穴4本、溝2条、小土坑1基が掘り込まれる。小柱穴は中央に2本（P1・2）、南側の壁直下に2本（P3・4）それぞれ重複・隣接して位置する。中央のP1は径26cm、深さ31cm、P2は長径42cm×短径28cm、深さ28cmであり、P1がP2を切り込んでいる。このことから底面中央並びに南壁際の2本柱からなる堅穴であり、途中で建て替えが行われたと判断される。溝は中央のP1から北東方向に約60cm（深さ6cm）と、南東方向に約55cm（深さ7cm）それぞれ延びる。またP5とした小土坑は東側壁に取り付くように配置され、その規模は径50cm程の略円形を呈する。本土坑の周囲には幅10~15cm、高さ8cm前後の周堤が逆コ字状に認められ、特殊ピットと称される類であろう。周堤は地山の掘り残しにより作られたものである。周堤を含めた土坑の規模は南北が95cm、東西が55cmとなり、その上部から底面までの深さは25cmである。

出土遺物は埋土中（中～下位）より繩文土器が8点得られている。図示したものは3点であり、これらは後期前葉に位置づけられる。しかし他5点は一辺が2cm未満の小片であり図示できなかったが、胎土に纖維を含む個体もあり、前期に属すると思われる。

S I 1285堅穴状遺構（第32図、図版12）

拡張区北東隅、J I 12・13で検出した。規模は長径155cm×短径140cmの略円形を呈する。確認面か

らの深さは17cmである。底面は平坦で堅く締まる。その中央には径30cm、深さ27cmの小柱穴が位置する。堆積土は柱穴内を除くと、地山粘土を多く含む暗褐色土（2層）で充填され、人為的埋土と判断される。柱穴内堆積土（3層）最上位には拳大の角礫（硬質泥岩）が2点見られる。これはSK1269と同様のあり方を示す事例であり、柱を抜いた後に礫を入れたものと考えられる。

②土坑

SK1275土坑（第33図）

拡張区北西隅、JK18杭を中心とする地区で検出した。規模は長さ108cm×幅74cmの東西に長い隅丸長方形を呈する。土坑はほぼ垂直に掘り込まれ、底面までの深さは最深で102cmに達する。堆積土は10層に細分されたが、地山土の混入状況から基本的には人為的堆積層と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK1293土坑（第33図、図版12）

拡張区南東側、JF15で検出した。SX1284・1294火葬墓と古代の豊穴SI1280と重複し、そのいずれにも切られる。規模は長さ150cm×幅120cmの南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは北側で51cmとなる。底面は細かい凹凸があるが堅く締まる。またその外周には幅10~15cm、深さ8~20cmの溝が全周する。堆積土は4層に分けられるが、基本的には地山粘土を多く含む褐色土（1層）で充填されるもので、人為的埋土と判断され堅く締まっていた。

（4）時期不明

時期の特定されない遺構は、調査区東端部（Gトレンチ）で確認した土坑3基である。これは調査前の段階で既に擂鉢状の窪地として認められており、同様の形状を示すものは、昨年度第115次調査におけるSK1217・1218である。

SK1296・1297・1298土坑（第35図、図版8）

調査区東端部で3基が南北に並ぶ形で検出された。現況での規模は、SK1296が径2.6mの略円形、SK1297が長径2.65m×短径2.15mの不整椭円形、SK1298が長径2.55m×短径2.3mの略円形となる。確認面からの深さは、50cm前後となる。SK1296とSK1297の中軸線上を通るように南北方向にGトレンチを設定し掘り下げたが、土坑下面が地山面にまでは及ぶ掘り込みではないことを確認した。この周辺の堆積土には基盤層の角礫が多數含まれ、おそらく縄文期において剥離されたであろう剥片あるいは石核の出土は見られるものの、本土坑に関わりをもつ遺物は認められなかった。

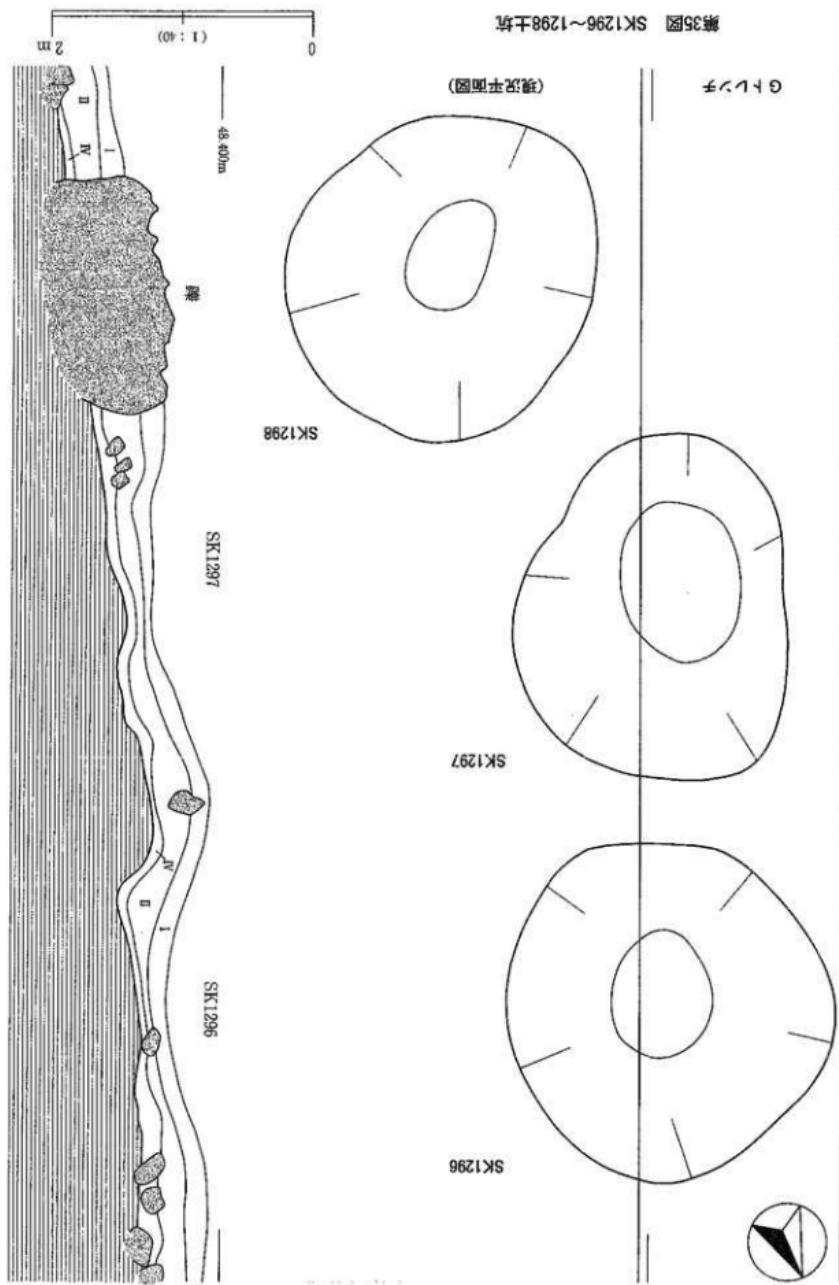
3 遺構外出土遺物（第36・37図）

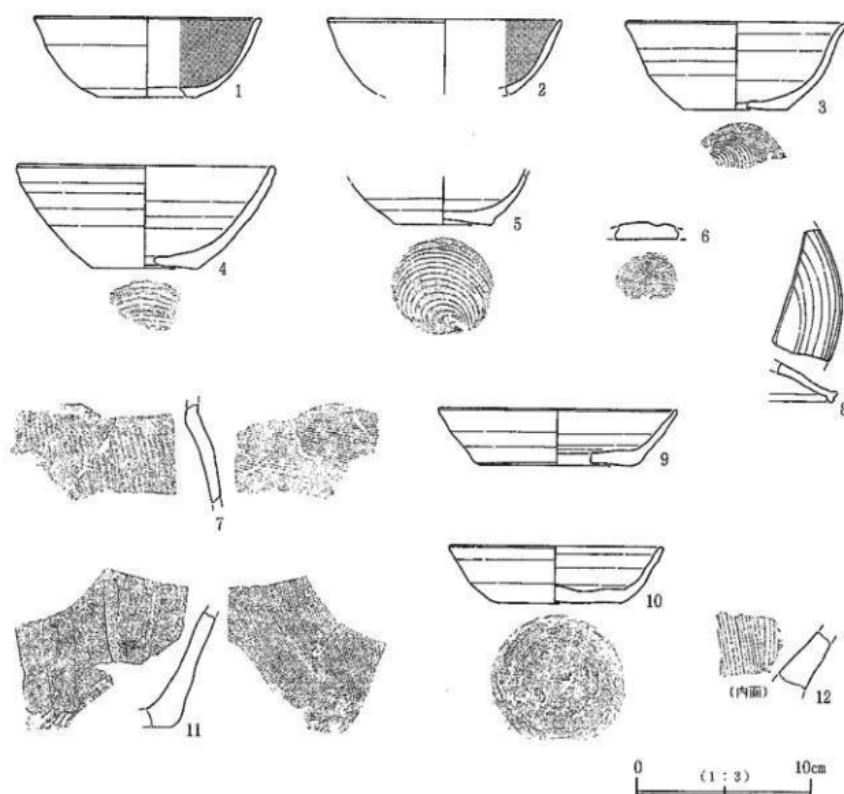
遺構外の出土遺物には古代の土師器・須恵器、中世陶器、繩文土器・石器がある。本項では縄文時代の石器を除く資料について紹介する。

（1）土師器・須恵器（1~11）

1~2は、内面に黒色処理が施される椀形を呈する土師器壺である。2は被熱を受け黒色の一部が消失している。3~6は、非内黒の土師器壺であり、底面に回転糸切り痕を残す。6は円盤状を呈する底部破片である。これは成形時の巻き上げ（渦巻き状）箇所からの欠落あるいは意図的な二次加工のいずれかであろう。7は非ロクロの土師器甕である。外面には継方向、内面では横方向のハケメが

第35圖 SK1296~1298土坑

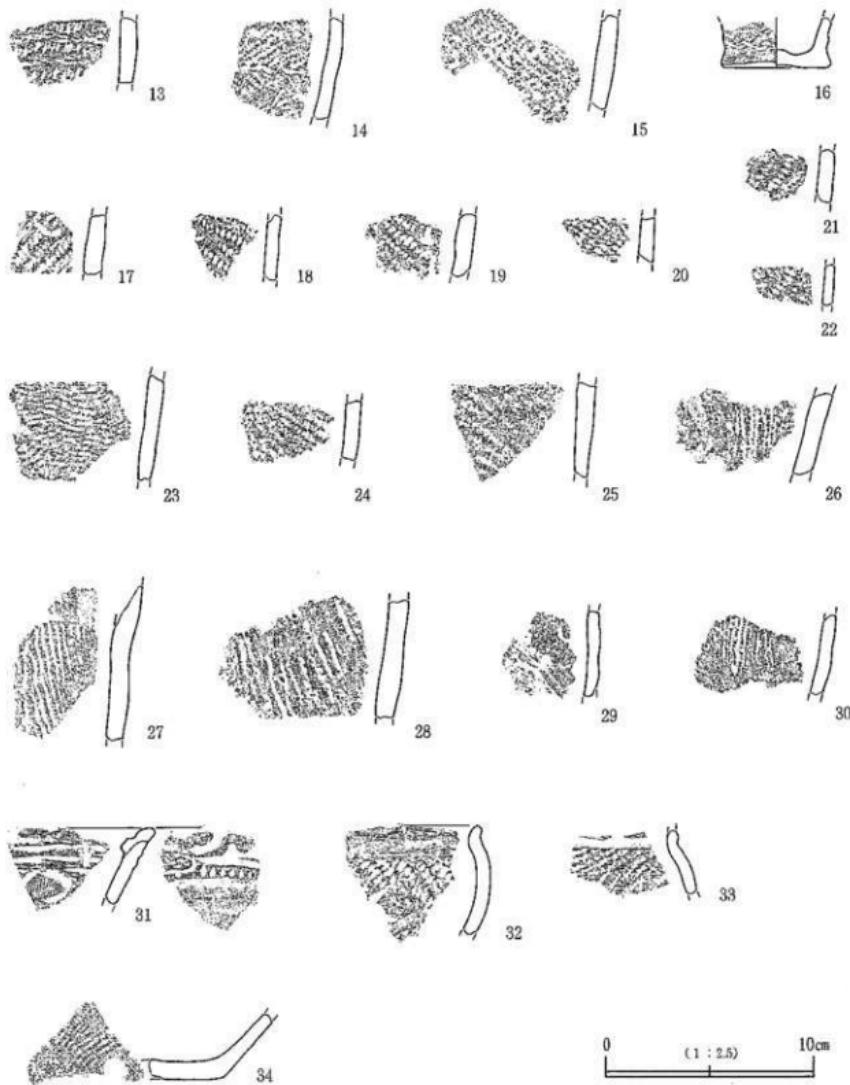




番号	種別	器形	出土位置・編位	特	造	寸法 cm	底径 cm	底厚 cm	底径 底厚倍数	高径 底厚倍数	外縁 度
1	土器	杯	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、内面黑色施墨		13.0	5.8	4.6	0.15	35.1	25
2	土器	环	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、内面黑色施墨		15.4		(4.0)			
3	土器	环	JF17・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		12.7	6.0	5.1	0.47	40.2	24
4	土器	环	E16-2・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		14.6	6.2	5.9	0.42	39.9	29
5	土器	环	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り			5.6	(2.9)			
6	土器	环	JG16	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り							
7	土器	甕	JF16・Ⅱ層	内身：ハケメ							
8	須恵器	蓋	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整							
9	須恵器	环	E16-2・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、乾用鏡		13.7	9.2	3.3	0.67	21.1	32
10	須恵器	环	E16-2・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、乾用鏡		12.2	7.7	3.3	0.65	27	28
11	須恵器	壺か 表縁	F16-2・Ⅲ層	外：体部下部タッキーケズり、内：ハケメ							
12	陶器	罐	表縁	外：ロクロ調整、内：泥目							

第36図 遺構外出土遺物（1）土器類・須恵器・中世陶器

それぞれ顕著に認められる。8は須恵器蓋の破片である。9・10は底部に回転ヘラ切り痕を留める須恵器環である。2点とも内面には磨面と墨痕が観察され転用鏡として使用されたことが判る。11は無台の須恵器壺あるいは小型の甕となるものであろう。体部外縁には縦方向のケズリが見られるが、底部との境には斜位のタタキが僅かに残る。内面は縦方向のハケメである。



第37図 遺構外出土遺物（2）縄文土器

なお1・2・5・7・8はJF16II層出土であり、S11280あるいはS11281に伴う遺物であった可能性がある。

(2) 中世陶器(12)

須恵器系中世陶器が1点採集されている。12は擂鉢の底部に近い部位の小破片である。灰色の色調を呈し、内面には鉄目が密に入れられる。SX1264墳墓出土の擂鉢よりは新しい段階の陶器であろうが、小片であり詳細は不明である。

(3) 繩文土器(13~34)

遺構外出土の繩文土器は調査区全域から点々と得られており、特定箇所に集中する傾向はない。胎土・文様・地文等から13~25は前期、26~30は後期、31~34は晩期に属すると考える。26~30は燃糸の継位回転であるが、29のみ条痕となる。32・33は両面に煤状炭化物が付着している。

第3節 自然科学的分析

(1) 払田柵跡第117次調査塚出土壺の内容物に関する自然科学調査

パリノ・リーヴェイ株式会社

はじめに

史跡払田柵跡は、秋田県仙北郡仙北町に所在する平安時代の城柵跡である。今回、第117次調査区内から中世の塚(SX1264)が確認され、塚頂部から珠洲系陶器壺が出土した。この壺は、形態や埋設状況から、骨壺あるいは経塚の外容器と考えられたが、壺内は土壤で充填され、肉眼では内容物の確認が困難であった。

そこで、この壺の内容物について情報を得るために、自然科学分析調査を行った。まず、遺体埋納について検討するためには、ヒトを含む動物遺体に多く含有されるリン酸・カルシウム含量および植物の影響を考慮するための有機炭素(腐植)含量の測定するほか、土壤中に残存する脂肪酸組成を調査する(脂肪酸分析)。また、種実などの残留状況を明らかにするために、微細遺物分析を実施する。

1. 試料

分析試料は、SX1264内部より出土した陶器壺内の土壤2点である。

壺の年代は13世紀代であり、擂鉢で蓋がされていた。壺は塚頂部の土坑内に埋設されており、土坑底部には扁平な礫が敷かれていた。

2. 分析方法

(1) 土壌理化分析

測定は土壤養分測定法委員会(1981)を参考に、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光度法でそれぞれ行った。

以下に、各項目の操作工程を示す。

<試料の調整>

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させ、風乾細土試料とする。風乾細土試料の水分を、加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。

<リン酸・カルシウム含量>

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解し、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸(P2O5)濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計により、カルシウム(CaO)濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

<腐植含量>

微粉碎試料0.100～0.500gを正確に秤量し、100ml三角フラスコに入れ、0.4Nクロム酸・硫酸混液を正確に10ml加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬にして、0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて、腐植含量(%)を算出する。

(2) 脂肪酸分析

試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール(2:1)を入れ、超音波によるソニケーションを行い、脂質を抽出した。ロータリーエバボレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールによりメチル化を行った。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップバックシリカを使用し、脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離した。

脂肪酸のメチルエチルの分離は、キャビラリーカラム(ULBON, HR-SS-10, 内径0.25mm, 長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A, SHIMADZU)を使用した。注入口温度は250°C、検出器は水素炎イオン検出器を使用した。

ステロールの分析は、キャビラリーカラム(J & W SCIENTIFIC, DB-1, 内径0.36mm, 長さ30m)を装着した。注入口温度は320°C、カラム温度は270°C恒温で分析を行った。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用した。

(3) 微細遺物分析

土壤を秤量した後、水酸化カリウム水溶液に浸して試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集め。集めた残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種類を同定する。

3. 結果

(1) 土壤理化学分析

結果を表1に示す。

表1 壱内土壤の土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量(%)	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)
壹内土壤 A	SiCL	10YR3/2 黒褐色	5.21	1.35	0.24
壹内土壤 B	SiCL	10YR3/2 黒褐色	9.51	1.28	0.36

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による

SiCL：シルト質堆積土(粘土15～25%、シルト45～85%、砂0～40%)

壺内の土壤試料は、シルト質埴土を主体として構成され、粘土分だけでなくシルト分や砂分も多い。土色は黒褐色を呈し、腐植含量は土色を反映して高い。

また、リン酸含量は1.3P_{2O5} mg/g前後、カルシウム含量が0.3CaOmg/g程度である。

(2) 脂肪酸分析

結果を図1に示す。

脂肪酸組成は、バルチミン酸（C16）とバルミトレイン酸（C16:1）の割合が高く、ステアリン酸（C18）やオレイン酸（C18:1）などもみられる。

また、ステロール組成はコレステロールとシトостテロール、スティグマステロール、エルゴステロールの割合が高いが、この中でも特にコレステロールが多い。

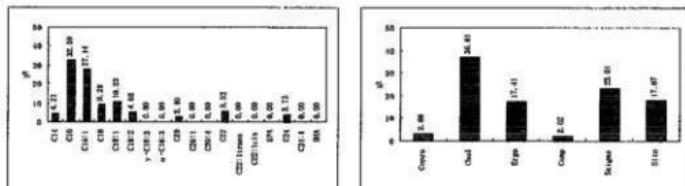


図1 壺内土壤の脂肪酸・ステロール組成

(3) 微細遺物分析

壺内土壤2点からは、種実遺体や骨片などの微細遺物は全く認められない。

4. 考察

SX1284頂部より出土した陶器壺内の土壤では、粘土分とともにシルト分や砂分も多かった。土壤中の粘土分は理化学成分を吸着・保持しやすく、逆に砂分は保持しにくい。そのため、壺内に動物遺体が埋納されていた場合でも、遺体成分が保持しにくい状態であったと推定される。また、土色からは植物由来の腐植成分が混在していることが示唆される。

ところで、リン酸の土壤中に含まれる量、いわゆる天然賦存量の上限は約3.0P_{2O5} mg/g程度とされる (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は、5.5P_{2O5} mg/gとの報告もある (川崎ほか, 1991)。さらに、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_{2O5} mg/gで統一した。これらの値を著しく越える土壤では、外的要因 (おそらく人為的影響によるもの) によるリン酸成分の富化が指摘できる。また、カルシウムの天然賦存量は含量幅がリン酸よりも大きいが、普通1~50CaOmg/g (藤賀, 1979)といわれる。

今回の結果と比較すると、壺内のリン酸含量とカルシウム含量はともに天然賦存量よりも低い。また、穀類や可食植物の種実などの微細遺物は検出されなかった。

一方、脂肪酸組成を食品成分表 (科学技術庁資源調査会編, 2000) など既知の脂肪酸組成と比較してみると、次の点が指摘できる。割合が最も高い脂肪酸は、動物および植物で多量に含まれるバルチミン酸（C16）である。また実験によれば、脂肪酸は熱に弱く、火熱を受けるとオレイン酸やリノール酸といった不飽和脂肪酸が減少し、代わりにバルチミン酸が増加するという報告がある (中野,

1993)。そのため、バルチミン酸の割合が高い要因として火熱を受けた可能性がある。ミスチリン酸(C14)やバルミトレイン酸(C16:1)も動物および植物に含まれる脂肪酸だが、やや肉や魚に多い傾向がある。C18の脂肪酸は動物、植物、菌類とともに多く含まれるが、今回検出が目立つステアリン酸とオレイン酸は動物油脂に多い。特にオレイン酸は、ほ乳類や鳥類に多く含まれる。また、動物の中でも魚介類に特徴的にみられるドコサヘキサエン酸やイコサペンタエン酸は、全く検出されていない。

ステロール組成では、動物由来のコレステロールが最も多く検出される。植物由来のステロールをみると、カンペステロールは少ないが、シトステロールやスクマステロールはやや多い。また細菌由来のうち、コブロスタノールは少ないが、エルゴステロールはやや多くみられる。分析を行った土壤はやや黒く腐植を含んでいるが、腐植の主な由来は植物であることを考慮すると、植物由来のステロールは土壤に本来含まれていた可能性がある。

これらから、壺中には、ほ乳類や鳥類に由来する成分が残留していると考えられ、出土状況から人骨の可能性がある。またバルチミン酸の産状を考慮すれば火熱による脂肪酸の変質があったと考えられ、火葬骨を埋納した可能性がある。

以上のように、今回の発掘調査で出土した壺の内容物は、おもに脂肪酸分析結果から動物遺体であり、埋葬に関わる遺物であったことが示唆された。しかし、同一試料でリン含量やカルシウム含量は必ずしも高くななど、課題が残されている。また、このような遺物に対する自然科学調査例は少なく、比較検討材料の蓄積が望まれる。今後とも、類例の分析調査を行い、資料の蓄積につとめたい。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信(1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壤の化学. 岩田進午・三輪喜太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 上塙養分分析法. 440p., 豊賢堂.
- 藤賀 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, p.57-61. 地質調査所.
- 科学技術庁資源調査委員会編(2000)四訂食品成分表2000. 香川芳子監修, 576p..女子栄養大学出版部.
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻. 411p., 農業団書.
- 中野益男 (1993) 脂肪酸分析法. 「第四紀試料研究法2 研究対象別分析法」, p.388-403, 東京大学出版会.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, p.39-40.
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄 (1995) 灯明皿の脂質分析. 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第7集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 第二分冊」, p.24-37. 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所.

(2) 払田柵跡第117次調査区出土試料（人骨）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県仙北町に所在する払田柵跡の第117次調査では、検出された中世墳墓の近傍から、3個体分の動物骨が出土した。これらの骨は遺物や遺構を伴わず、その年代や種類および性格などについて不明点が多くあった。本遺跡におけるこれまでの発掘調査では、動物骨がまとまって出土した例がなく、今回出土した動物骨は、古代から中世の時期における本遺跡周辺の土地利用状況などを考える上で、貴重な資料として注目されている。

今回の分析調査では、これら出土試料の年代や種類を明らかにすることを目的として、放射性炭素年代測定と骨の同定を行うことにした。

1. 試料

試料は、第117次調査区の、中世墳墓付近のS X1283・S X1284・S X1294の3箇所の遺構から出土した動物の骨格である。これらのうち、S X1283・S X1284の2遺構の試料では、比較的大きめの破片をそれぞれ数個選択し、箇所ごとにまとめて1点の試料とし（計2点）、放射性炭素年代測定用試料とした。一方、骨同定は、上記3遺構から出土した動物骨片全てを対象試料とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、(株)地球科学研究所を通じてアメリカ合衆国ベータ社(BETA ANALYTIC INC.)が行った。

(2) 骨同定

試料は、水洗・乾燥させた後接合し、肉眼による同定をおこなった。なお、同定は慈恵会医科大学の竹内修二先生の御協力を賜った。

3. 結果および考察

(1) 放射性炭素年代測定

いずれの試料からも、測定に必要なコラーゲンを抽出することができなかった。したがって、今回の2試料については、放射性炭素年代測定が行えず、年代値を得ることができなかった。

(2) 骨同定

同定結果を表1に、人骨各部位の名称を図1に示す。S X1283とS X1284から検出された骨格は、ヒト(Homo sapiens)である。同定できた部位を、図2に示す。

また、S X1294から検出された骨片は、細片のため、種や部位の同定ができない。

各試料は全て白色を呈す焼骨であり、顕著な変形やひび割れが観察されることから、900°C以上の温度で焼かれたと考えられる。また、湾曲した横方向のひび割れを伴う長骨の反り・ねじれが顕著であることから、死亡後まもなく、あるいは肉と骨を切り離さない状態で火葬された可能性が高い(アンドリュー・チャンバレン, 1997)。以下に、各試料の同定結果を述べる。

< S X1283 >

1個体分の人骨が検出された。骨の成長状態から、成人であると判断されるが、性別はわからない。

表1 出土人骨同定結果

出土遺構	S X1283		S X1284		S X1294	
個体数	1個体		1個体		不明	
性別	不明		不明			
推定年齢	成人（詳細不明）		成人（詳細不明）			
頭蓋骨	(脳頭蓋)	破片21.8g	破片6.8g	破片9.9g		
	(顔面部)	右頬骨～前頭骨頬 骨突起, 左前頭骨 頬骨突起				
	(頭蓋底部)	左側頭骨下額窓, 左鼓室部		破片1		
	下頸骨		破片7.2g	破片2		
齒	齒根			8		
椎骨	頸椎	椎体1	破片2.2g	破片12.5g		
	胸椎	椎弓2				
	腰椎					
	仙骨					
肋骨	左			破片30.0g		
	右					
肩甲骨	左					
	右	肩甲棘の基部1				
上腕骨	左		遠位端上の外側縁 ～鈎突窓1, 上腕骨 小頭1	骨体破片2, 遠位端付近 破片2		
	右					
橈骨	左	骨体破片1	中央骨体1, 遠位端 付近骨体1 近位端付近骨体1, 遠位端付近骨体1, 遠位端1			
	右					
尺骨	左		近位端1, 中央～遠 位端付近骨体1			
	右	骨体2				
手根骨			右舟状骨1, 右月状 骨1			
寛骨	腸骨	破片1				
	坐骨					
	恥骨					
大腿骨	左	骨体破片1	骨体1, 膝蓋面下方 の破片1 骨体1	破片19.0g		
	右					
胫骨	左		骨体1			
	右					
腓骨	左		骨体1			
	右					
膝蓋骨	左		骨体1			
	右					
足根骨	踵骨		後距骨関節面破片 左右各1			
	距骨					
中手骨／中足骨	3		後踵骨関節面破片			
指骨	基節骨		2	破片12.4g		
	中節骨					
	末節骨		5			
破片		四肢骨破片117.4g, 部位不明 破片65.3g	手根骨／足根骨1.8g, 四肢骨 破片103.7g, 部位不明破片 209.6g		部位不明破片 5.3g	
備考	各骨は細く短い (全体に小さい)		上肢の骨格が小さい	細片のためヒ トかどうか不 明		

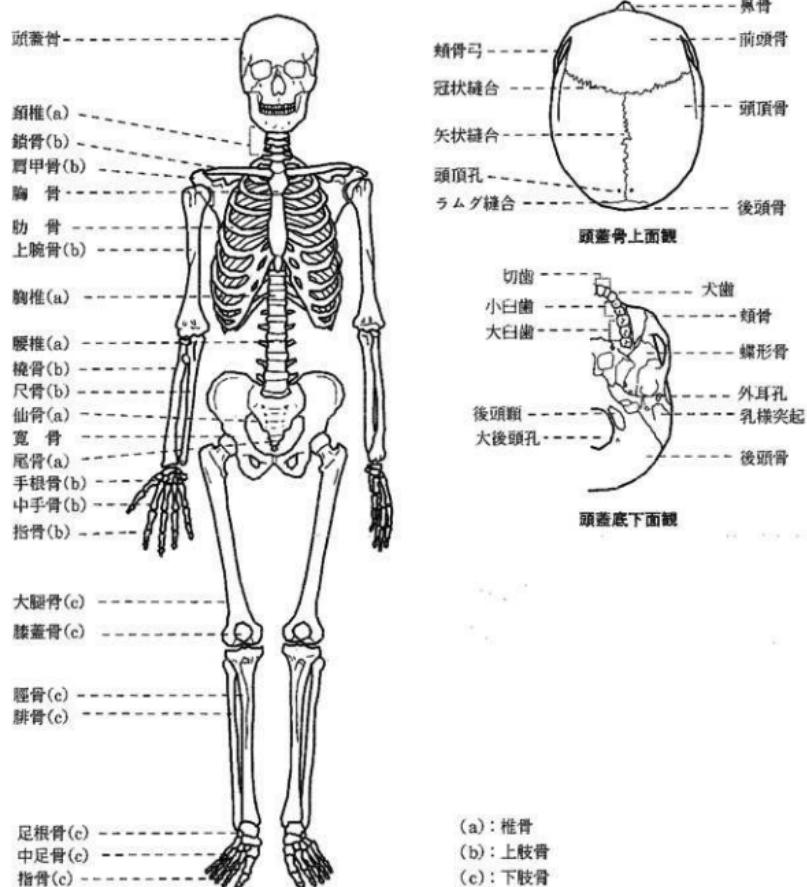


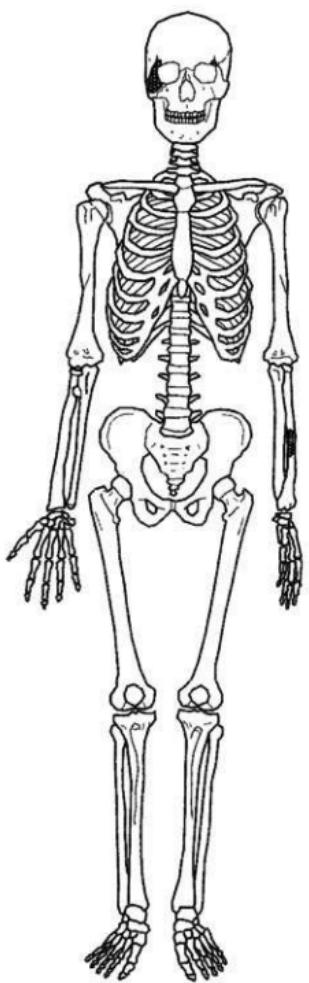
図1 人骨各部の名称

部位が同定できた試料は少ないが、頭蓋骨、椎骨、上肢骨、下肢骨があり、全身の骨格が揃っていたと思われる。

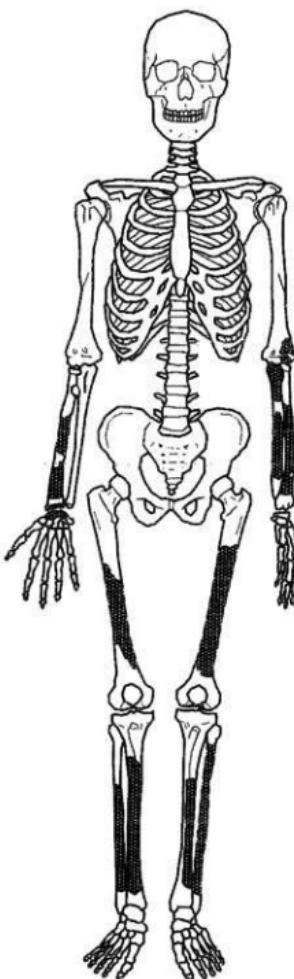
四肢骨は細く短く、椎骨も小さい。火葬されたことにより収縮していることを考慮しても、比較的小柄な個体であったと考えられる。

< S X 1284 >

1個体分の人骨が検出された。骨の成長状態から、成人であると判断されるが、性別はわからない。頭蓋骨、椎骨、肋骨、上肢骨、下肢骨があり、全身の骨格が揃っていたと思われる。頭蓋骨・椎骨・肋骨は保存状態が悪く、破片である。四肢の長骨は比較的保存状態が良好であり、右尺骨を除く前腕の骨格と自由下肢は、骨体の大部分が形状を保つ。



SX1283出土人骨



SX1284出土人骨

図2 検出された部位（網掛け部分が特定できた部分）

下肢骨は通常の大きさであるが、上肢骨は比較的小さい。

< S X1294 >

合計5.3gの焼骨片が検出された。形状から、ヒトを含めた哺乳類であることは明らかであるが、細片のため、種と部位の同定はできない。前二者が人骨であり、他の動物が検出されていないので、当試料も火葬人骨の一部である可能性がある。

4.まとめ

S X1283・S X1284から検出された骨格は、火葬人骨であった。S X1294から検出された骨片も焼けており、火葬人骨の可能性がある。今回の分析調査では正確な年代値を得ることはできなかったが、人骨であることが確認されたことにより、この遺跡の古代から中世の土地利用状況を考える上で貴重な出土例になったといえる。

今後、これらの火葬人骨の性格を考えるためにには、検出時の分布状況や、墳墓をはじめとする周囲の遺構との関係を含めて検討したい。

引用文献

アンドリュー・チャンバレン(1997)「大英博物館双書 古代を解き明かす① ヒトの考古学」, 堀江保範訳, 講談社学術文庫。

第4節 小結

第117次調査において得た情報は次のようにまとめられる。

1 古代

該期の確認遺構は、竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑・溝跡等であり、長森丘陵西部においては、昨年度の第116次調査と合わせても明確な掘立柱建物跡の検出はない。一方、竪穴状遺構は拡張区南側すなわち丘陵地南側緩斜面に群をなすように集中し、カマドをもつS I 1274竪穴住居跡は、平坦面から北側にやや下る緩斜面上にそれぞれ立地している。古代における各種施設は、現段階までのところ中世墳墓の占地する馬背状の狭い平坦面には立地せず、南北の緩斜面に位置することになる。古代においては平坦面上が無遺構域であり、この東西方向の空間が政庁と外郭西門を繋ぐ道路施設であった可能性が高まったと言えるであろう。

次いで個々の遺構、S I 1266竪穴状遺構とS I 1274竪穴住居跡について若干ふれておく。前者は拡張区南側に位置する竪穴状遺構である。カマドではなく、床面中央に地床炉を持つ。周辺では数は少ないものの、鉄滓と鍛造剝片が得られており、鍛冶工房跡あるいは鍛冶に関連する何らかの工房跡と判断されよう。出土遺物には土師器壺、須恵器壺等があるが、完形の壺を床面上に置いたり、壁際に立て掛けるような状況にあることから、竪穴陶窯において祭祀儀礼が執り行われたと考えられる。またS I 1266周辺に立地する複数の竪穴状遺構は、その軸線方向・配置・重複から、時期差はあるものの、鍛冶に関連した工房跡であったと推測されよう。このことは地点は異なるものの、昨年度第115

次調査区におけるS I 1229・1236にも当てはまる。以上の遺構は、出土した土師器坏等から9世紀後半・末～10世紀前半に構築・廃棄されたと考えられる。また後者は、S F 1300土壘盛土下に位置する堅穴住居跡である。周壁・壁溝・カマドの一部を確認しているが、トレンチ調査であり詳細は不明である。ただ床面直上出土の須恵器坏を見れば前者より古い段階、9世紀中頃の廃棄時期を導き出すことができそうである。

2 中世

該期の資料は、丘陵地平坦面で検出した墳墓2基と同時（時期・時代）存在の問題点を残すものの、南側緩斜面部での火葬墓3基・火葬関連施設とも考えられる焼土遺構6基、さらにはこれら施設を大きく囲むように存在する土壘・空堀が挙げられよう。払田柵跡において明確な中世の遺構が検出されたのは初めてである。

（1）墳墓と関連遺構

S X 1264は、須恵器系中世陶器（壺と壷鉢）の出土とその出土状況並びに壺内容物の分析（前節参照）から中世墳墓と判断されたものである。これを受け、隅丸方形溝状造構であるS X 1265についても検出位置・形態からS X 1264同様の墳墓であった可能性を指摘した。時期的には、壷鉢内面の卸目及び底部の切り離しから、珠洲II期相当と考えられ、13世紀前半代かそれ以降となる。

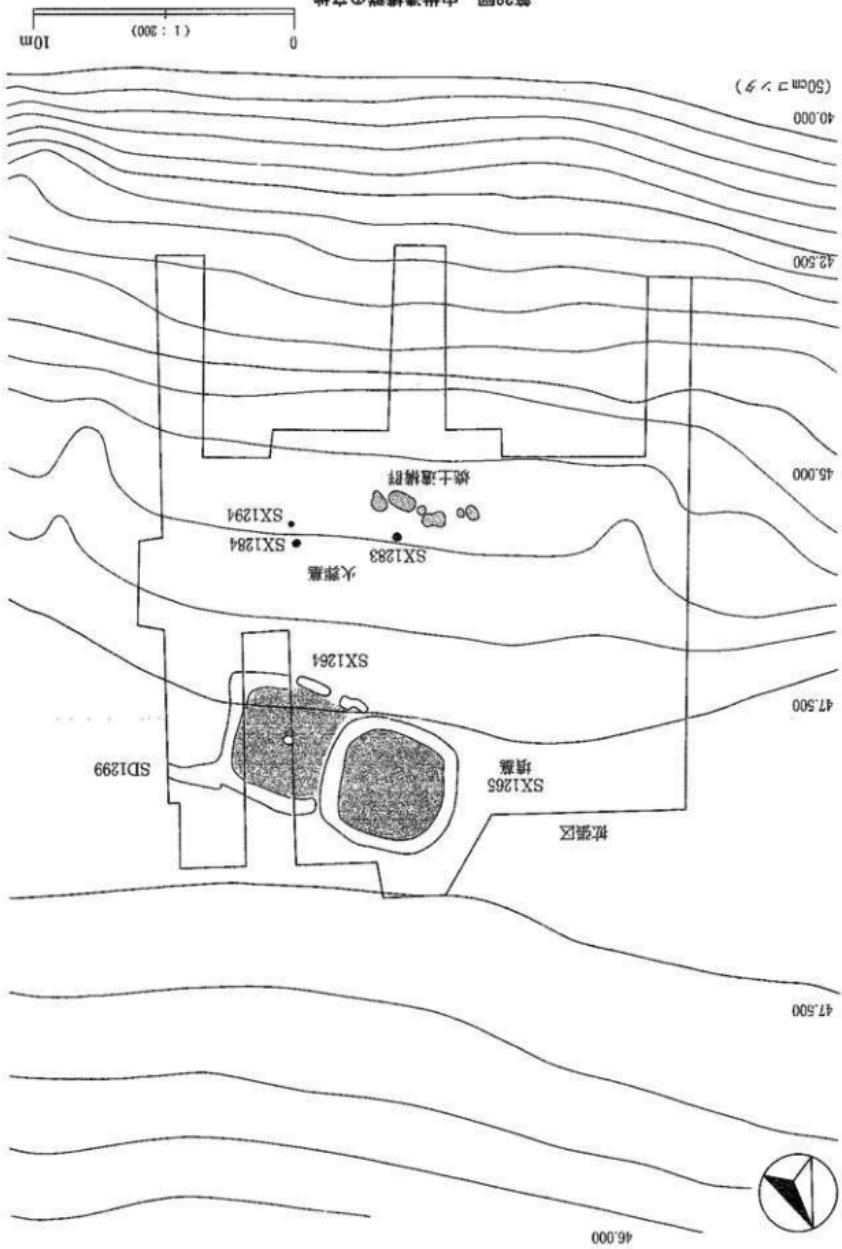
S X 1264とS X 1265は、その確認状況・配置・周溝内の円礎群のあり方等から見て同時に存在していた可能性があり、2つの墳丘が並ぶ形での景観が想定される。なおS X 1264周溝から枝分かれするように東側に1条の溝（S D 1299）が延びる。東側に第3の墳墓が存在していたのか、あるいはS X 1264の拡張・改修かもしれない。

秋田県内における中世墳墓は、知見において明確な検出例はない。経塚は40遺跡以上周知されており経筒あるいは経石等が出土・発見されている。また中世の土坑墓（土葬・火葬とも）は鹿角市妻の神III遺跡、秋田市後城遺跡A区、秋田市秋田城跡第10次・26次・35次・42次（鶴ノ木地区）、秋田市待入III遺跡、協和町寄駒館遺跡で調査例があり、これらは全て錢貨を副葬する墓である。その他、時期を特定する明確な副葬品がない（少ない）ものの中世の土坑墓とされるのは、大館市山王岱遺跡、⁽¹⁾ 鹿角町からむし岱遺跡、琴丘町盤若台遺跡、井川町洲崎遺跡、雄勝町館堀城跡などにもある。⁽²⁾

一方、墳丘を作う墓は存在するものの、明確に中世とは判断できないものに次の3例を紹介する。

本荘市上谷地遺跡（第4次調査）では、台地先端部に埋葬施設（土坑）を作う墳墓が平成9年に調査されている。報告書では検出遺構として土坑墓（S K51）の記載がなされているが、同書の文章・土層断面図等を見る限りにおいては、自然地形を削り出すことによって高さ70cm、一辺あるいは径が8m程の塹を構築し、この中央に土坑を穿っている。土坑は長軸1.41m×短軸1.34mの略円形を呈し、深さは約80cmである。坑底面付近で人骨片10数点と副葬品が出土し、墓と判断された。墓は土葬で、人骨の部位・位置から「北に背を向け膝を抱えたような姿勢で葬られたと推定」している。副葬品は漆器4個体、火打金1点、水晶粒11点、硫黄粒等があり、時期を特定できる焼物類はない。ただ漆器（椀蓋）は、内面朱漆で外面上に朱漆による施文（春蘭・銀杏葉か）がなされるものであり、この種の技法を有する漆器の出現時期は、北陸では14世紀初頭とされる。従って本墳墓の構築時期の上限は該期となるが、下限時期は不明である。人骨の分析・検査をされた秋田大学医学部の吉岡尚文氏に

第38図 中世遺構群の立地



よると、死後経過時間の人骨に紫外線を照射することにより得られる螢光の色・程度から推定すると「500~1,000年程度の経過」と記述されている。以上のことから報告書では「中世の遺構と判断される」としている。なお本墳墓は周辺に同様の遺構ではなく、単独墓であったようである。

協和町岸館遺跡は、昭和26年に調査が実施され、上谷地同様に土坑を伴う墳墓が発見されている。⁽⁹⁾ 墳墓は一辺が7m、現地表面からの高さが1.1mの方形を呈し、中央には深さ95cmの土坑（平面形状不明）が見つかった。坑内には頭蓋骨・大腿骨など一体分の人骨があり、「木棺の中に北向きに座わらせて埋葬した」とある。副葬品は鉄釘、5cm程の金属に動物の骨を結びつけたもの10数個と漆塗りの皮2枚の記述があるが、鉄釘には木質が付着しており「棺にうたれた釘」と推定している。本例も時期を推測する遺物はないようであるが、報告では「鎌倉期以後室町期頃までの十種の豪族の埋葬された古墳墓」としている。なお本墳墓の周辺には複数の塚が点在するようである。

横手市小吉山火葬墓は、昭和3年に発見され、「高さ四尺・幅南北三間東西二間の積石式のもので、中に石製骨蔵器が東西に二つならべて納められていた」としている。立ち入り調査の時点で骨蔵器は割れ骨片が散乱していた」とある。現在横手市教育委員会には、東側の石製骨蔵器のみが所蔵されている。秋田県内の古代・中世火葬墓をまとめられた庄内昭男氏によると本例は、「館跡に所在することと山形県の石製骨蔵器出土例から中世に入るものと推定」している。⁽¹⁰⁾

その他、墳丘は確認されなかったものの、環状に溝が巡る遺構に須恵器系中世陶器が出土した事例では、南外村小出I遺跡 S D14が挙げられる。⁽¹¹⁾ S D14は幅40~80cm、深さ10~20cmの溝が径5.2mの環状に巡るもので、その規模は払田査跡の2例に近似する。ここでは陶器の胎土分析の結果、同町大畠窯産の陶器甕が溝内に入れられていたことが判明した。大畠窯は珠洲II期相当時の操業であり、払田例と同じ13世紀代となる。

河辺町上祭沢遺跡でも3基の中世塚が発見され、うち1基（S X03）から須恵器系の中世陶器片が得られている。⁽¹²⁾ しかしこれらが墳墓あるいは経塚となるのかについては、不明である。前出の琴丘町盤岩台遺跡でも5基の方形溝状遺構が検出され、1基では土層観察により溝で囲まれた内部に盛土があったことが報告されている。同遺跡では方形溝状遺構の周囲に土坑墓・火葬墓やこれらを区画すると思われる溝跡、時期は不明確ながら建物跡・井戸跡なども検出され、ここ一帯が墓域あるいは寺域としての位置づけができるのかもしれない。

（2）火葬墓・焼土遺構

3基の火葬墓は精査の結果、土坑等の明確な掘り込みを伴うものではないことを確認している。遺存状態の良いS X1284は火葬骨が径30cmの円内にきれいに収まる。このことから径30cmの曲物を容器（骨蔵器）とし、この中に火葬骨を集め旧表土（第Ⅱ～Ⅲ層か）内に埋納したものと考えられる。他2例も同様で、S X1283も径25~30cm程の曲物を容器としていたようである。火葬骨は分析の結果、人骨であることが判明しているが、残念ながら性別・年齢等の情報は得られなかった。詳細は前節を参照されたい。

焼土遺構は拡張区南側、古代の竪穴堆積土最上位で検出された遺構ではあるが、遺物を伴うものではなく、時期も中世以降とすべきなのかもしれない。ただ墳墓と火葬墓の検出を受け、その配置・検出面から火葬に関係する施設の可能性を提示しておきたい。

（3）土壘・空堀

土壘・空堀は長森丘陵西端部において現況観察できる施設である。払田柵跡西側の丘陵である貞山は中世「堀田城跡」としても周知されている遺跡であり、以前から両者間においては相関が想定されていていた。堀田城跡は未調査の遺跡であり詳細は不明であるが、「秋田県の中世城館」によると、時期は不明確ながら戦国期と考えられていたようである。一方、今まで払田柵跡において散在的に出土する須恵器系中世陶器は珠洲IV期相当かそれ以降であるから、14世紀代かそれ以後となる。

今次調査で土壘・空堀の一部を裁ち割り調査を行った結果では、主に土壘においては古代遺構との重複・堆積・盛土層の層序等の観察から中世に帰属させることに大きな矛盾はないと考える。更に墳墓・火葬墓等の立地・配置を総合すると、断定はできないものの墓地の周囲に土壘・空堀を巡らせた中世墓域と見ることができよう。上堀・空堀は本文でもふれたように、北側が開口（土壘・空堀未確認）する不整U字状に配される。これらにより囲まれる大きさは、計測位置で変動があるが、東西方向は約90m、南北は西側で70~80m、東側（未調査区）でも40~50mに達するようである。この区画施設を中心に墳墓の位置を見れば、中央からやや西寄りの丘陵平坦面上にあたることになる。

以上のことから、土壘・空堀の構築時期は墳墓の時期である13世紀代となる可能性が生じたことになる。既知・上記の情報との齟齬は、堀田城跡並びに千畳町に所在する本堂城跡・元本堂城跡等における城館遺跡の精査を突破口に解消できないものであろうか。

3 縄文時代

該期の資料は、堅穴状遺構4基、土坑2基である。堅穴状遺構は、その規模が2m台（S I 1285のみ径1.55m）の小型・円形を呈し、中央に柱穴をもつ共通点がある。S I 1269・1285は1本柱、S I 1282は壁際の1本を加えた2本柱、S I 1270は長軸線上壁際の2本を加えた3本柱で構成される。S I 1282では壁寄りに地山掘り残しによる「特殊ピット」が付される。遺物はS I 1282で前期と後期前葉の土器片が出土しているが、後述の事項を検討すると堅穴は前期に構築された可能性が高いと考える。なお遺構外出土遺物には、前期を中心とした後期の土器片も含まれる。

県内ではこの種の形態・規模をもつ遺構に対し、大型の土坑として把える場合と小型の堅穴住居跡として見る場合がある。前者は形態及び台地・段丘の斜面に立地することから貯蔵穴としての機能を推定するものであり、後者は遺構配置並びに立地状況（平坦地である場合が多い）から小型住居とするが、炉（地床炉）は必ずしも明確ではない例が多い。

前者の事例として阿仁町上岱I遺跡を引用する。⁽¹⁴⁾ 同遺跡は前期と中期の集落であり、前期では段丘縁辺部に立地する「長径が2mをこえる大型の」土坑が構築され、中期では径4m台~7m程の円形堅穴住居跡と長軸が10mを超える長円形の大型住居跡が混在する。前期の土坑としたもののうち、1本柱はSK36に、2本柱はSK38・39・45となる。

後者では小坂町はりま館遺跡を紹介する。1本柱はS I 168・175B・228に、2本柱はS I 170・218にある。その他、1本柱の堅穴は森吉町桂の沢遺跡S I 159や大館市池内遺跡S I 970に、⁽¹⁵⁾ 2本柱は能代市杉沢台遺跡S I 36に、⁽¹⁶⁾ 3本柱は大館市上ノ山I遺跡S I 03等にも類例がある。⁽¹⁷⁾ これらの遺跡は全て前期に構築された堅穴住居である。

一方、2基ある土坑のうちSK1293は、長さ1.5m×幅1.2mの楕円形を呈し、底面外周に溝が巡り、壁面は垂直に立ち上がる特徴をもつ。同形態・規模の土坑は前出の上岱I遺跡SK44や、杉沢台遺跡

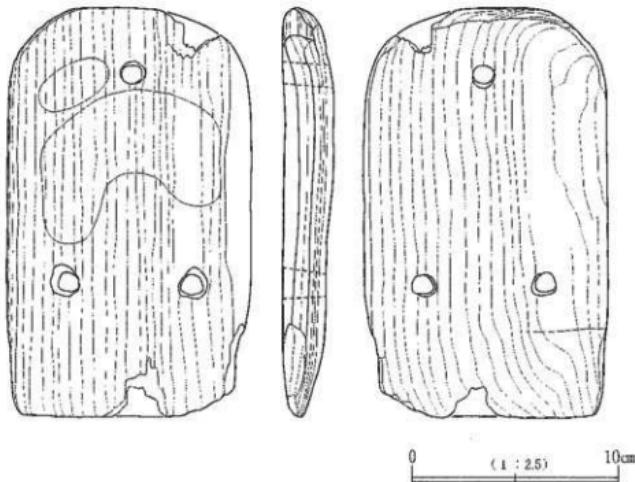
S K F 09・84等に類例がある。土坑の立地・形態から貯蔵穴としての機能を想定している。また3本柱の竪穴であるS I 1270は、杉沢台遺跡S K F 69に形態が類似する。これも貯蔵穴と見ているようである。

ここで今一度払田柵跡の縄文期遺構を見てみる。立地から遺構を分類すれば、丘陵平坦面上に構築されるS I 1269・1282・1285竪穴とS K 1275土坑、南側緩斜面上に位置するS I 1270竪穴とS K 1293土坑に2分される。上記を踏まえると、前者の竪穴3軒は炉が未確認ではあるものの住居跡に、後者は共に周溝が巡るものであり、貯蔵穴あるいは墓（S K 1293は地山土による人為堆積）の可能性を指摘できる。

なお特殊ピットは、主に米代川流域の前期～中期の竪穴住居の中に認められる施設である。前期では杉沢台遺跡・はりま館遺跡等、中期の上岱I遺跡・二ヶ井町鳥野遺跡などにあり、原則として炉軸線延長上の壁際に設置される。鳥野遺跡では中期後葉の大木9式段階まで特殊ピットは認められるものの、末葉の大木10式段階では消失する。一方、雄物川中流域では、西仙北町上野台遺跡A区に1例（S I 13、大木8b式段階）⁽²⁰⁾あるのみのようである。払田柵跡の事例は地域・時期そして竪穴の形態に至るまで相違点が多い。この資料が今後、横手盆地における後期前葉の集落・竪穴住居のあり方等を推論する材料になることを期待したい。

- 1 高橋 学「秋田県の中世期出土貨幣」『東北地方の中世出土貨幣』東北中世考古学会第5回研究集会資料集 1999（平成11年）
- 2 秋田県教育委員会「山王岱遺跡」「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V」1992（平成4年）
- 3 鷹巣町からむし岱遺跡は平成12年度に秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。
- 4 秋田県教育委員会『盤若台遺跡』2001（平成13年）
- 5 秋田県教育委員会『洲崎遺跡』2000（平成12年）
- 6 秋田県教育委員会『館原城跡』2001（平成13年）
- 7 本荘市教育委員会『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第4次調査－』1998（平成10年）
- 8 田村浩司「漆器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 1999（平成11年）
- 9 長山幹丸「岸館の古墳墓」「協和町郷土誌」協和町郷土誌編纂委員会 1968（昭和43年）
- 10 庄内昭男「秋田県における古代・中世の火葬墓」「秋田県立博物館研究報告」第9号 1984（昭和59年）
- 11 秋田県教育委員会「小出I遺跡」「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VII」1991（平成3年）
- 12 秋田県教育委員会「上祭沢遺跡」「高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」1990（平成2年）
- 13 秋田県教育委員会「堀田城」「本堂城」「元本堂城」「秋田県の中世城館」1981（昭和56年）
- 14 秋田県教育委員会『上岱I遺跡発掘調査報告書』1989（平成元年）
- 15 秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書』1990（平成2年）
- 16 秋田県教育委員会『桂の沢遺跡発掘調査報告書』1994（平成6年）
- 17 秋田県教育委員会『池内遺跡 遺構篇』1997（平成9年）
- 18 秋田県教育委員会『杉沢台遺跡』1981（昭和56年）

- 19 秋田県教育委員会『上ノ山I遺跡』『国道103号大船南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
1988（昭和63年）
- 20 二ツ井町教育委員会『鳥野遺跡第6次発掘調査報』1995（平成7年）
- 21 秋田県教育委員会『上野台遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』1989（平成元年）
- 22 私田櫛跡で検出したような円形基調で炉を持たない堅穴に特殊ピットをもつ例は、青森県上北郡六ヶ所村表館（1）遺跡の第112号住居跡にある。同住居には炉・柱穴ではなく、東側の周壁に接するように低い周堤（私田例と同じコ字状）を伴う特殊ピットが設置されている。住居の年代は掘り込み面と出土遺物から早期末（早稻田5類期）と記されている。
- 青森県教育委員会『表館（1）遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1989（平成元年）



第39図 外郭西門西方水田出土の下駄

第39図は本次調査区出土ではないが、外郭西門西方（長森・真山の間）の水田面から出土した下駄である。1989年、水田暗渠工事の際に得られたものであり、今回の中世期出土遺物の関連性から図示・掲載することにしたものである。

本下駄は一本（杉材）で作られた連歛下駄であるが、歛部が完全に摩耗し、台部一枚板の様相を呈する。長さ20cm、最大幅11.8cm、現存する厚さ（台部厚）は2.5cmである。前鼻緒孔が中央に位置することから中世あるいはそれ以前に作られたと考えられる。



長森丘陵全景

第117次調査前 西側上空より（平成13年5月10日撮影）



拡張区調査後全景（東→）

写真奥には整備された外郭西門（門柱と板塀）が見える



拡張区南側緩斜面の堅穴状遺構群（南西→）

段状をなすところが、堅穴北側の壁面 中央がSI1266、手前はSI1289

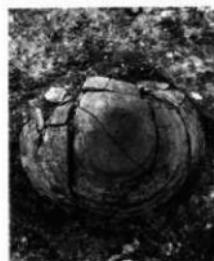


SI1274堅穴住居跡
(南→)
埋土上位に土壙盛土
が厚く積まれる



SI1266堅穴状遺構
(南→)
中央に地床炉
手前はSI1289

下はSI1266土師器環
出土状況
左:③ 中:④⑤
右:①②
(数字は挿図に対応)







SD1268・1277溝跡
(南東→)



SX1264墳墓
SX1265闕丸方形
溝状遺構 (北→)
矢印の箇所から陶器
(壺+罐体)出土

SX1264出土陶器出土
状況
左: 西から
右: 真上から
陶器の下・蓋に砂が見
える



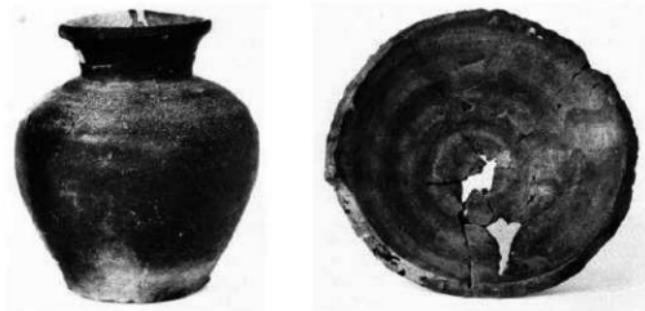


SX1265圓丸方形
溝状遺構全景（北→）
写真中央奥に円墳群
左奥はSX1264墳墓
陶器出土箇所



溝内で検出の円墳群下位面、東→
上位面でも同位置で礫
が出土していた

SX1264出土陶器
左：壺
右：擂鉢（内面）



図版7 第117次



SX1283火葬墓
(北→)
奥に写っているのは木根、撫乩を受けている

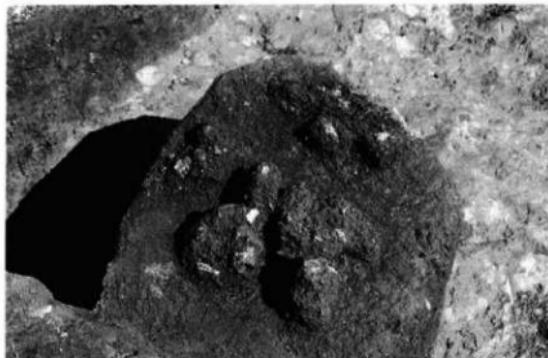


SX1284火葬墓
(北→)
径30cmの円内にまとまる



同上 部分 (南→)

SX1294火葬墓
(西→)
骨片が僅かに点在する
のみ



中世の焼土造構群
(南→)
左からSN1307・SN
1287
古代の堅穴埋土最上位
に構築



G トレンチ北側全景
(北→)
トレンチ内で表土が産
んで見えるのは、
SK1296（手前）
SK1297（奥）
地山基盤層の礫が多く
露出している





土壌・空堀現況
(南→)

右側の高まりが

SF1300土壌

左側がSF1301土壌

中央の窪みが

SD877空堀



SF1300・1301土壌
SD877空堀
土堀断面 (東→)
Cトレンチ内

手前にSI1274



SD877空堀
土堀断面 (東→)
Bトレンチ内
奥に外郭西門



SD877空堀
Dトレンチ内
遺構確認状況
(南東→)

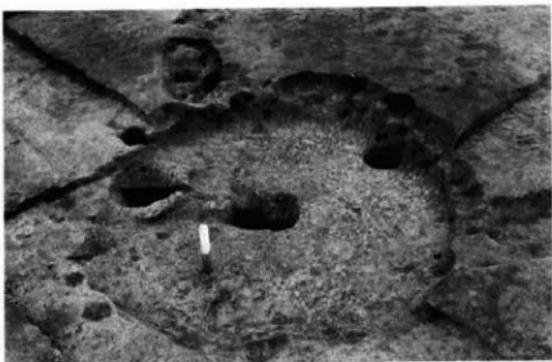


同上 完堀
(南東→)
人頭大の骨が堀内に落
ち込んでいる



SD877空堀
Gトレンチ
遺構確認状況
(西→)

図版11 第117次



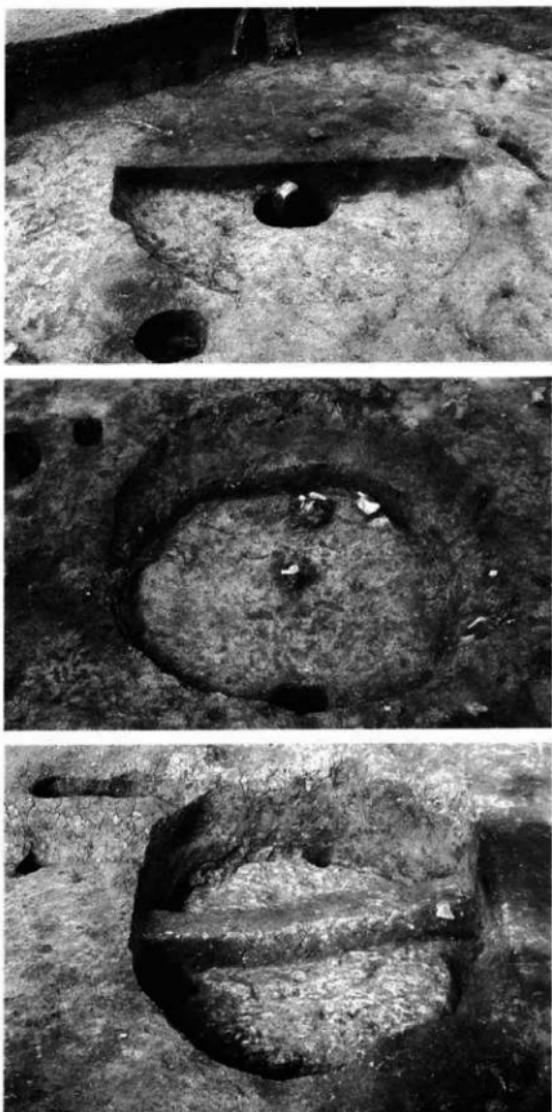
SI1282 壁穴状遺構
(北→)



同上 特殊ピット検出
状況 (北西→)
地山の掘り残して周堤
を構築している



SI1269 壁穴状遺構
(西→)
床面直上に人頭大位の
礎 5 個置く
中央の礎の下に柱穴が
位置。写真撮影時は未
確認



第4章 第118次調査の概要

第1節 調査経過

第118次調査は、先行する第117次調査と並行する形で進めており、5月29日から11月22日までを調査期間としている。以下では調査日誌よりその経過を抜粋する。

5月29日、昨年度第115次調査区の北側を対象に粗掘りを開始する。調査区の北東部から掘り始める。6月1日、遺物は縄文時代の半円状扁平打製石器数点、石斧1点などが出土する。今年も土師器・須恵器よりも縄文が多いのだろうか。2日、115次調査区南側で確認していた硬質泥岩分布域の疊を再び掘り出す。これは来跡見学者に見ていただくことと、秋に予定している現地説明会に対応するためでもある。7月17日、粗掘り再開。19日、予定箇所の粗掘りを終了し、ジョレンによる第II層以下の遺構・遺物確認調査に入る。北側では第II層が比較的厚く堆積している。

9月25日、第II層以下での掘り下げ再開。調査区の西部で建物の掘形らしきプランが見えてきた。昨年度一部確認していたS B1222の北側部分か。周辺での遺物は土師器・須恵器も出土しているが、縄文土器・石器も多い。26日、やはり掘形プランはS B1222のものと確認される。また東西方向の溝(板塀跡か)も検出する。

10月11日、遺構精査に入る。16日、S B1222は2×3間の規模であり、掘形は2時期あることが確認される。17日、S B1222の全体写真撮影を行う。撮影後、直ちに平面図作成に入る。25日、本日の顧問会議現地見学に合わせ、調査区全体の清掃を行う。東西方向の板塀跡は、溝底面に板状の柱を立てていることを再確認する。28日の現地説明会に備え、建物に白い紐を張り、その位置と規模を目視できるようにし、板塀跡の柱痕(掘形)には長さ1mのピンポールを立てた。30日、仙北町主催の払田柵跡保存管理計画策定指導委員会の一行が現地を見学する。31日、平面図はほぼ終了し、レベル計測を始める。

11月に入り、土坑の断面図、平面図の補足・レベル計測を断続的に行い、13日からは埋め戻しを実施する。機材の撤収等を経て22日現地での野外調査を終了した。

第2節 検出遺構と遺物

1 調査区の立地と基本層序

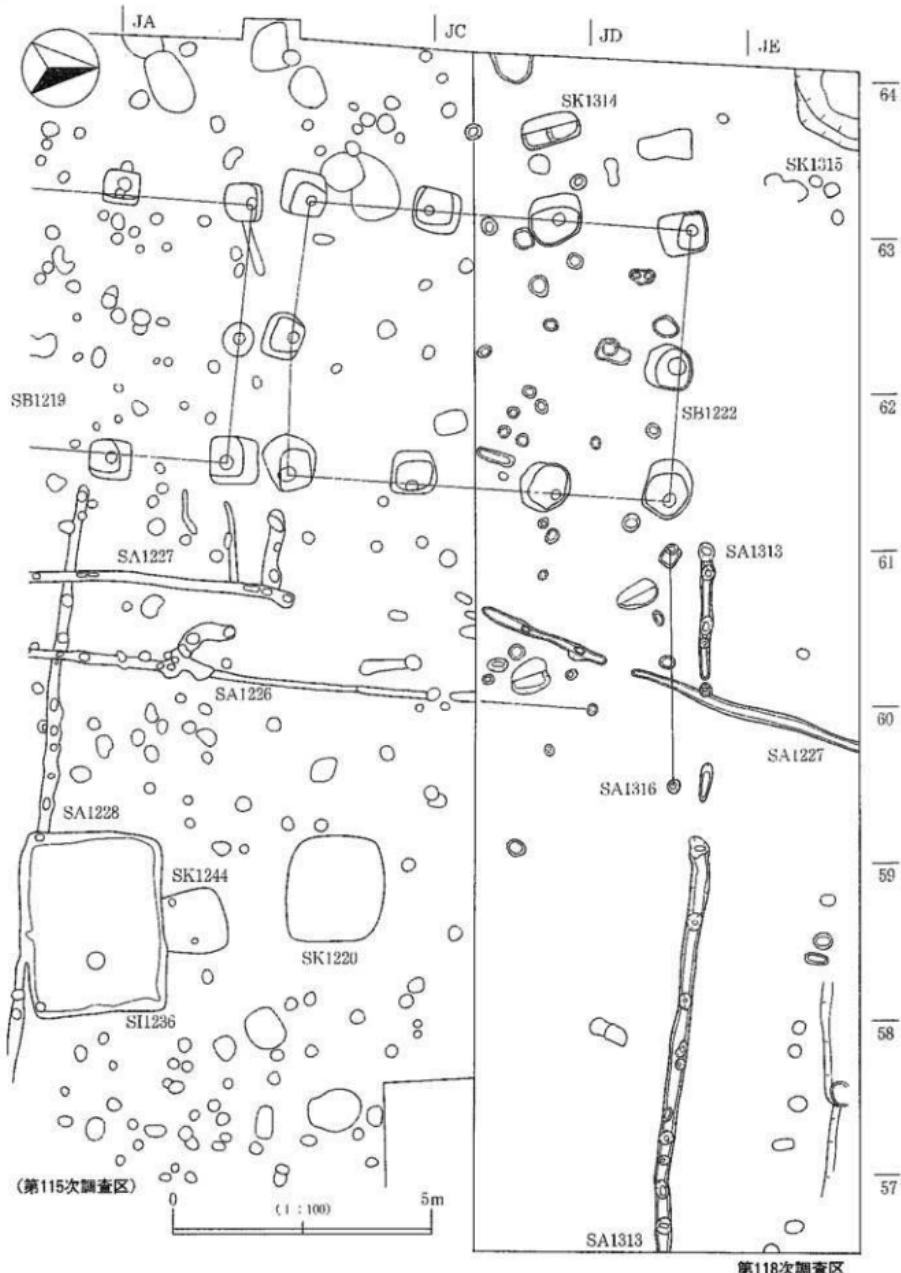
第118次調査区は政府の西約150mに位置し、長森丘陵地西部では最も高位となる平坦地から北側にやや下降する位置にあたる。昨年度調査した第115次調査区の北側に隣接し、標高は50mである。現況は杉林・雜木林である。

調査区の基本層序は、調査区北西隅、SK1315の南側で観察した。土層は第42回参照。

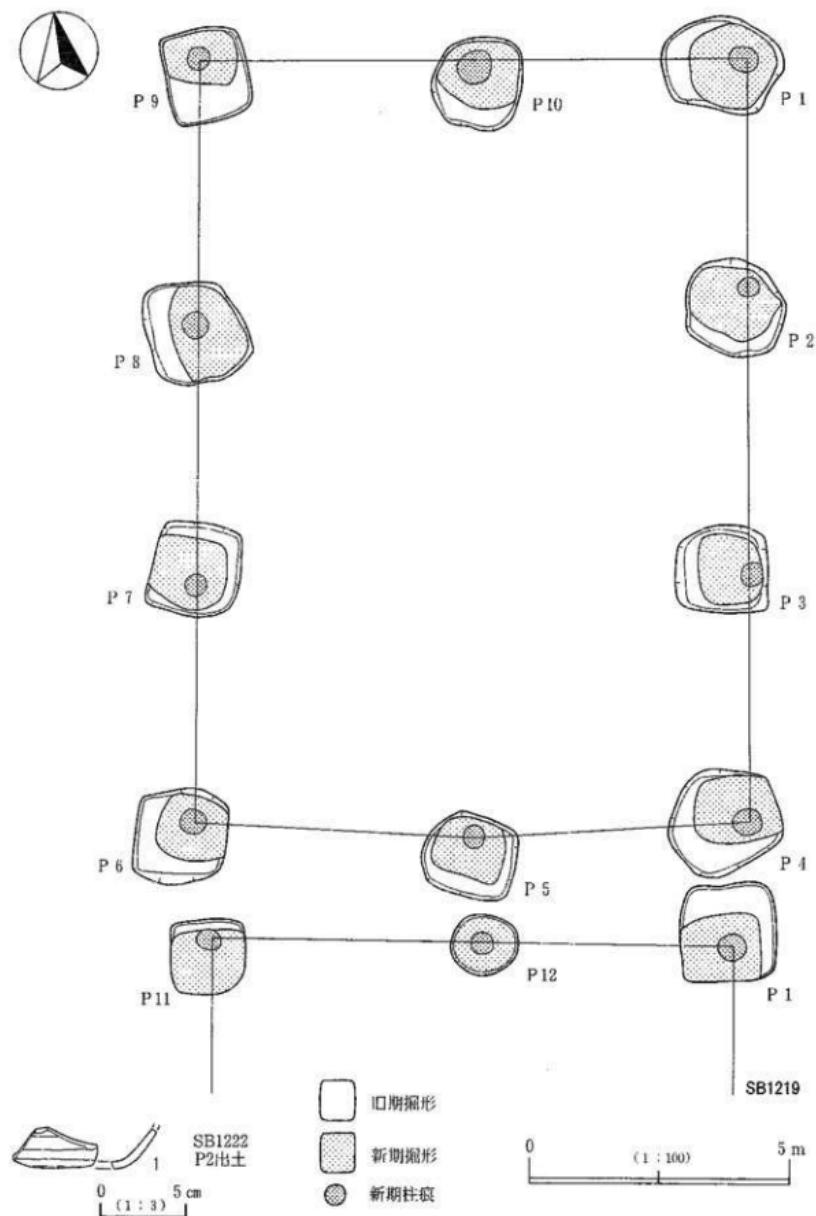
第I層：暗褐色土(7.5YR3/4)表土、層厚10cm前後。

第IIa層：暗褐色土(7.5YR3/4)層厚20cm前後、a～c層とも層境不明瞭。

第IIb層：暗褐色土(7.5YR3/3)層厚15cm前後。



第40図 第118次調査区遺構配置図



第41図 第SB1222掘立柱建物跡

第II c層：褐色土（7.5YR4/3）層厚10cm前後

第III a層：黒褐色土（10YR2/3）第III b層中にブロック状に入る。

第III b層：暗褐色土（10YR3/3）層厚20~25cm、調査区南側では同層未確認、II層の下がIV層。

第IV層：暗褐色土（10YR3/4）地山漸移層、層厚10cm前後。

第V層：褐色土（10YR4/4~4/6）地山、第115次調査区南側のような基盤疊層の露出はない。

2 検出遺構と遺物

本次調査で検出・精査した遺構は、掘立柱建物跡1棟、板塀跡2列・柱列1列、土坑2基などである。その他竪穴状の遺構（調査区北東側）や柱穴を確認しているが未精査であり、本項ではふれない。

これら遺構の構築時期は、その確認面・出土遺物の検討から土坑1基（SK1315）が縄文時代であり、他は古代と判断される。遺構外出土の遺物も、古代及び縄文時代に分けられ、第117次で確認したような中世の遺物はない。以下では、検出遺構とその出土遺物の概要を報告する。なお今次調査で新規に付した遺構番号は、1313~1316までであり、1222・1227は第115次で登録していた番号である。

（1）古代

① S B1222掘立柱建物跡（第41図、図版13・14）

調査区西部で検出した桁行3間×梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。昨年度第115次調査において、建物の南側を確認しており、本次調査においてその全容が明らかとなった。

柱掘形は平面観察により新旧2時期の重複が明瞭に認められた。旧期では一辺が90~110cmの比較的整った隅丸（長）方形を示す。その埋土は地山粘土を主とし、黒褐色シルト質土を混入させる。新时期は旧期掘形内の東あるいは北側にややすれるが、旧期を拡張して構築するものではなく、一辺の長さが65~80cmに縮小し、その形状も方形を基調とはするものの不整形に近くなる。その埋土は暗褐色シルト質土が主となり、地山粘土小ブロックや炭化物（細片）が混じる。

新期柱掘形には径20~25cm柱痕跡が認められる。これによると新期の柱間総長は、桁行で7.4m、梁行で5.3mとなる。東側桁行柱間は、北から2.2m+2.8m+2.4m、西側は、北から2.6m+2.5m+2.3mである。梁行は、南北とも東から2.6m+2.7mの数値を示す。

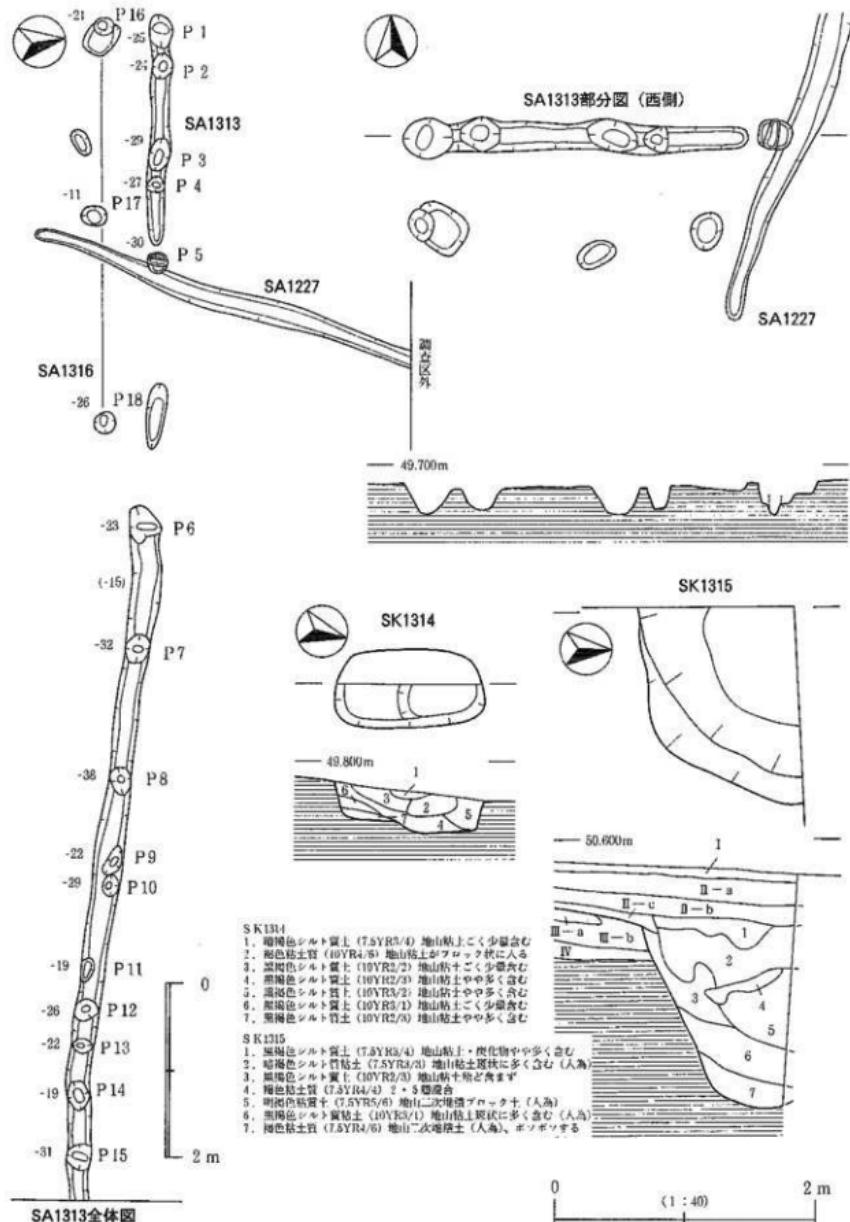
遺物はP2掘形確認面より須恵器壺（第41図左下）と土師器壺の破片が各1点出土している。

② 板塀跡・柱列

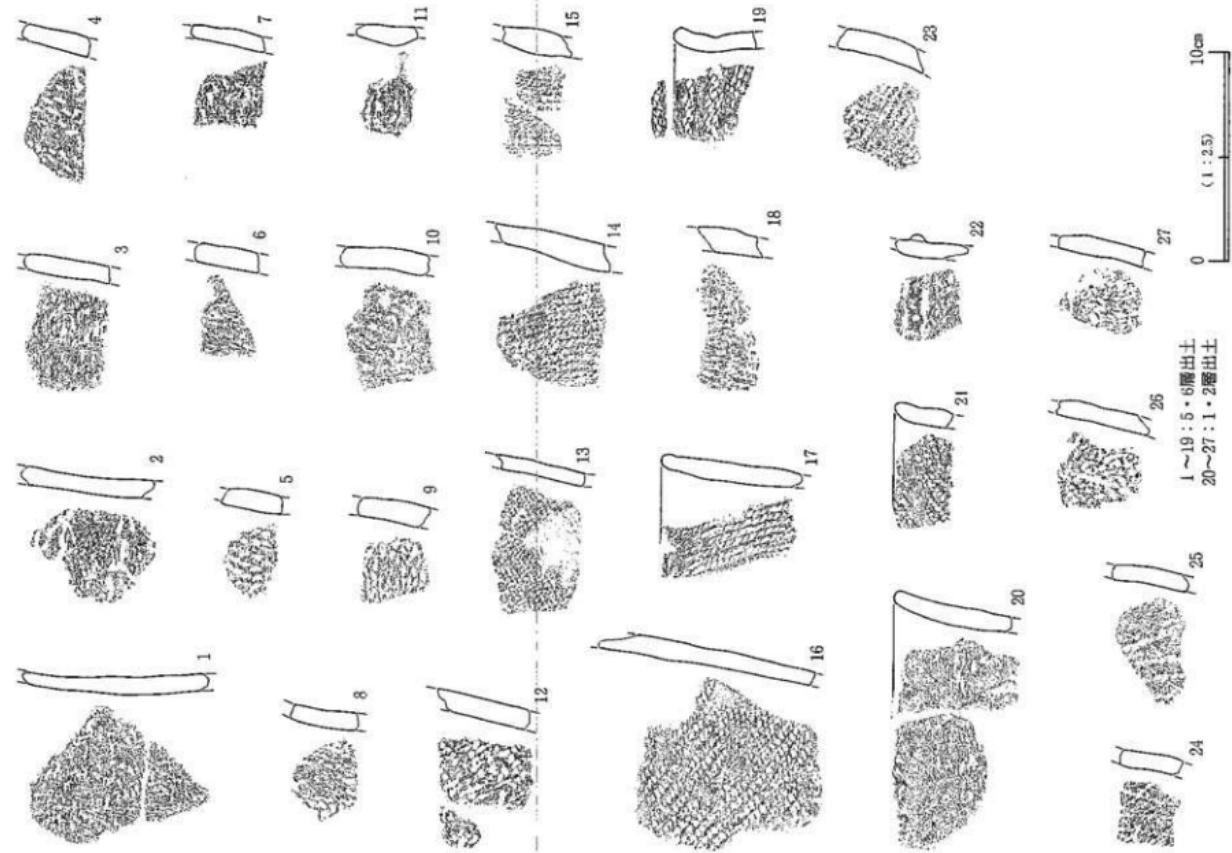
検出した板塀跡は2列であるが、1列は昨年度に確認しているS A1227の北側延長部と見ることができる。これらは溝状の遺構として確認しているが、溝底面に円形・長方形状（板状）の掘り込みが不規則ながら認められることから板塀跡と判断したものである。各遺構とも遺物の出土はない。

S A1227板塀跡（第42図、図版13）

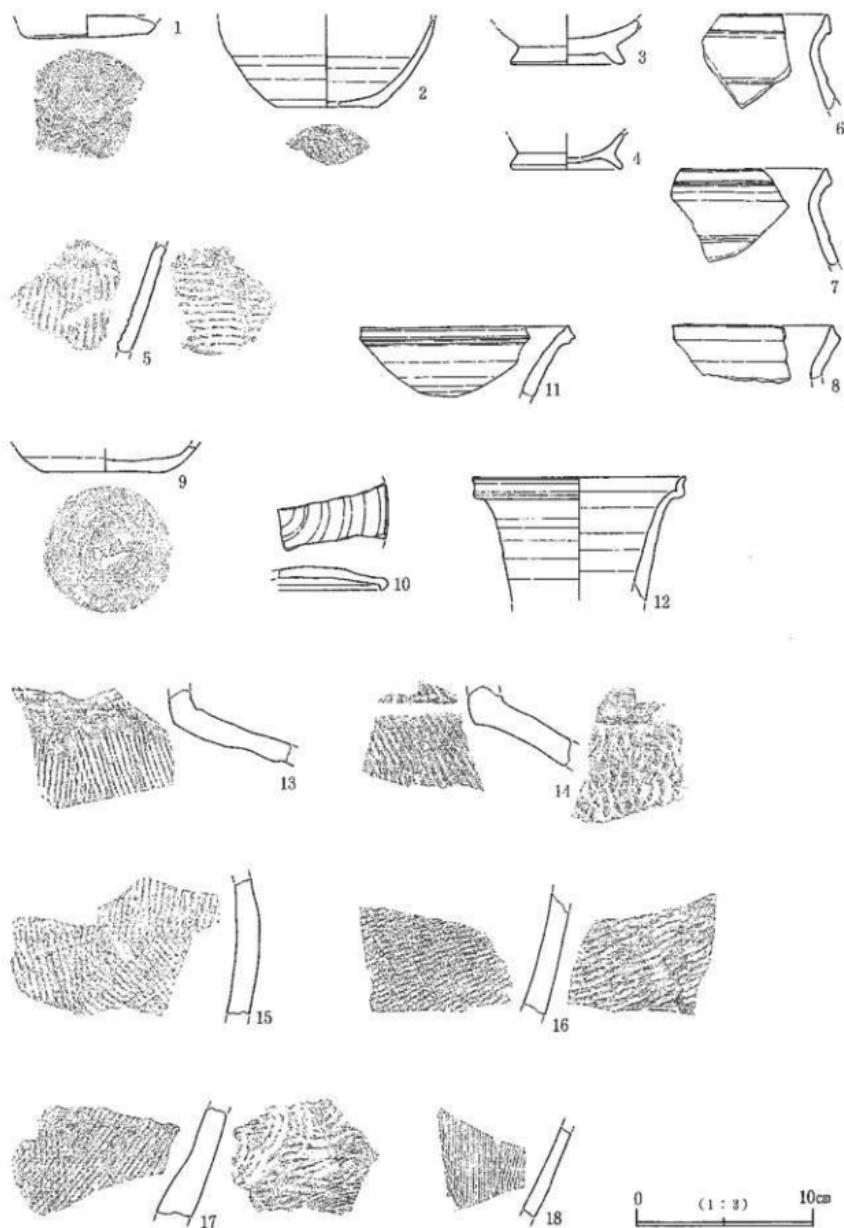
調査区中央を南北方向に延びる板塀跡である。遺構の北端は調査区外に及ぶ。S B1219（昨年度調査の南北棟建物）・S B1222掘立柱建物の東側桁から東に2.5m前後の距離を保って南北に延びる。ただ本年度調査した箇所では北東側にその向きを変える。確認した長さは昨年度分を含めると36m程度となるが、第115次調査区北端部の3m間が途切れることになる。溝の幅は概ね20cm前後、深さは10~25cmである。本次調査で検出した長さ4.6m分については、溝底面に明確な柱穴等の掘り込みは見られない。次の述べるS A1313と交差重複するが、その新旧は不明である。



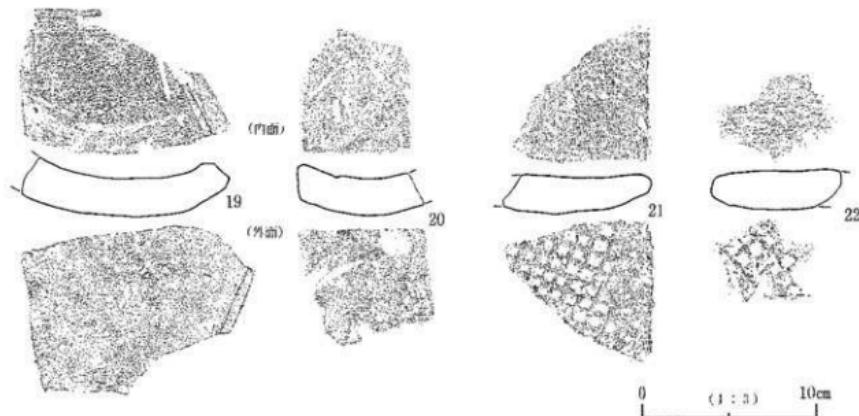
第42図 第118次調査区検出遺構



第43図 SK1315土坑出土遺物



第44図 遺構外出土遺物（1）土師器・須恵器



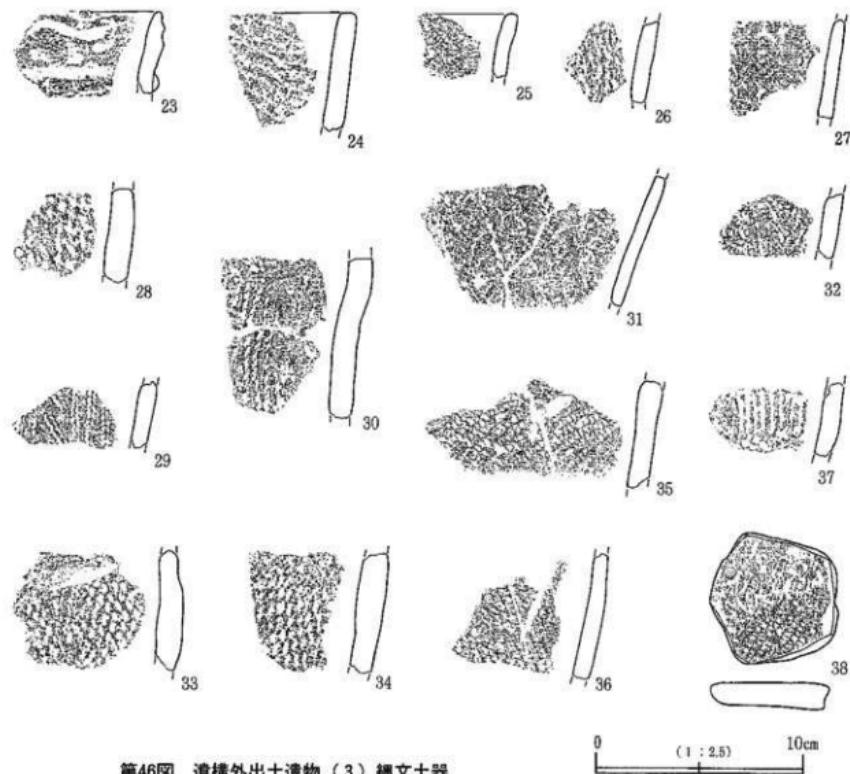
番号	種類	器形	出土位置・層位	特　徴	寸法 cm	底径 cm	器高 cm	底面 指印	高径 比	外輪 径
1	土師器	环	表様	表ロクロ字、内面丸底処理、削面ナメ			7.2	(1.3)		
2	土師器	环	JES5・B層	内外：ロクロ調整、底：削毛切り			5.6	(5.0)		
3	土師器	合付片	JES5・卯・日焼	内外：ロクロ調整、底：削毛切り			6.5	(2.5)		
4	土師器	合付片	表様	内外：ロクロ調整、底：削毛切り			6.2	(2.1)		
5	土師器	環	表様	外：平行タキ、内：平行曲て見						
6	土師器	環	表様	内外：ロクロ調整						
7	土師器	袋	JES5・B層	内外：ロクロ調整						
8	土師器	裏	表様	内外：ロクロ調整						
9	須恵器	环	JES5・B層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘタ切り			7.3	(1.4)		
10	須恵器	袋	表様	内外：ロクロ調整						
11	須恵器	卯・口沿	表様	内外：ロクロ調整						
12	須恵器	長頸壺	表様	内外：ロクロ調整			12.2		(7.2)	
13	須恵器	甌	JES5・1層	外：平行タキ、内：ナメ						
14	須恵器	甌	JES5・1層	外：平行タキ、内：齊面波打凸						
15	須恵器	甌	JES5・卯・日焼	外：平行タキ、内：ナメ						
16	須恵器	甌	表様	外：平行タキ、内：平行型て見						
17	須恵器	甌	JES5・卯・日焼	外：平行タキ、内：齊面波打凸						
18	陶器	瓶	JES5・卯・日焼	ロクロ調整、内面凹口						
19	瓦	平瓦	JES5・1層	凸面：ナメ、凹面：布目						
20	瓦	平瓦	表様	凸面：ナメ、凹面：布目						
21	瓦	平瓦	JES5・1層	凸面：格子叩き、凹面：布目						
22	瓦	平瓦	JES5・B層	凸面：格子叩き、凹面：布目						

第45図 遺構外出土遺物（2）平瓦

S A 1313板塀跡（第42図、図版13）

調査区中央から東側にかけて東西方向に延びる板塀跡である。遺構の東端は調査区外に及ぶ。西端は S B 1222北東隅柱掘形の北東 1m にあり、これより西には延びない。確認した長さは 13.7m であり、溝の幅は 20~30cm、深さは 8~15cm となる。溝底面から柱穴が 15 本（P 1~15）掘り込まれ、その深度は 19~38cm としっかりしたものである。柱穴のうち P 5・6 は、長さ 22cm × 幅 6~8cm の長方形状の掘り込みである。これは板状に加工した材を柱として埋設していた痕跡と考えられる。板材長軸は、溝軸線（東~西）に対し直交する。この P 5・6 間（3 m）は溝が途切れる箇所でもあり、出入口等の施設が伴っていた可能性もある。

本板塀跡は確認位置・方向性から、S B 1222掘立柱建物跡との関連が想起される。



第46図 遺構外出土遺物（3）縄文土器

S A1316柱列（第42図）

S A1313板塀跡の南約70cmには、これと同一軸線をもつ柱列（柱穴3本、P16～18）を確認した。西端P16は、S A1313の西端P1と南北に並ぶ位置となる。各柱穴は、径25～30cmの円形で、深さはP16で21cm、P17で11cm、P18で26cmとなる。柱間距離はP16～17間2.2m、P17～18間2.35mである。本柱列は北側のS A1313板塀跡あるいは西側のS B1222掘立柱建物跡との相関が考えられる。

③土坑

S K1314土坑（第42図）

調査区北西部、J C63の第Ⅲb層下面で検出した。S B1222 P8の西約1mに位置する。規模は長さ115cm×幅60cmであり、南北に長い橢円形を呈する。確認面からの深さは北側で30cm、南側で24cmである。堆積土は7層に分けられるが、2層は地山粘土を人為的に入れたものようである。他3～7層は南側（緩斜面上位側）からの自然流入土と観察された。出土遺物はない。

（2）縄文時代

S K1315土坑（第42・43図、図版14）

調査区北西隅で検出した。大型の土坑と考えられるが、その一部のみの精査であり、規模・形状は

不明である。現況での長軸は1.5mである。深さは断面観察により第II c 層上面から掘り込まれていることを確認し、最深で1.45mとなる。堆積土は7層に分けられるが、下位3層（5～7層）は地山粘土を人為的に埋め戻している。

遺物は1～6層にややまとめて出土している。堆積土最上位には須恵器壺・蓋破片が2点混在するが、その他は縄文土器片・石器類である。1～19が下位5・6層、20～27が上位1・2層出土である。縄文原体・胎土（一部に繊維を含む個体あり）などから多くは前期に属すると考えられる。

3 遺構外出土遺物（第44～46図）

遺構外の出土遺物は、古代の土師器・須恵器・瓦、縄文時代の土器・石器類、近世の陶器（擂鉢、18）がある。調査区は北側に向かってやや傾斜する位置にあり、遺物も北側により多く出土する傾向にある。これらは第II～III層から散在的に出土している。

（1）古代（1～17、19～22）

出土した器種は、土師器壺・台付壺・甕、須恵器壺・蓋・甕・長頸壺がある。1～4は土師器壺で、1は非クロコ成形と思われる内面黒色処理された壺である。底面には擦痕状のナデが見られる。2は小型の甕の可能性もある。5～8は土師器甕である。6・7は同一個体と考えられる。9は須恵器壺であり、底面に回転ヘラ切り痕を残す。10は須恵器蓋であり、内面に摩耗痕跡が見られることから転用觀として使用されていた可能性がある。11は須恵器広口壺、12は長頸甕となる個体であろう。13～17は須恵器大甕破片である。19～22は平瓦である。凹面は基本的に布目が認められるが、20は糸切り痕が残る。凸面は19・20がナデ、21・22が格子叩きである。

（2）縄文時代（23～38）

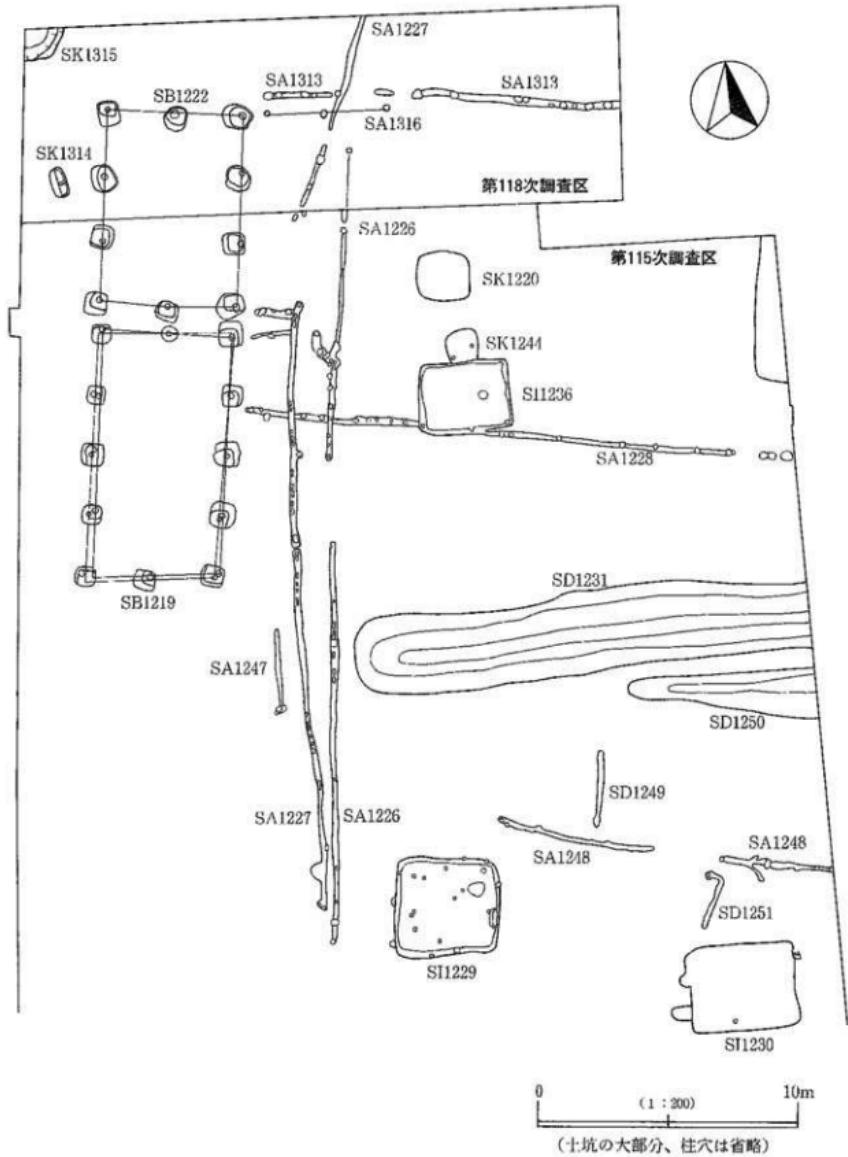
遺構外の縄文土器は、前述のSK1315出土土器と近似した様相を示すことから、前期に帰属するものと考えられる。28・30の胎土には明瞭に繊維が混入している。23と29は胎土・色調等から同一個体の可能性がある。38は土器片を五角形状に整形させた円盤状土製品である。

第3節 小結

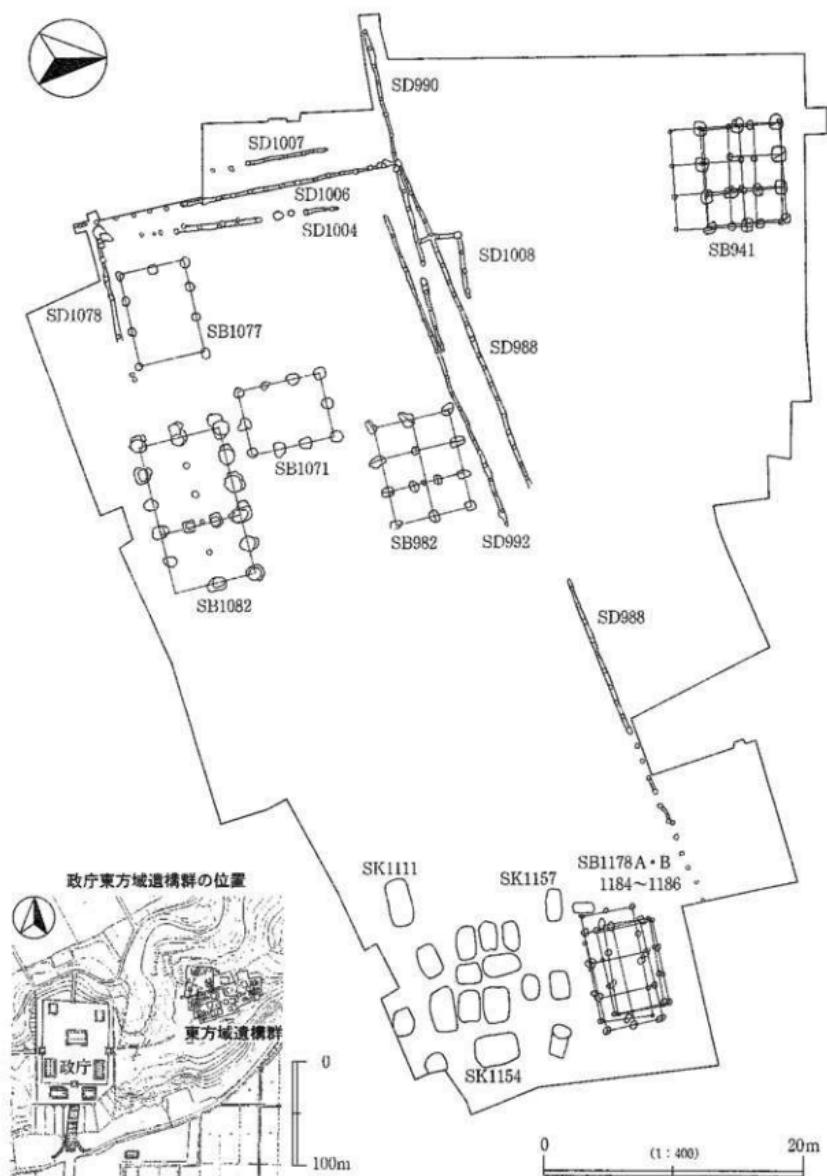
本次調査は、政府西方における推定官衙域の探査を目的に実施したものである。当該地区に着手したのは、昨年度の第115次調査が最初であり、今年度が2年目となる。ここでは2ヶ年の概要を政府東方域遺構群との比較を加えまとめてみる。

まず特筆すべき点は、政府西方の平坦域にも古代の遺構群が面的な広がりをもって確認されたことである。検出遺構は、掘立柱建物跡2棟（各2時期）とこれに並行あるいは直交する複数の板塀・柱列跡、鍛冶関係とも目される工房跡（堅穴状遺構）、幅広で浅い溝跡、大小の土坑等が比較的整然と配される。これらの時期は出土遺物・火山灰（十和田a）の介在状況等から9世紀後葉・末～10世紀前葉となる。しかし現在までのところ9世紀後葉以前の資料は未確認である。

遺構の配置は、南北棟のSB1219・1222建物の東側にSA1226・1227板塀が南北方向に延び、両者の相關が推測される。2条の板塀は共に長さ3mにわたり途切れる箇所が存在し、ここに出入入口（門）状の施設が想起できる。その位置はSA1226ではSB1219東面に、SA1227はSB1222東面にあたり、



第47図 第115・118次調査区における建物と板塀の配置



第48図 政府東方城E期の遺構配置略図

それぞれの関係と時期差も生じることになる。また本次調査で新規に検出された東西方向の S A 1313 板塀があり、これも S B 1222 建物との係りを指摘した。このように、当該地区では建物と南北・東西の板塀が西暦900年を前後する時期において、建て替えを作しながら存続したと言えよう。

一方、政庁を挟んで東方に位置する平坦域は、平成3年度から7年度にかけて4度（第90・95・100・105次調査区）にわたる調査が行われており、その総面積は3,300m²である。当該地区においても西方城同様の掘立柱建物跡・板塀跡・柱列・堅穴住居跡・土坑等の遺構が検出されている。ところが、両者における決定的な差は、遺構構築・廃棄時期においてである。東方城における上限は、創建にあたっての盛土整地地業や建物の造営工事に携わったであろう工人等の堅穴住居跡が構築される8世紀最終末～9世紀初頭（A期直前）から、下限は政庁V期・外郭線D期相当の掘立柱建物と板塀が作られる10世紀中葉～後葉（F期）までの7時期区分がなされている。まさに払田柵の創建から終末期までの遺構が重複を繰り返しながら東方城平坦地には形成されていたのである。

西方城の遺構群を東方城の時期区分の中に位置づけると、D期・E期にあたる。D期は9世紀後葉であり、主に堅穴住居で構成される。「小勝」の墨書き土器が出土したものも本期堅穴内である。堅穴はカマドをもたず地床炉・焼上をもつものや漆紙文書の出土などから「漆塗作業や何らかの工房的な使い方」を推測している。E期は10世紀前葉～中葉であり、南北・東西に延びる板塀と、これに画された内部に整然と建物が並ぶ。このように見ると、西方城の遺構群は東方城E期の遺構配置のあり方に近似する。建物配置・規模・検出数等に差異はあるものの、E期にのみ、類似する施設を西方城平坦面にも構築していたことは間違いないようである。

註 秋田県教育委員会「第105次調査」『払田柵跡－第103～106次調査概要－』1996（平成8年）



第118次調査区全景（西→）

手前はSB1222掘立柱建物跡

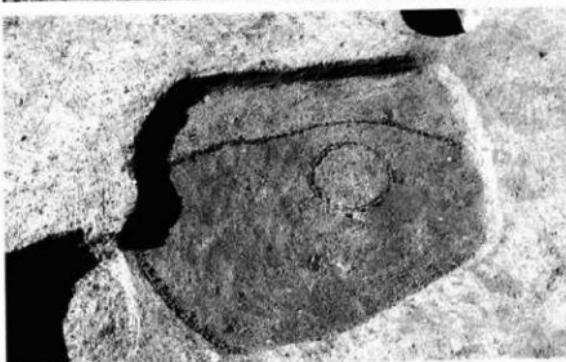


調査区東側と板塀跡（北西→）

北側（写真左手前）に向かっていくらか傾斜する、林の奥が政府城



SB1222
掘立柱建物跡
P 9 挖形 (西→)



同上
P 8 挖形 (東→)



SK1315土坑
(東→)

第5章 調査成果の普及と関連活動

1 現地説明会の開催

『払田柵跡（第117・118次調査）現地説明会』

平成12年10月28日（土）13:30～15:00 好天に恵まれ、117名の参加を得た。

2 諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政序跡・外柵南門・大路周辺地域などにおいて、下記諸団体などの遺跡観察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明を行った。

仙北町史跡の里交流プラザ「柵の湯」従業員（4月13日）、平鹿町教育委員会（5月11日）、横手市教育委員会社会教育課（5月24日）、秋田大学教育文化学部教官・学生（6月1日）、福島県大玉村教育委員会（6月2日）、秋田聖霊短期大学研究生一行（6月8日）、岩手県水沢市胆沢城跡保存会（6月29日）、仙北南小学校（7月4日）、大曲市短歌サークル（7月11日）、宮城県利府町教育委員会（7月11日）、大曲市文化財保護協会（7月14日）、県生涯学習課文化財保護室（7月14日）、六郷高校1年生（7月19日）、仙南村金沢小学校（7月21日）、岩手県北上市教育委員会（7月27日）、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（8月2日）、横手市金沢中学校（8月7日）、社会貢献活動研修（教職員10年経過研修、8月8・9日）、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター整理作業員一行（9月26日）、男鹿市民憲章推進協議会（9月28日）、秋田大学教育文化学部日本史研究室（10月2日）、仙北町立北小学校5・6年生（10月18日）、仙北町立南小学校6年生（10月18日）払田柵跡保存管理計画策定指導委員会一行（10月30日）、井川町公民館（10月31日）

なお10月18日には、「まちづくりグループ姫夷はたる」が主催する『よみがえる平安の柵・払田の外柵が現代に出現しますー』において、外柵に沿って200本の旗を立てるイベントに協力し、仙北町立北小学校・南小学校児童等に払田柵跡の概要を説明した。

3 締間会議の開催

第51回 平成12年10月25日（水）

第52回 平成13年2月8日（木）

4 史跡払田柵跡保存管理計画策定指導委員会（仙北町主催）への出席

第1回 平成12年10月30日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画策定趣旨説明・現状報告・現地状況観察

第2回 平成12年12月11日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画の概要検討 ①歴史・考古 ②環境整備

第3回 平成13年3月15日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画の概要検討 ①農業環境 ②土木環境 ③遺跡の活用

5 扟田柵跡環境整備審議会（仙北町主催）への出席

平成13年2月23日（於：仙北町役場）

6 第29回大規模遺跡調査連絡協議会への出席

平成12年9月13日～14日（於：島根県大田市町並み交流センター）

7 報告・講演

高橋 学『払田柵跡および近郊の史跡について』六郷高等学校ふれあい体験学習

平成12年7月1日 場所：県立六郷高等学校

高橋 学『菅江真澄と発掘調査』菅江真澄研究会総会

平成12年7月23日 場所：秋田市古四王神社社務所

高橋 学『払田柵跡－平成12年度調査の概要－』『第27回古代城柵官街遺跡検討会資料』

平成13年2月24・25日 場所：東北歴史博物館（資料報告）

高橋 学「払田柵跡（第117・118次調査）」『平成12年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

平成13年3月3・4日 場所：鷹巣町たかのす風土館

8 資料の貸し出し

秋田県立博物館 考古部門展『'00'秋田発掘調査速報展』 平成12年3月8日～4月19日

貸し出し資料：平成11年度出土資料（土師器・須恵器・繩文土器など）

秋田県立博物館 考古部門展『木の道具と器』 平成12年4月25日～平成13年3月4日

貸し出し資料：曲物、漆器椀、平成11年度出土資料（木製品など）

岩手県立博物館 開館20周年記念特別企画展『北の馬文化』 平成12年10月5日～11月26日

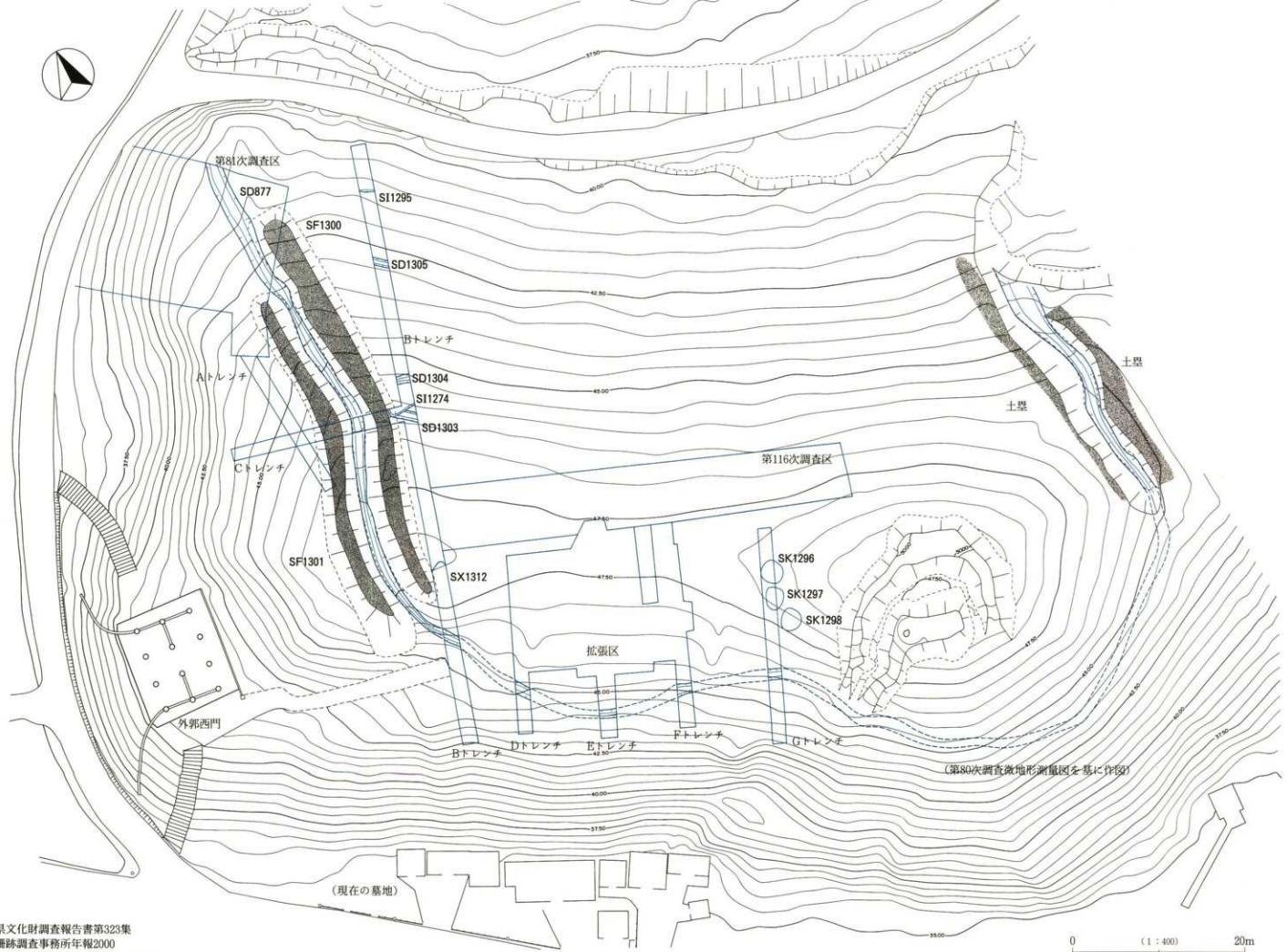
貸し出し資料：駒馬（第112次調査出土）



現地説明会での一コマ
(第117次調査区にて)

報告書抄録

ふりがな	払田柵跡 だい じょうさいろ								
書名	払田柵跡 第117・118次調査概要								
副書名	払田柵跡調査事務所年報2000								
卷次									
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書								
シリーズ番号	第323集								
編著者名	高橋 学								
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所								
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地								
発行年月日	2001年3月								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
払田柵跡	秋田県仙北郡 仙北町払田 千畳町本堂城回	53429	39度	140度	第117次	560	学術調査		
		53432	27分	33分	20000419 ~ 20001110		学術調査		
調査地点は 仙北町払田字 長森					第118次 20000529 ~ 20001122	180			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
払田柵跡 第117次	城 柵	平安時代	竪穴住居跡、竪穴状 遺構（鍛冶工房か）、 土坑、溝跡	須恵器、土師器 瓦					
			墳墓（隅丸方形周溝） 火葬墓・焼土遺構	須恵器系陶器壺・ 櫛鉢	中世の遺構が検出さ れたのは初見				
	集落跡	縄文時代	土壙・空堀 竪穴状遺構、土坑	縄文土器・石器					
払田柵跡 第118次	城 柵	平安時代 縄文時代	掘立柱建物跡、柱列 板塙跡・土坑 土坑	須恵器、土師器 縄文土器・石器					



付図 長森丘陵西部の地形と第117次調査区配置